牛頸土地区画整理事業地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 V

牛頸月ノ浦窯跡群

一付. 小田浦28地点—— 大野城市文化財調査報告書 第39集

1993

大野城市教育委員会

牛頸土地区画整理事業地内 埋蔵文化財発掘調査報告書V

牛頸月ノ浦窯跡群

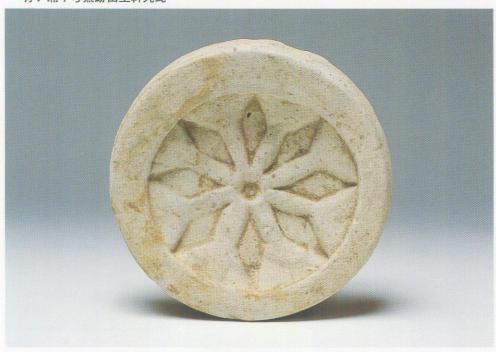
一一付. 小田浦28地点—— 大野城市文化財調査報告書 第39集

1993

大野城市教育委員会



月ノ浦|号窯跡出土軒丸瓦



同上

牛頸土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第5集を刊行することができました。今回は須恵器だけではなく、瓦を同時に焼成していた窯跡の報告書です。月ノ浦 I 号窯跡からは、丸瓦・平瓦にまざって極めて特異な軒丸瓦と九州では最古例に属する鴟尾片が出土して注目を集めました。また、小田浦28地点からも初期の瓦や、あまり例を見ない種々の土製品が出土しています。これら2地点以外でも牛頸窯跡群内の窯跡や集落跡から瓦類の出土が知られています。7世紀代に当地方でも瓦が焼成されていることは、律令制確立に向かう時期の筑前の歴史を解明する上で重要な鍵の1つになるものと思います。これらの資料が学術的に貴重なものとして検討され、さらにその成果が市民へ還元されることを願っております。

さて、月ノ浦窯跡出土瓦類の整理・報告文執筆は九州歴史資料館調査課長の栗原和彦氏に引き受けていただきました。貴重な資料の報告はその道の専門家の方にお願いした方が良いと考えたからです。この度その成果を刊行するに当たって栗原氏に改めて感謝の意を表するしだいです。

また、調査費の負担を含め、多大のご協力を賜わりました牛頸土地区画整理組合、 地権者の方々、地元牛頸区の皆さん、工事に当たられた土木会社の皆さん、調査に際 して指導・助言をいただいた福岡県教育委員会その他関係各位に対しまして心から 感謝申し上げます。

平成5年3月31日

大野城市教育委員会 教育長 久 野 英 彦

例 言

- 1. 本書は牛頸土地区画整理組合(理事長 戸渡朋來)より委託を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2. 遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。
- 3. 遺物実測は秀嶋和子、竹林りさ、製図は同人と河鍋洋子、拓本は井手美智子、牟田昌子が担当した。
- 4. 遺物観察表は秀嶋が担当した。
- 5. 本書の執筆は、月ノ浦 I 号窯跡出土瓦の整理作業を九州歴史資料館調査課長栗原和彦氏に引き受けていただいたため、Ⅲ-(2)とV-(1)を栗原氏が、その他並びに編集を舟山良一が担当した。
- 6. 本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の2.5万分の1『福岡南部』・ 『不入道』、20万分の1『福岡』を使用した。

本文目次

Ι.	はじめに	1
	(1) 報告に際して ······	1
	(2) 調査の経過	2
▮.	位置と環境	6
${\rm I\hspace{1em}I} \ .$	調査の結果	9
	(1) 調査概要	9
	(2) 月ノ浦 [号窯跡(栗原和彦)	9
	(3) 小田浦28地点	22
	(4) その他の遺構・遺跡	29
\mathbb{N} .	牛頸窯跡群内の瓦	31
٧.	まとめ	42
	(1) 各遺構の時期	42
	(2) 月ノ浦 [号窯跡出土瓦について(栗原和彦)	44
	(3) 牛頸窯跡群出土瓦について	49

表 目 次

- 表 1. 牛頸土地区画整理事業地内遺跡地名表
- 表 2. 牛頸周辺遺跡地名表
- 表 3. 牛頸窯跡群内瓦出土遺構一覧表

図版目次

図版 1	(1)	月ノ浦[号窯跡調査前
	(2)	月ノ浦I号窯跡調査前
図版 2	(1)	月ノ浦I号窯跡調査後
	(2)	月ノ浦「号窯跡灰原
図版 3	月ノ	· 浦 I 号窯跡出土須恵器

- 図版 4 月ノ浦 I 号窯跡出土須恵器
- 図版 5 月ノ浦 1 号窯跡出土須恵器
- 図版 6 月ノ浦 1 号窯跡出土須恵器
- 図版 7 月ノ浦 I 号窯跡出土須恵器
- 図版 8 月ノ浦 1 号窯跡出土須恵器、土坑墓出土土師器
- 図版 9 月ノ浦 1 号窯跡出土瓦
- 図版10 月ノ浦 I 号窯跡出土瓦
- 図版11 月ノ浦 [号窯跡出土瓦
- 図版12 月ノ浦 1 号窯跡出土瓦
- 図版13 月ノ浦 1号窯跡出土瓦
- 図版14 月ノ浦 I 号窯跡出土瓦
- 図版15 月ノ浦 I 号窯跡出土瓦
- 図版16 月ノ浦 1 号窯跡出土瓦
- 図版17 月ノ浦 1号窯跡出土瓦
- 図版18 月ノ浦 | 号窯跡出土瓦・鴟尾
- 図版19 月ノ浦 | 号窯跡出土鴟尾
- 図版20 月ノ浦 1 号窯跡出土鴟尾
- 図版21 (1) 小田浦28地点
 - (2) 小田浦28地点灰原断面
- 図版22 (1) 小田浦28地点灰原堆積状況
 - (2) 小田浦28地点灰原堆積状況
- 図版23 小田浦28地点出土須恵器
- 図版24 小田浦28地点出土須恵器
- 図版25 小田浦28地点出土須恵器
- 図版26 小田浦28地点出土須恵器
- 図版27 小田浦28地点出土須恵器
- 図版28 小田浦28地点出土須恵器・石製品
- 図版29 小田浦28地点出土瓦
- 図版30 小田浦28地点出土瓦
- 図版31 小田浦28地点出土瓦
- 図版32 小田浦28地点出土瓦
- 図版33 小田浦28地点出土瓦
- 図版34 小田浦28地点出土瓦

図版35	小田浦28地点出土瓦
図版36	小田浦28地点出土円筒状土製品
図版37	小田浦28地点出土大型円筒状土製品・丸瓦状土製品
図版38	(1) 土坑墓S K01
	(2) 土坑墓S K01遺物出土状態

挿 図 目 次

第1図	牛頸土地区画整理事業地内遺跡分布図(1/1万) 折り込	込み
第2図	牛頸周辺遺跡分布図(1/2.5万) … 折り返	込み
第3図	福岡平野周辺の窯跡分布図(1/20万) 折り込	込み
第4図	月ノ浦 I 号窯跡地形測量図(1/200)	10
第5図	瓦の部分名称	13
第6図	27地点土坑墓SK01実測図(1/30)	30
第7図	神ノ前 2 号窯跡出土須恵器	32
第8図	神ノ前2号窯跡出土瓦	33
第9図	大浦 2 号窯跡出土須恵器	34
第10図	大浦 2 号窯跡出土瓦	35
第11図	野添13号窯跡出土須恵器	36
第12図	野派13号窯跡出土瓦	37
第13図	浦ノ原 4 号窯跡出土須恵器・瓦	38
第14図	浦ノ原遺跡A地区竪穴状遺構出土須恵器・瓦	39
第15図	惣利西遺跡 2 号住居跡出土須恵器・瓦	40
第16図	惣利西遺跡 4 号住居跡出土須恵器・瓦	41
第17図	春日平田窯跡出土瓦	41
第18図	月ノ浦 号窯跡出土瓦と他遺跡出土瓦の厚さによる度数分布比較図	45
第19図	牛頸窯跡群内の瓦出土遺跡(1/ 2.5万)	52
第20図	月ノ浦 号窯跡出土須恵器実測図①(1/3)	53
第21図	月ノ浦 号窯跡出土須恵器実測図②(1/3)	54
第22図	月ノ浦 号窯跡出土須恵器実測図③(1/3)	55
第23図	月ノ浦 号窯跡出土須恵器実測図④(1/3)	56
第24図	月ノ浦 号窯跡出土須恵器実測図⑤(1/6)	57

第25図	27地点土坑墓SK01出土遺物実測図(1/3)	57
第26図	月ノ浦 号窯跡出土軒丸瓦実測図・拓影(1/4)	59
第27図	月ノ浦 I 号窯跡出土丸瓦実測図・拓影(1 / 4)	59
第28図	月ノ浦 号窯跡出土平瓦実測図・拓影①(1/4)	60
第29図	月ノ浦 号窯跡出土平瓦実測図・拓影②(1/4)	61
第30図	月ノ浦 号窯跡出土平瓦実測図・拓影③(1/4)	62
第31図	月ノ浦 号窯跡出土平瓦実測図・拓影④(1/4)	63
第32図	月ノ浦 号窯跡出土平瓦実測図・拓影⑤(1/4)	64
第33図	月ノ浦 号窯跡出土平瓦実測図・拓影⑥(1/4) 折り込	込み
第34図	月ノ浦 号窯跡出土鴟尾実測図・拓影①(1/4)	65
第35図	月ノ浦 号窯跡出土鴟尾実測図・拓影②(1/4)	66
第36図	月ノ浦 号窯跡出土鴟尾実測図・拓影③(1/4)	67
第37図	小田浦28地点出土須恵器実測図①(1/3)	69
第38図	小田浦28地点出土須恵器実測図②(1/3)	70
第39図	小田浦28地点出土須恵器実測図③(1/3)	71
第40図	小田浦28地点出土須恵器実測図④(1/3)	72
第41図	小田浦28地点出土須恵器実測図⑤(1/3)	73
第42図	小田浦28地点出土須恵器実測図⑥(1/3)	74
第43図	小田浦28地点出土須恵器実測図⑦(1/6)	75
第44図	小田浦28地点出土遺物実測図(1/3)	75
第45図	小田浦28地点出土丸瓦実測図・拓影(1/4)	77
第46図	小田浦28地点出土平瓦実測図·拓影①(1/4) ······	78
第47図	小田浦28地点出土平瓦実測図・拓影②(1/4) … 折り込	込み
第48図	小田浦28地点出土平瓦実測図・拓影③(1/4) … 折り込	込み
第49図	小田浦28地点出土平瓦実測図·拓影④(1/4) ······	79
第50図	小田浦28地点出土平瓦実測図・拓影⑤(1/4)	80
第51図	小田浦28地点出土平瓦実測図・拓影⑥(1/4)	81
第52図	小田浦28地点出土円筒状土製品実測図・拓影①(1/4)	82
第53図	小田浦28地点出土円筒状土製品実測図・拓影②(1/4)	83
第54図	小田浦28地点出土丸瓦状土製品実測図・拓影(1/4)	84
第55図	小田浦28地点出土大型円筒状土製品実測図・拓影(1/4) 折り	込み

1. はじめに

(1) 報告に際して

本書は牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書の第5集で、須恵器とともに瓦 を焼成していた窯跡の調査報告書である。牛頸窯跡群の支群については学史的に小字名をとっ て名付けられているので基本的にはそれに従った。

牛頸土地区画整理事業は101.2haに及ぶ大規模な事業で、昭和58年1月27日に組合設立、翌59年10月27日起工式がとり行われた。現在は、かつて山だった場所もモダンな家々に埋め尽くされようとしている。

この事業に伴う発掘調査は昭和57年(1982年)5月の月ノ浦窯跡を嚆矢とし、平成3年 (1991年)3月の胴ノ元古墳まで9年間を要した。今回報告する月ノ浦窯跡は昭和57年(1982年)、小田浦28地点は昭和61年(1986年)に発掘調査したものである。

調査に際しては事業主体者である牛頸土地区画整理組合、工事施工者の間・清水 J V、当時 地元在住で須恵器窯跡の位置を教えていただいた前田軍治氏、大野城市区画整理課その他地元 牛頸区の皆様に多大なご協力を得た。また、遺物整理に関しては福岡大学教授小田富士雄先生、 福岡県文化課参事補佐高橋章、岩瀬正信、九州歴史資料館副館長石松好雄、調査課長栗原和彦 各氏を始めとして岡山理科大学助教授亀田修一、京都国立博物館森郁夫、国立奈良文化財研究 所大脇潔氏を始めとする技官諸氏、埼玉県教育委員会酒井清治氏等多くの方々の指導・助言を 得た。特に栗原氏には、月ノ浦窯跡出土の瓦の整理、原稿執筆を引き受けていただいた。厚く 感謝の意を表したい。

本市教育委員会歴代の調査体制は以下のとおりである。

 教育長
 二
 宮
 親
 卯

 教育部長
 後
 藤
 幹
 生

 村
 上
 章
 門

 助
 村
 店
 門

 計
 原
 美
 町

 社会教育課長
 井
 原
 美
 町

 協
 部
 弥
 少

 協
 野
 四
 四
 四

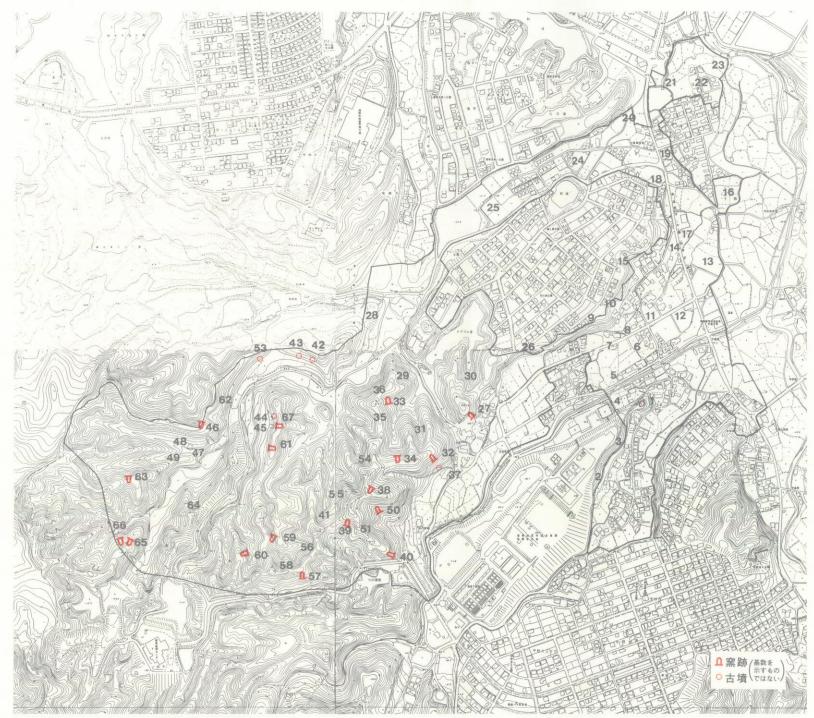
社会教育課長補佐・係長 赤星健彦 安 垣 巧 高 青 木 克 正 白水岩人 庶務担当主査・主事 後藤秀規 髙橋裕司 浦山敏弘 調査担当技師 舟 山 良 一 向 直 也 徳 本 洋 一 同 嘱託 横大路 俊 明 下 村 精 一 秀 嶋 和 子

(2) 調査の経過

各年度の調査経緯は以下のとおりである。

○昭和57年度(1982年度)の調査

1. 月ノ浦 号窯跡	5~6月
2. 分布調査	10~11月
3. 後田古墳群 (2~4号) (42・43地点)	11~翌年2月
○昭和58年度(1983年度)の調査	
1. 小田浦窯跡群(31~34地点)	11~翌年2月
○昭和59年度(1984年度)の調査	
1. 下ノ原遺跡(20・24・25地点)	8月
2. 小田浦窯跡群	11~翌年 2月
○昭和60年度(1985年度)の調査	
1. 小田浦窯跡群(37・40・57地点)	10~翌年 2 月
2. 後田窯跡群(59・60・63地点)	$2\sim3$ 月
○昭和61年度(1986年度)の調査	
1. 後田窯跡群(61・65・66・45・46地点)	4~10月
2. 小田浦窯跡群(28地点)	10月
3. 後田古墳群(44・42・43・53地点)	10~2月
4. 小田浦古墳群(37地点)	2~3月



第1図 牛頸土地区画整理事業地内遺跡分布図 (1/1万)

○昭和62年度(1987年度)の調査

1. 塚原遺跡群(13地点)

4~翌年3月

2. 畑ヶ坂遺跡(14地点)

6月

○昭和63年度(1988年度)の調査

1. 塚原遺跡群(13地点)

4~5月、8月

2. 畑ヶ坂遺跡(14地点)

5~8月

3. 日ノ浦遺跡(16地点)

9~翌年2月

4. 日ノ浦Ⅱ遺跡(22地点)

11月、翌年3月

5. 塚原遺跡(12地点)

2月

○平成元年度(1989年度)の調査

1. 塚原遺跡(12地点)

4月

2. 日ノ浦 Ⅱ 遺跡 (22地点) 5~6月

3. 日ノ浦遺跡(16地点)

6~翌年3月

○平成2年度(1990年度)

1. 塚原遺跡群(13地点)

7~12月

2. 胴ノ元古墳(1地点)

翌年1~3月

表 1 牛頸土地区画整理事業地内遺跡地名表 (S:昭和、H:平成)

Nα		遺	跡	名		調	査	年上	£	遺跡の内容		備考
1	胴	,	元	古	墳	1990 (H.	2)			円墳1基(横穴式石室)	(古)	『牛頸胴ノ元 古墳』所収
2	胴	,	元;	窯 跡	群					須恵器窯跡 1 基以上、未確認	(古)	
3	胴	,	元	遺	跡					散布地、未確認	(組)	
4	īΕ	楽	寺	遺	跡	1990 (H.	2)			試掘調査で確認できず		
5						1988 (S.	63)			"		
6						1988 (S.	63)			"		
7						1988 (S.	63)			"		
8						1988 (S.	63)			"		
9	畑	7	坂	窯 跡	群					須恵器窯跡 窯体確認できず	(奈)	
10			"							" .	(奈)	
11						1988 (8.	63)			試掘調査で確認できず		
12	塚	J	原	遺	跡	1988 • 89	(S.	63 · 3	H. 1)	集落跡	(平~鎌)	
13	塚	D	原	遺	跡	1987 • 88	(S.	62 • 6	63)	集落跡(住居跡26軒)古墳(20基)	(古~奈)	

Na	遺跡名	調査年度	遺 跡 の 内 容	備 考
14	畑 ヶ 坂 遺 跡	1988 (S. 63)	集落跡 (古~奈)	
15	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡 窯体確認できず (奈)	
16	日ノ補遺跡	1988 · 89 (S. 63 · H. 1)	集落跡(住居跡22軒) (古~奈)	
17	畑ヶ坂遺跡	1987 (S. 62)	集落跡	
18	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡確認できず	
19	日ノ補遺跡			
20	下ノ原遺跡	1984 (S. 59)	試掘調査で確認できず	
21	日ノ浦【遺跡	1986	u	
22	"	1988 · 89 (S. 63 · H. 1)	甕棺墓、土坑墓、古墳 (弥~古)	
23	"		流れ込みの土器多数出土 (平)	
24	下 ノ 原 遺 跡	1984 (S. 59)	試掘調査で確認できず	
25	"	"		
26	月 ノ 補 古 墳		円墳 1 基(横穴式石室)1979(S. 54)調査 (古)	『牛頸中通遺 跡群』』所収
27	月 ノ 浦 窯 跡	1982 (S. 57)	窯体削平、灰原から須恵器、軒丸瓦、平瓦、鴟尾(古)	
28	小田浦窯跡	1986 (S. 61)	灰原のみ、須恵器、瓦	
29	柳ヶ原古墳群	1983 (S. 58)	確認できず、尾根の凹凸の見誤りと思われる	
30	後田熊跡群			
31		1983 (S. 58)	試掘調査で確認できず	
32		"	" 、弥生土器散布	
33	小田浦窯跡群	" .	須恵器窯跡 1 (古)	『牛頸小田浦 窯跡群』所収
34	"	"	〃 1、(窯体ほとんど流失) (古)	"
35	柳ヶ原古墳群	1983 (S. 58)	確認できず	
36	"	"		
37	小田浦古墳群・窯跡群	1985 · 86 (S. 60, 61)	円墳3基(横穴式石室)、須恵器窯跡2基 (古)	"
38	小田浦窯跡群		須恵器窯跡 2 基、1976(S. 51)立正大学調査 (古)	
39	"		" (古~奈)	
40	"	1986 (S. 61)	須恵器窯跡 2 基、 1 基は未操業 (古)	"

Na.	遊		名		調査年度	遺跡の内容	備考
41	小 田	浦窯		群	1986 (S. 61)	試掘調査で確認できず	
42	後田	古	墳	群	1982 (S. 57)		『牛頸後田・ 小田補古墳群 』 所収
43		"			1986 (S. 61)	円墳10基(横穴式石室7、小石室3) (古)	"
44		"			"		"
45	後田	窯	跡	群	1986 (S. 61)	須恵器窯跡 2 基 (古~奈)	『牛頸後田窯 跡群』所収
46		"	-		1986 (S. 61)	" 1基(灰原のみ) (古)	"
47					1985 (S. 60)	1	
48					n	試掘調査で確認できず、窯体と見えたのは炭焼窯らし きもの	
49					"		
50	小 田	浦祭	. 跡	群	1984 (S. 59)	須恵器窯跡2基 (古)	『牛頸小田浦 窯跡群』所収
51		"			1984 (S. 59)	窯体流失か	
52					1986 (S. 61)	試掘調査で確認できず	
53	後日	古古	墳	群	"	円墳1基(横穴式石室)	
54					"	試掘調査で確認できず	
55					"	· ·	
56					"	II .	
57	小。田	補祭	基	群	"	須恵器窯跡1基(ほとんど流出) (奈)	"
58					ti .	試掘調査で確認できず	G 1 57 (/ m // m
59	後日	1. 窯	跡	群	"	須恵器窯跡 3 基 (奈)	『牛頸後田窯 跡群』所収
60		"			"	" 1基 (古)	"
61		"			1987 (S. 62)	" 5 基 (古~奈)	"
62					1986 (S. 61)	試掘調査で確認できず	
63	後日	黑 黑	跡	群	"	須恵器窯跡 2 基 (古~奈)	"
64					"	試掘調査で確認できず	
65	後日	第	跡	群	1987 (S. 62)	須恵器窯跡1基 (古)	n'
66		"			".	(奈)	"
67					1986 (S. 61)	試掘調査で確認できず	

(縄) :縄文時代、(弥) :弥生時代、(古) :古墳時代、(奈) :奈良時代、(平) :平安時代、(鎌) :鎌倉時代

Ⅱ. 位置と環境

月ノ浦・小田浦窯跡群は九州最大規模を有する牛頸窯跡群の一支群である。牛頸窯跡群は大野城市大字牛頸・上大利を中心に北は春日市、東は太宰府市の一部を含む東西 4 km、南北4.6 kmの範囲にある大窯跡群で、総数300基以上の窯跡があると考えられている。既に調査された窯跡だけでも200基を越えている。地形的には、標高477.9mの牛頸山を最高所にして、北へのびる丘陵と牛頸川、平野川、平田川などが造り出した狭長な低地が複雑に入り組んだ地形をなしている。このため数多くの小谷が造り出され、窯を築くに適している。また、大宰府政庁まで 4 kmの位置にあり、奈良時代に属する窯跡の多さの起因の 1 つに政治的背景があったことを推測させる。牛頸窯跡群が形成されだすのは 6 世紀中頃(小田富士雄氏編年の II A 期)で、 8 世紀後半まで須恵器が焼かれ続けた。

窯は須恵器だけを焼いたものがほとんどをしめるが、中に瓦も焼成していたものがある。現在判明しているのは神ノ前2号窯跡(第2図.19)、野添13号窯跡(26)、大浦2号窯跡(27)、月ノ浦1号窯跡(63)、小田浦28地点(59)、大谷窯跡(65)、浦ノ原4号窯跡(57)、春日平田窯跡(11)の8基である。また、牛頸窯跡群に含めるべきか迷う位置にある春日市のウトグチ窯跡では瓦とともに鴟尾も焼成されていた。他に窯跡からの出土ではないが、同じく春日市の惣利西遺跡の住居跡からは土器とともに瓦が出土している。これらはいずれも初期の瓦に属し、通常の瓦工人とは違う工人達によって作られたと思われ、その系譜や、消費地そして使われたであろう建物の性格等の究明が望まれるところである。

表 2 牛頸周辺遺跡地名	表
--------------	---

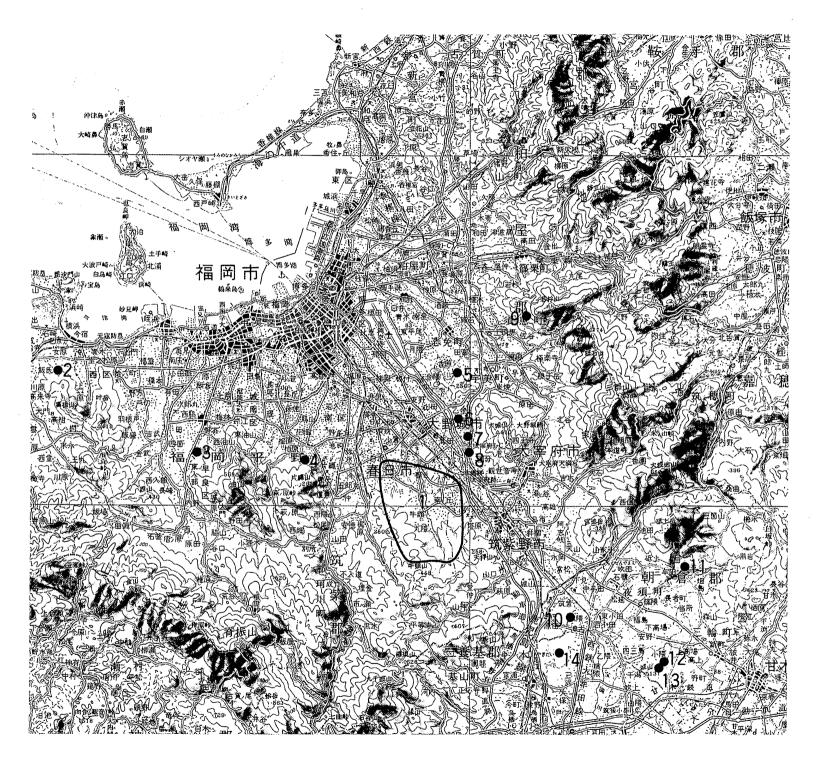
1	天	神	山古	墳	群	春日市大	字上白水	前方後円墳、円墳	
2	天	神	山	水	城	"	"	土塁	(国指定史跡)
3	大	±	居水	城	跡	"	"	土塁	(国指定史跡)
4	ゥ	トク	゛チ;	窯 跡	群	"	"	窯跡 2 基以上	1987春日市教委調査 (2基)
5	観	音	山古	墳	群	那珂川町	大字中原他	前方後円墳、円墳 100基以上	1972県教委、那珂川町教委調査
6	西	浦	古	墳	群	春日市大	字上白水	円墳 4 基	1981春日市教委調査
7	大	牟	田池	黑	跡	" 大	字春日	窯跡 1 基以上	
8	惣	利	窯	跡	群	"	"	窯跡15基以上	1977~80春日市教委調査 (9基)
9	惣	利	遺	跡	群	"	"	古墳~歷史時代住居跡	1979・80春日市教委調査 縄文~中世
10	向	谷	遺	跡	群	春日市大	字春日	整棺・方墳、弥生~歴史時代住居跡	1979~82春日市教委調査

11	春日平田窯跡群	" " .	窯跡21基 ————————————————————————————————————	1982~85春日市教委調査(21基)
12	九 州 大 学 筑紫キャンパス内遺跡	春日市・大野城市	集落、講等、縄文~奈良	1978~九州大学調査
13	梅頭窯跡	大野城市大字上大利	窯跡1基	消滅
14	上 園 遺 跡	11 11	散布地	1985~大野城市教委調査
15	出口窯跡	" "	窯跡1基	
16	唐 土 遺 跡	" 下大利	奈良時代の土器溜め	1989大野城市教委調査
17	吉 松 古 墳	太宰府市大字吉松	円墳1基	
18	水	太宰府市・大野城市	土塁	(国指定特別史跡)
19	神ノ前窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡 2 基	1978太宰府市教委調査(2基)
20	篠 振 窯 跡	" "	窯跡 2 基	1974・85太宰府市教委調査(2基)
21	尊 田 窯 跡	" "	窯跡	
22	長 浦 窯 跡	" 大字向佐野	窯跡1基	1972福岡県教委調査(1基)
23	向 佐 野 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	同 上 (3基)
24	宮ノ本窯跡群	" 大字向佐野	窯跡 8 基	1979・84太宰府市教委調査(8 基)
25	谷 蟹 窯 跡	大野城市大字上大利	窯跡 1 基	消滅
26	野添窯跡群	" "	窯跡10基以上	1969福岡県教委調査 (2基) 1986大野 城市教委調査 (3基)
27	大 補 窯 跡 群	" 大字牛頸	窯跡 5 基	1968福岡県教委調査(2基)
28	平田窯跡群	" "	窯跡9基	1972立正大学調査 (4基) 1979~81 大野城市教委調査 (4基)
29	東 補 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	1968国士館大学調査(3基)
30	上平田窯跡群	" "	窯跡 4 基	1972福岡県教委調査(4基)
31	中 通 窯 跡 群	" "	窯跡12基以上	1979・80県教委・大野城市教委調査 (6基)
32	中通古墳群	" . "	円墳19基	1972・73福岡チブサン会調査(13基) 1975県教委調査(基) 1979・80県教委・大野城市教委調査 (5基)
33	原 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	土取りで灰原の一部を残すのみ
34	ハセムシ窯跡	11 11	窯跡30基以上	1987·88大谷女子大学·大野城市教委 調査(15基)
35	井 手 窯 跡 群	" "	窯跡39基以上	1982~86県教委調査 (31基) 1988大野 城市教委調査 (3基)
36	道ノ下窯跡群	" "	窯跡10基以上	1982~86県教委調査(10基)
37	足洗川窯跡群	" "	窯跡 5 基以上	1982~86県教委調査(4 基)
38	笹 原 窯 跡 群	" "	窯跡 4 基以上	同 上 (4基)
39	長者ヶ原窯跡群	" "	窯跡16基	同 上 (16基)
L	<u> </u>			

	γ			
40	野口窯跡群	太宰府市大字大佐野	窯跡 2 基以上	
41	円 入 遺 跡	春日市大字春日	古墳時代住居跡	1981春日市教委調査
42	惣 利 古 墳	" "	円墳1基	消滅(横穴式石室・須恵器出土)
43	春日平田遺跡群	" "	弥生~歷史時代住居跡、古墳	
44	華 無 尾 窯 跡 群	大野城市大字牛頸	窯跡 2 基	消滅
45	華無尾遺跡	" "	散布地	旧石器〜縄文(ナイフ形石器石鏃等出 土)
46	塚原古墳群	春日市大字春日	円墳4基	前方後円墳1基・円墳2基か?
47	日ノ補遺跡	大野城市大字牛頸	散布地	縄文~中世
48	畑 ヶ 坂 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	1 基消滅
49	畑ヶ坂古墳	" "	円墳1基	
50	塚 原 遺 跡 群	" "	円墳10基以上 古墳時代・奈良時代住居跡	1987大野城市教委調査
51	胴 ノ 元 古 墳	" . "	円墳 1 基	
52	胴 ノ 元 窯 跡 群	" "	窯跡 2 基	
53	城 ノ 山 窯 跡	" "	窯跡1基以上	窯本体が空洞で露出している
54	楠木遺跡	春日市大字下白水	塑 棺墓	弥生(中期)
55	大 堤 古 墳 群	" 大字白木	円墳3基	(満水時水役)
56	イヶ谷古墳群	" 大字上白水	円墳 3 基以上	(春日原ゴルフ場内)
57	浦ノ原窯跡群	" 大字下白水	窯跡10基以上	1978春日市教委調査(8基)
58	浦ノ原遺跡	" "	散布地	土師・須恵器
59	後田紫跡群	大野城市大字牛頸	窯跡16基以上	1986大野城市教委調査(16基)
60	後田古墳群	" "	円墳11基	1982・86大野城市教委調査
61	小田浦窯跡群	11 11	窯跡13基以上	1976立正大学調査 (4基) 1982~86 大野城市教委調査 (9基)
62	小田浦古墳群	" "	円墳 3 基	1976立正大学調査(1基)1987大野城 市教委調査(2基)
63	月ノ浦窯跡群	" "	窯跡 2 基	1982大野城市教委調査(1基)
64	月 ノ 浦 古 墳	" "	円墳 1 基	消滅(横穴式石室)
65	大 谷 窯 跡 群	" "	紫跡12基以上	1971国土館大学調査(4基)
66	石 坂 窯 跡 群	11 11	窯跡20基以上	1983・89・90 大野城市教委調査 (7基)
67	足洗川遺跡	n n	散布地	旧石器(石刃出土)
68	上大利水城	" 上大利	土塁	(国指定特別史跡)
69	出 口 遺 跡	" 下大利	弥生~奈良の集落跡	1989大野城市教委調査、『出口遺跡』
_		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		



第2図 牛頸周辺遺跡分布図(1/2.5万)



第3図 福岡平野周辺の窯跡分布図(1/20万)

- 1. 牛頸窯跡群
- 2. 新開窯跡
- 3. 重留窯跡
- 4. 四十塚窯跡群
- 5. 岩長浦窯跡群
- 6. 乙金窯跡群
- 7. 雉子ヶ尾窯跡群
- 8. 裏ノ田窯跡群
- 9. 須恵窯跡群
- 10. 限西小田窯跡群
- 11. 八並窯跡群
- 12. 小隈窯跡群
- 13. 山隈窯跡群
- 14. 苅又窯跡群

Ⅲ.調査の結果

(1) 調査概要

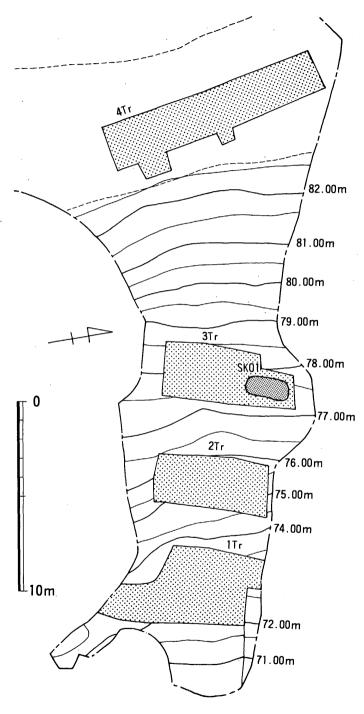
月ノ補窯跡群は既述のとおり昭和57年(1982年)5~6月に発掘調査したものである。しかし、当該地は既に数年前から徐々にではあるが土砂採取の行われていた所で、土取りされた崖面に灰層が見え、下に須恵器片が散乱している状態であった。このため調査の数ヶ月前から土砂採取を控えてもらい、調査に臨んだものである。しかし、灰層のある斜面下には近接して人家があり、伐根あるいは表土をはぐための重機を入れられる状況ではなかった。このため、窯跡、灰原の広がりを把むために等高線に添って頂上までトレンチを入れた。この結果、灰原の広がりは狭く、また窯体を検出することはできなかった。このことから、窯体は土砂採取時に既に削り取られたものと判断された。このため調査は、灰層の掘り上げ、頂部平坦面の遺構の有無、更に窯体が本当にないかの確認調査の3点にしぼって行った。この結果、灰層中からは須恵器とともに瓦、鴟尾が出土し、中腹からは平安時代の土坑墓が1基検出され、頂部平坦面には遺構はないことが確認された。窯体は検出されなかったが、消滅した窯跡を月ノ浦1号窯跡とする。また、調査時に戸渡朋來氏より当該地で表採したとされる須恵器蓋杯セットの提供があった。瓦の製作年代を知る上で重要な資料と思われるので、本報告書に掲載した(詳しくは後述)。

小田浦28地点は昭和61年(1986年)10月に発掘調査したものである。調査に先立つ数年前、地元在住で窯跡の研究をしておられた前田軍治氏に案内してもらい、灰層と遺物の散布を確認していた。灰層の広がりから窯体は複数あるとの予想で表土をはいだところ、奇妙なことに窯体は検出されなかった。かなり急で危険な斜面であったが、通常より念を入れて検出作業を行った。しかし、窯体はやはり見つからなかった。だが、灰層中からは多くの須恵器と共に互、そして用途不明のあまり類例を見ない形の土製品がいくつか出土した。ここでは窯跡としての番号を付さず、小田浦28地点出土遺物として報告する。

(2) 月ノ浦 | 号窯跡 (27- | 号窯跡)

A. 遺 構

前述のように窯体は既に消滅していた。灰原はNa 1トレンチとNa 4トレンチで検出された。 灰原はこれ以上北側や西側(斜面上方)に広がっているとは考えにくく、窯体が南側の削平部 にあったことを推測させた。灰層は薄かった。



第4図 月ノ浦 [号窯跡地形測量図(1/200)

B. 遺物

すべて灰原からの出土で、整理箱15箱の量であった。 この内須恵器が9箱、丸瓦・平瓦類が5箱、鴟尾が1 箱という割合である。鴟尾はNo.1トレンチ南東部でまとまって出土した。また、第20図、24・26、第21図、50は隣接地の地権者戸渡朋來氏が以前採集したものということで提供を受けたものである。

類恵器の各器種の説明に ・大のように体験を をは、特に不動したが、 が、ないでは、ないではないではないではないではないではないではないでする。 は、特にではないないではないではないでする。 は、かかまりを持たを持めたいではないでものではないではないが、 を B類、更に B類のをいいりまする。 を B類とする。 を B類とする。 を B類とする。 を B類とする。

1. 須恵器(第20~24図、 図版3~8)

杯蓋 (1~26)

1~23がA類、24・25が B₂類、26がB₁類である。 A類は口径が $11.2\sim12.9$ cmだが12cm以下の方が多い。形態的には天井部から口縁端部まで丸味を持ってそのまま終わるもの($1\sim5$ 等)、口縁部が折れ曲がるように垂直気味に立つもの(6等)、天井部が平坦になるもの(11等)、天井部と口縁部の間で窪む感じになるもの(15、23等)がある。技法的には天井部外面はすべてヘラケズリする。 B_2 類の $24\cdot25$ については、最大径はともに11.1cmであるが、24は天井部外面をヘラケズリするのに対し、25は行わずにヘラ切り後ナデるだけである。 B_1 類の26は最大径10.4cmで、天井部外面を回転ヘラケズリする。出土量はA類が圧倒的に多い。

杯身 (27~53)

27~49がA類、50~53がB類である。A類は丸い体部と平坦気味の底部を持ち、内傾してそれほど長くない立ち上がりを持つ。立ち上がりの形態に、28・38のように基部から先端までほとんど同じ厚さのものと、31・39のように基部が太く先端で細くなるものがある。最大径が11.6cm~13.8cmの大きさである。底部外面まで残存しているものはすべて回転ヘラケズリが見られる。その他の部分は回転ナデ、ナデを行なう。B類は外面にカキ目を施す52・53とそうでないものに分かれる。50は口径9.7cmを測るもので、底部はヘラ切り後ナデ、その他を回転ナデ、ナデを行なう、51は底部外面を手持ちのヘラケズリを行なう。53は復元口径9.2cmで体部に3条の沈線をめぐらす。

高杯 (54~62)

杯部があるものはすべて無蓋高杯である。杯部外面にカキ目を施すものとそうでないものの違いがある。カキ目のない54・55には沈線が見られる。脚端部の形態にもきちんと稜を作って終わるもの(54)、丸く終わるもの(56・60)折れ曲がるもの(61)など多様である。

璲 (63∼66)

やや扁球形の胴部と大きく外反する口頸部から成るものである。口縁部と頸部の境は段と沈線で画されるが、それほどシャープではない。胴部には中央よりやや上に一孔を穿ち、その高さに2条の沈線で画した帯状の区画を設けその中に斜位の刺突文をめぐらす。

椀 (67)

復元口径10.1cm、器高6.0cmを測るもので1条の沈線がめぐる。底部外面をヘラケズリし、その他を回転ナデ、ナデを行なう。

平瓶 (68~70)

69・70は口頸部のみであるが、平瓶と考えた。69にカキ目を施すが、その他は回転ナデ、ナデである。

鉢 (71)

口縁部がややすぼまる扁球気味の形態を持つもので、胴部中央付近に沈線状の浅いくぼみが 2条めぐる。底部外面はヘラケズリする。

壺 (72・73)

72は胴部上位にカキ目を施す。その下位は回転ヘラケズリを行なう。広口壺の部類に入ると思われる。73は直口壺と考えられるが、胴部下位に回転ヘラケズリを行なう。

甕 (71~83)

口径から74~79は中型の甕(口径が20cm前後)、80~83は大型の甕(口径40cm以上)と考えられる。大型甕の頸部外面には沈線で上下を区画された中にヘラによると考えられる「連続斜線文」が付けられている。口縁端部の形態は多種あるが、中型甕の方が概してシンプルである。

2. 亙.

i. はじめに

月ノ浦 I 号窯の瓦類は灰原からの出土である。軒丸瓦 2 点、丸瓦片・平瓦片が整理箱 5 箱分、 鴟尾の破片が 1 箱分ほどが出土した瓦の総量である。

すでに石松好雄・舟山良一によって軒丸瓦 2 点が紹介されている。この軒丸瓦 2 点は瓦当文様がこれまでに見たことのない特異なものであることや、共伴の須恵器から北部九州地方では神ノ前 2 景祭や大浦窯・伊藤田窯とならんで最古級の瓦資料であるという点で注目されていた。

為に石松・舟山両氏の論考以後もかなり多方面の研究者が月ノ浦窯跡出土瓦についての論考ないしは紹介をしておられるものと思う。本来ならば、それ等の1つ1つにあたったうえで本文を作成すべきものと思うが、今日まで知り得たものは少ない。従って、本文は瓦資料の観察結果と事実関係を中心とした概要報告に留まる。

なお、軒丸瓦2点については石松・舟山論考と本文が重複することとなるが、本書が月ノ浦 1号窯出土瓦の概要報告書であるため礼をかえりみず私なりの報告をさせていただいている。 お許し願いたい。

報告文中、丸瓦片・平瓦片・鴟尾片の各部位の名称については下記の論考に従っている。

- ●丸瓦の部分名称 大脇潔 「研究ノート丸瓦の製作技術」 奈良国立文化財研究所学報第49冊 『研究論集 K』 1991
- ●平瓦の部分名称 佐原真 「平瓦桶巻作り」 『考古学雑誌』 第58巻第2号 1972
- ●鴟尾の部分名称 猪熊兼勝・大脇潔・松本修自 『日本古代の鴟尾』 奈良国立文化財研 究所飛鳥資料館 1980

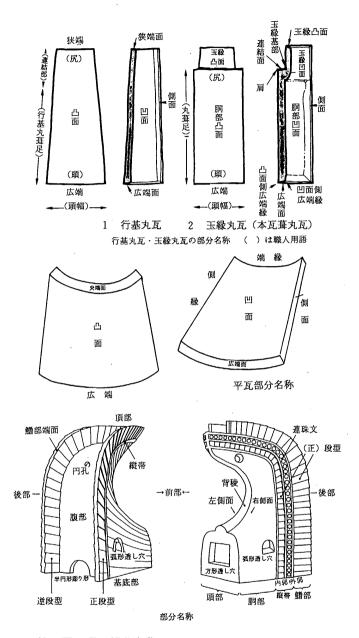
ii 軒丸瓦(第26図,図版9)

軒丸瓦は2点出土している。ともに瓦当面を完全に残している。1は瓦当径13.5cmの単弁九弁である。中房は不正の円形で周縁に沿って3ヶ所棒状の器具で刺突したと思われる蓮子が表現されている。花弁は円形の弁端で、間弁より低く表現されている。円形の弁端に間弁から粘土の張り出したものが、認められるのは、瓦当製作時の粘土のつめかたによるものか笵型その

ものが稚拙に作られたために よるものであろう。間弁は中 房から切離して揆形に表現さ れ高い素文周縁に接続する。 周縁は花弁から0.6cmと高く、 幅1.3~2.0cmが計測される。

互当裏面は、ナデによって 調整されているがかなりの凸 凹があり中央部には無文の円 形の器具で叩打したと思われ る痕を残す。また、笵型に押 込まれた粘土と丸瓦部の粘土 との接合部が円形にヒビ割れ した状況で残っている。丸瓦 部はわずかに残っているが、 この部分に粘土紐巻き上げ技 法により丸瓦が製作された痕 を残している。瓦当下半には いわゆる「一本作り」の技法 に見られる幅1.5cm・高さ1.0 cmほどの凸帯がヘラで切離さ れた状況で残っている。布目 痕は残っていない。丸瓦外面 は縦方向へのヘラ削りによる 調整痕を残している。胎土は 精良で砂粒を含まず灰白色に 堅く焼き上げられている。

2は瓦当径13.5cmの単弁8 弁の軒丸瓦である。中房は丸



第5図 瓦の部分名称

い窪みで表現され、中房からはこれも太い揆形の間弁が派生している。花弁は一辺2.5cmほどの菱形を呈する窪みで表現されている。花弁の端は素文周縁に達している。周縁は花弁・間弁よりも一段高くつくられ、その幅は1.5~2.0cmと一定ではない。瓦当裏面は瓦当笵型に押込んだ粘土と丸瓦部の粘土との接合部分が円形にヒビ割れした状況で残っている。丸瓦部分を欠損

しているが瓦当下半には幅1.5cm・高さ1.5cmほどのヘラで切離された突帯が残っていることから、1と同様の製作技法によったものと考えられる。胎土は少量の砂粒を含むが精良で灰白色に焼き上がり軟質である。

なお、1・2の軒丸瓦については、大脇潔によって「泥条盤築技法」によって作られた軒丸 瓦の例として、また、鈴木久雄は「一本造り軒丸瓦の再検討」のなかでB技法(粘土紐巻きあ げ成形)の例として、神ノ前窯出土の無文軒丸瓦当とともに紹介している。

iii. 丸瓦片・平瓦片

a. 丸瓦片 (第27図、図版 9)

すべての破片数で22片ある。平瓦片の出土量に比較して極めて少量と言える。うち3点が玉縁の部分として認め得るので行基式・玉縁式の2様が併存していることとなる。第27図は、このうちの6点である。1は行基式の破片である。凸面は斜めにヘラ削りされている。凹面には竹状模骨痕を残す。その中央部では横方向に模骨を結束した痕と思われるものがある。側面部は3面の面取りがされている。胎土は少量砂粒を含むものの精良である。淡茶灰色で焼成も良い。

2 も行基式と考えられる丸瓦片である。凸面は縦方向にナデられている。凹面では模骨痕が 段状に残る。また、一部に糸切り痕跡と思われる部分がある。側面は3面の面取りがある。胎 土は1 と同様であり、灰色で焼き上がりも良い。

3 も行基式と考えられる。凸面は須恵器に見られる細やかい格子目の叩打具で叩打されたあと、縦方向にナデられている。凹面は模骨痕と布が寄った状況と思われる痕を残す。側面は 3 面の面取りがされている。胎土は少量の砂粒を含むが精良で灰色に堅く焼き上がる。

4 も行基式丸瓦であろう。広端面を残す数少ない資料である。凸面は 3 と同様の叩打痕を残している。破片下半部に縦方向のナデ痕が認められる。凹面は布目痕が竹状模骨ではないかと思われる状況で波状を呈して残るが、模骨の 1 部は幅広であり明確と言えない。また、広端面近くで布目が寄った部分が認められるが、これも模骨を結束した痕跡とは認めたがたい。側面は 3 面の面取りがある。胎土は少量の砂粒を含むものの精良で、茶橙色で焼成も良い。

5は玉緑式丸瓦の破片である。図示出来た部分は玉縁で胴部に移行する部分を僅かに残している。玉縁の凸面は胴から端部にかけて僅かながら曲線を作り横方向のナデで仕上げられている。凹面は端部で粘土がやや布目よりも高く残っている。端部から3.5cmほどで胴部へ移行する段が出来ているが、このあり方は神ノ前2号窯出土の軒丸瓦と類似していて胴部・玉縁部が一連の粘土で作られたものと考えられる。端面は横方向にへラ削りされていて、やや内傾した平坦面となっている。側面はヘラ削りで平坦となり凹面だけ面取りされている。茶灰色で少量の砂粒を含むが精良な胎土である。焼き上がりも良い。

6は、出土資料中で数少ない布の綴じ合わせ目のわかる資料である。

1~5については、いずれも粘土板を模骨に巻きつける方法で製作されたものと推定されるが2点ほど粘土組巻き上げ作りによって製作されたのではないかと考えられる破片がある。2点に共通して凹面は指によってナデられ布目がすべて消されているうえに、横方向にナデられたことによって凸凹した面となっている。また、うち1点の凸面には幅2cmほどの間隔で横方向のヒビ割れがあること。他の1点の両端の割れかたが粘土組のつなぎ目と考えられる割れ方である。(図版10)

以上、丸瓦では、1では竹状模骨を、2・3では板状の模骨を使用して丸瓦を作っていることで、粘土板を巻きつけて作る方法や粘土紐を巻き上げる方法などいくつかの製作技法が混在しているようだ。

b. 平瓦片 (第28~33図、図版11~18)

出土資料の大半が平瓦片である。大小400片以上ある。破片の接合によって大きさの判明するもの $1\sim2$ 点を除けばすべて破片資料である。

1は端面に一条の断面「U字形」の沈線があり、凸面に不整形ながら顎状の粘土の隆起した部分が作られていることから重弧文軒平瓦の可能性を考えた資料である。ただ、1点だけの出土である。軒瓦としては可能性の範囲を出ないものと考える。この沈線は端面を平坦に作ったのち付けられたもので回転台は使用されていないものと思う。なお、凹面端にもヘラ削りによる面取りがある。凹面の端部付近は横方向に、それより下部は縦方向にナデられ布目痕を消している。凸面は端部が指でおさえ形づくられた顎状の部分があり、下部は縦方向にナデつけられている。若干の砂粒を含むものの胎土は精良である。灰青色で須恵質に硬く焼きあがる。

2は端面を「逆U字形」に作る破片である。この破片からは須恵器ではとも考えられるが、3・4の資料が側面を残し平瓦と考えられることから2も平瓦片と判断した。凸面は平行叩き痕が残る。また、端部近くには粘土紐を継ぎ足した痕が残る。凹面では端部近くに平行叩き痕を残すが、叩き後横方向にナデつけられている。1と同様の胎土・焼成を示す。

3は2と同様の端部の資料である。凸面の一部に格子目の叩き痕を残すが全体を横ナデされている。凹面は端部近くで指による横ナデ、下部はヘラ削りされている。下端の破面は粘土組の接合部を思わせる。胎土には少量の砂粒を含むものの精良である。淡橙灰色でやや軟質である。

4 も端面が 2・3 と同様の資料であるがヘラで切離された側面が弧線状に残っている。凸面は端部近くが横ナデ、下半は縦方向にナデられている。凹面はすべて横ナデであるが、端部近くは土器の口縁の仕上げに近いのに対し、下半は指腹でナデたと思われ凸凹が目立つ。胎土・焼成ともに 3 に類似する。

2~4の資料は、布目・模骨痕が認められない点や薄手に作られている点が共通し、粘土組 巻き上げ技法による可能性が高い資料と思われる。 5 の端面は狭端部であろう。凸面は格子目の叩き痕を残している。凹面はヘラ削りされた端面から曲線状に作られる。小破片で見るかぎり横方向のナデ仕上げのみである。多量の砂粒を含んでいる。灰青色で須恵質に硬く焼き上がっている。

6は端面が内外に面取りされ側面が1部残っている資料である。凸面は縦方向にナデ仕上げされ、側縁近くに整形時についたと思われる布目痕が1部に残る。凹面には幅2cmほどの板状の模骨痕と布目痕を全面に残している。胎土は砂粒を含まず精良である。茶灰色でやや軟質の資料である。

7はヘラ削りされた端面から凸面側に面取りがある。側面を残しているが凸面側に切離された後まで残ったと思われる粘土の張り出しがある。このことから凹面側からナイフを入れて切離したものと推定される。凸面には端面を面取りしたのちさらに幅広いヘラ削りした痕を残している。胴部は縦方向のナデ仕上げである。凹面は指で布目をスリ消した痕が縦方向に残り波状面を呈している。胎土・焼成ともに6に近い。

8は端面をヘラ削りしているが、全面に及ばず乾燥時についた植物質の圧痕が残っている。 端面の両側は幅広に面取りされている。側面の1部が残る。凸面胴部はヘラで幅広く縦方向の 削り痕が面取り状に残る。凹面は指で縦方向にナデつけるが指腹の痕が波状面を呈している。 比較的厚手の資料で、胎土・焼成ともに6・7に近い。

9は広端面を図の上にとった。端面にはヘラ削り痕と乾燥時についた植物質の圧痕を残す。 側面は切離されたのち凸面側を幅広く削っているため1.0cmほどの狭い側面をかたちづくる。 凸面は縦および斜めに幅広のヘラ削りがされたあと縦方向にナデ仕上げされている。凹面には 模骨・布目痕を残している。側縁には幅1.0cmほどのヘラ削り痕が残る。胎土・焼成とも8に 近い。

10は狭端面を図の上にとった。側面の下部に分割する時にナイフが止まった痕が残り、ナイフは狭端面側から広端面側に動いたことがわかる。凸面では端部に張り出した粘土が面取りされている。胴部には縦方向に指でナデられた痕が波状に残るが、端面の面取り近くでは横ナデ調整されている。凹面も指で縦方向にナデられた痕が波状に認められるが最終的に横方向にナデ仕上げされ、布目や模骨の痕は消されている。胎土に少量の砂粒を含むが精良である。淡茶灰色でやや軟質に焼き上げる。

11は焼き歪みにより凹凸両面が通常とは逆のカーブとなっている。凸面は横方向に指ナデされた痕が残る。側縁近くでは切離された時に張り出した粘土が縦方向に小さな高まりとなってナデつけられている。凹面では端面から内側に張り出した粘土が三角突帯状に残っている。布目痕を残すが模骨の痕はない。少量の砂粒を含むが粘土は精良であり、灰青色で須恵質に焼き上る。

12の端面および側面は切離されたままの状況である。凸面は1の平瓦片の顎状の部分に似て指でおさえた痕が残る。胴部は縦方向のナデである。凹面胴部では縦方向の指のナデが布目・

模骨を消している。端面近くは薄く横方向にヘラ削りされている。少量の砂粒を含むが精良な 胎土である。淡灰色で軟質に焼き上る。

13は広端面が残っている。端面は全面に乾燥時についた植物質の圧痕が残っている。凸面では端面近くで張り出した粘土がおさえられ、低い突帯状を呈している。胴部は縦方向の指のナデである。凹面でも端面近くは張り出した粘土が、折りかえされた状況で残る。胴部には布目・模骨の痕が認められる。布目は2~3ヶ所で皺寄せられた状況で横方向の溝状を呈している。これとは別に粘土紐の継目と理解出来る痕がある。凹凸両面が凸凹の状況であるのも粘土組巻き上げ技法によるものと思われる。胎土には少量の砂粒を含む。灰青色で須恵質に焼き上る。

14は側縁部が特に厚い。狭端面を残す資料である。凸面では端面近くが横方向にヘラ削りされ胴部は縦方向にナデられている。側縁近くに平行叩き痕が残る。凹面は端面近くに面取り状のヘラ削りが残る。布目・模骨痕を残している。胎土・焼成とも13に近い。

15は図の上が広端面となろう。凸面は平行叩き痕のままである。凹面は端面に沿って面取り状にヘラ削りがされ、胴部は指による縦方向のナデ仕上げがされているものの布目痕を残している。胎土・焼成とも13・14に近い。

16は上面が狭端面である。凸面は端面近くを横方向に、胴部を縦方向にヘラ削りしている。 凹面は横方向にナデ仕上げがされている。凹面の拓図左半の剝離は端面側の破面までヒビ割れ がつづいているから粘土板桶巻き作りの粘土板の合わせ目の可能性が強い。砂粒をやや多く含 むが灰青色で須恵質に焼き上がっている。

17は側面を残している。凸面は縦方向にナデつけられているが、焼成時の灰が付着している。 凹面には青海波文の叩き痕が残る。少量の砂粒を含むが精良な胎土である。灰青色で須恵質に 焼き上がる。

18は側面が残る。凸面は縦方向に指でナデられた痕を残す。凹面では布目・模骨の痕を残している。布目の横糸の方向とやや方向を異にする斜め横に走る沈線が平行して残るが、これは糸切り痕跡の可能性があるものかもしれない。凹面拓図右側上部の剝離も16と同様の状況があり、粘土板桶巻き作りの粘土板の合わせ目の可能性がある。胎土に少量の砂粒を含む。淡茶灰色で軟質に焼き上がる。

19は側面を残している。側面は二面に面取りされ角形に尖った状況となっている。凸面は縦 方向のヘラ削りで仕上げている。凹面は側面に沿ってヘラ削りがされているが、布目・模骨痕 はそのまま残されている。胎土に少量の砂粒を含む。淡橙灰色に堅く焼き上がる。

20も側面を残す。凸面側に側面に平行するナイフの痕がある。平瓦を分割するための計画線と考えられようか。凸面は粗い格子目をそのまま残している。凹面には布目を残すが部分的にすり消している。胎土に少量の砂粒を含むが精良である。灰青色で須恵質に焼き上がる。

21は側面を残す資料である。凸面に桶巻き作りの粘土板の合わせ目痕がある。粘土板の合わ

せ目部分には横方向の指の痕が波状に残っている。凹面では側面付近が一段高く縦方向のナデ痕を残す。胴部は剝離したかのような面を作るが横方向にナデられている。胎土には少量の砂粒を含む。灰色で軟質に焼き上がる。

22は凸面に平行叩き痕を残す。凹面は残っていない。胎土・焼成ともに21に近い。

23は側面を 1 部分残している。凸面には平行叩き痕が全面に残るが、部分的に縦方向に指ナデされた痕がある。叩打具の端部を示す痕が $2 \sim 3$ $_{\tau}$ 所認められるが、叩打具の大きさまではわからない。凹面は残っていない。胎土・焼成とも21に近い。

24は端面・側面ともに欠損しているが凹面に布目が残る。凸面には格子の叩き痕が全面に残る。凹面は縦方向にナデられているが粘土紐の継ぎ目が数ヶ所に認められる。薄手に作られて 少量の砂粒が認められる。灰青色で須恵質に焼き上がる。

25は側面を残している。平行条線と格子目の叩き痕を残し、部分的にナデられた痕がある。 凹面では布目が斜方向の指ナデによって消されている。少量の砂粒を含むが胎土は精良である。 凹面は拓図左上半の墨が濃い部分は灰色の軟質に焼き上がるが右下半は灰色で須恵質に焼き上がっている。

26は平瓦の縦の長さがわかり、端面の幅も想定出来る資料である。縦の長さ34.5cmを計る。 横幅は広端で27.5cm・狭端で26.3cm前後と推定される。極く薄く作られていて0.9~1.5cmの厚 さである。凸面では狭端部がヘラ削りされているが、この部分が最も厚い部分で三角突帯を形 成しているように見える。胴部は縦方向の指ナデの痕を残している。凹面には布目・模骨の痕 を残している。横方向に糸切り痕を思わせる平行線が数条認められるが、布目痕をすり消して いるようだ。少量の砂粒を含むが、胎土は精良である。上半部は暗灰色で硬く焼き上がるが下 半部は灰色で軟質である。

27は焼き歪んでいるが広端幅33.9cmが計測出来る。広端面は一部に乾燥時についた圧痕が認められるものの平滑にヘラ削りされている。両側面は内側からヘラ削りされたものと思われる粘土の張り出しが凹面側縁にある。凸面は縦方向にナデ仕上げされ、凹面には布目・模骨の痕が残る。厚さ1.0cmほどと薄手に作られていて、割れ目の線の走り方は粘土紐桶巻き作りの継ぎ目を思わせる。胎土は少量の砂粒を含むが精良である。広端部が暗灰色で須恵質に焼き上がるが、狭端部に近づくにつれて灰色で軟質である。

以上、数多い破片のなかの一部を紹介した。

平瓦の製作技法からこれ等の破片を整理すれば、粘土紐桶巻き作りされたと考えられる平瓦 片には、13・24があり、その可能性が高い平瓦片には、2・3・4があった。これらの破片に 共通しているのは、比較的薄手に作られていることである。また、2・3・4では、端面(狭 端面であろう)が丸く作られている特徴があった。この端部を丸く作る平瓦片は、神ノ前2号 窯出土の平瓦片のなかにもみられる特徴で、鉢形須恵器の口縁とも類似した点である。 また、21の平瓦片では、粘土板桶巻き作り技法によって生じたと判断される粘土板の合わせ 目痕跡を認めた。さらに、16・18の平瓦片も、粘土板桶巻き作りの製作技法によって作られた 可能性を認めた。これらの破片の特徴的なことは、粘土紐桶巻き作りと考えられた前者の破片 の厚さよりも、厚手に作られていることである。月ノ浦「号窯の平瓦片には、2つの平瓦製作 技法が混在しており、このことは、丸瓦片の観察結果とも通じる点である。

また、2・14・15・22・23・25の平瓦片では平行叩き痕が、3・5・20・24・25の平瓦片では格子目の叩き痕が、17の凹面には青海波の叩き痕が認められた。いずれも、須恵器甕形土器などの内外面に認められるものである。これらの叩き痕の多くは、厚手の平瓦片に認められる。

iv. 鴟尾 (第34~36図、図版18~20)

整理箱1箱分の破片がある。鴟尾の破片は一様に淡橙灰色(淡いレンガ色)に焼き上がり、厚手であるから選別するのは比較的容易である。胎土は砂粒が含まれているものの精良であることも共通している。焼き上がり状況も総体的に良い。

整理作業にあたっては大野城市教育委員会から、この鴟尾の推定復元図が描けるものなら描いて欲しいとの要請もあり鴟尾を良く知っておられる数人の先生方にも種々御教示を頂いたところである。しかし、鴟尾の大きさがかなり大型のものとなりそうであるのに対し破片の数が絶対的に不足しているものと思われること、鴟尾そのものの形も通常のものではなさそうなことなどから推定復元図は出来ていない。第34~36図に比較的大型の破片を図示したが諸賢の御教示を仰ぎ今後推定復元などの基礎としたい。

1は頂部と考えた破片である。破片の一面(拓図左側)に連続する三枚の鯖状の文様が段をなして連なるが、反対側(拓図右側)にも対称形と想定されるような段をなす文様が認められることから、それに挟まれたやや尖った部分を正面と考えた。この部分を正面(背稜)と考えた場合、側面観は比較的通常の鴟尾の側面観に近いものと考える。このことを基本に頂部および鰭部にあたる部分が残っているものと推定した。平面形で見ると頂部は正面にあたる部分が尖った状況ではあるが比較的平坦に作られ幅が1.3cmほどの鰭部に移行する。鰭は破片の背面では腹部との接合部まで9.5cmほどの深さである。腹部と想定される部分はこの破片には残っていない。頂部から鰭への稜線の側面観はやや急であり45度ほどとなる。平面形は尖った先端部分から鰭部はかなり広角に開く。文様は他の鴟尾の例、たとえば飛鳥寺跡A・B、四天王寺などと比較するとかなり相異がある。側面から見れば、縦帯がないことから腹部・鰭部の区別のない文様に作られる。文様は背稜から緩い曲線で鰭端に近づき逆段となっている。逆段の文様は鰭端まで達していず鰭端から1.0~1.5cm下で大きく曲がり、鰭端部と平行している。この為、腹部から見るかぎり鰭は表現されていないこととなる。腹部の先端は頂部の背後から斜めに下がり鰭部から10.0cm弱で接合された痕がある。従って背面からは通常の鴟尾の感じで見ら

れたものと思う。この鰭の内側は無文であるが、他の破片では鰭部にも文様がある。

2~4は正面背稜部の破片と考えた。表面は2・3は文様はない。2・3の内側表面は欠損している。4の内面は鴟尾の表面に出ない部分で幅広にへラ削りされたままである。それぞれの横断面に見るように2は円に近く4はゆるい稜を作り3はその中間である。縦断面では2が直線に近い状況であるのに対し3・4では下部が緩く張り出す。4の拓図右端に残る縦方向の沈線は背稜部の端を示す文様である可能性がある。4・3・2の順で頭部に近くなる破片と考えた。

5は背面腹部から鰭にかけての破片と考えた。この破片の部位を左右いずれ側とするかが問題であるが、1の破片の文様が逆段状をなすからこの破片の側面と考えられる部分の文様も逆段となるよう図示した。側面の文様では図の右端の部位が縦帯のような突帯となっている。従って逆段形の文様の一部に文様と平行する突帯が存在することになる。背面腹部には逆段の弧線の文様が付される。鰭部内側では表面と同様逆段の弧線が文様として付されている。腹部と鰭部との接合部は下部から上部にかけてやや内傾している。この破片の側面から鰭部と背面腹部との開きかたはかなり大きく、1の破片で見られた頂部から鰭部にかけての開き方と近似しこの鴟尾がかなり大型であることを予測させる。

6は厚手の破片で内側は鴟尾の表面には出ない部分で波をうった状況にヘラ削りのままである。表面は拓図左端に縦方向の突帯状の高まりがありその右側にやや幅広い弧状の沈線がある。この破片が鴟尾のどの部分にあたるものかは判断に困るが背面腹部の下部にあたるものと考えた。すなわち図の左端に鱶部が作られているものと考えた。

7は厚手の破片である。内面は鴟尾の表面に出ない部分で平坦に作られている。ヘラ削りされ部分的に指の痕が残る。表面は拓図上部に段があり段の下部は無文である。この破片もどの部位にあたるものが判断に困るが、厚手であることから胴部の一部となるものと考えた。ただ上部の文様との関係などは予測出来ない。

8・11は後部の鰭端の破片と考える。8は内・外両面に鰭端付近まで文様がある。1・5と同様、逆段に弧状の文様をとれば拓図のようになる。拓図右側では破片の接合部に文様があり、拓図左側では破片接合部の上に弧状の文様の端がある。破片の状況から右側が外側面になるものと考えた。11も8と同様に図示した。外側面には文様はない。内側面上部に弧状の端と思われる部分がある。11は8よりも頂部に近い破片であろう。

9は比較的薄手の破片である。内側は鴟尾の表面には出ない部分でヘラ削りされている。表面は一条の「U」字状の沈線がある。沈線の両縁は面取りされている。破片は拓図の下部がやや張り出した感じの曲面となっている。この破片が鴟尾のどの部分に想定できるものか不明である。

10の内側面は剝離し旧状を残していない。表面は二段の弧線が文様として残っている。文様部を1・5に従って逆段状にとれば拓図のようになる。背面腹部の破片と考えられようか。

12は土師器の竈の庇のような形状の破片である。しかし、胎土・焼成とも鴟尾の破片と同様であるし土師器の竈片の出土もないようであるから鴟尾の一部と考える。内外両面の拓図を示した。外面は弯曲し文様はない。表面に出ない部分は接合箇所で粘土が剝離したままの斜めの平坦面となっている。他の鴟尾にこのような例は見られないが頭部につく破片と思われる。通常、鴟尾の頭部は平坦に作られるもののようであるから、この破片が頭部につくとすれば極めて珍しい例と思われる。ただ、群馬県山王廃寺の石製鴟尾のA例では頭部に棟の高さを示すと思われる庇状の部分があることや兵庫県・姥ヶ懐古墓例にも頭部に庇状の部分があるものがあることから、月ノ浦窯のこの破片も同じような役割を持ったものと考える。

- 〈註1〉 石松好雄・舟山良一「月ノ浦窯の小型瓦」『古代研究』25・26 元興寺文化財研究所 1983
- 〈註2〉 酒井仁夫他「神ノ前窯跡」『太宰府町文化財調査報告』 2 1979
- 〈註3〉 小田富士雄他「野添・大浦窯跡群」『福岡県文化財調査報告書』第43集 1970
- 〈註4〉 前原平三郎「伊藤田踊ヶ迫窯跡出土古瓦」、「ホヤ池下瓦陶兼業窯跡出土古瓦」『古瓦雑記』 1982
- 〈註5〉 たとえば亀田修一は『佛教芸術』148号中の「九州地方の瓦窯」(1983) で月ノ浦窯を紹介している。さらに彼は『大宰府古文化論叢』下巻の「古瓦塼よりみた太宰府と朝鮮」(1983) の中でも当窯の出土瓦を紹介している。
- 〈註6〉 大脇潔「研究ノート 丸瓦の製作技術」 奈良国立文化財研究所学報第49冊『研究論集 K』 1991
- 〈註7〉 鈴木久雄「一本造り軒丸瓦の再検討」『幾内と東国の瓦』 京都国立博物館 1990
- 〈註8〉 猪熊兼勝・大脇寮・松本修自『日本古代の鴟尾』 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980
- 〈註9〉 註8に同じ
- 〈註10〉 註8に同じ

(3) 小田浦28地点

A. 遺 構

既述のように窯体が検出されず、斜面下方に灰層が認められただけの場所である。通常の場合灰原は焚口付近を中心にして下方に扇形に広がるが、ここでは等高線に添うように横に細長く広がっていた。また、下方が畑として拓かれていて断ち切られた形となっていた。

B. 遺 物

すべて灰層からの出土で、整理箱にして30箱の量であった。須恵器に混ざって土師器が少量 と瓦類、そして用途不明の土製品が出土した。

1. 須恵器 (第37~42図、図版23~28)

杯蓋 (1~17・29)

蓋(18~28、30~33)

18~24は高杯の蓋と考えられる。13.4~15.3cmと大きめである。やや扁平気味のつまみを付け、24を除いて天井部外面にカキ目を施す。

25・26・28は高台付きの杯身に対応する杯蓋のようであるが、96・97のような器種に対応するか不明な点もあるので、ここで扱った。後田46地点灰原出土遺物中のような高台付椀の蓋である可能性がある。天井部外面の調整を見れば、25は回転ヘラケズリ、26はカキ目の後回転ナデ、28はカキ目を施す。

27はかえりが退化したものだが、通常あまり見ない形態である。天井部外面を回転ヘラケズリする。30は小型の蓋で、長頸壺状の器種に対応するものであろう。31は小田浦37-1号窯跡出土遺物中に類例が見い出されるもので短頸壺の蓋としてなら整合しそうなものである。32は重口壺状の器種に合う蓋と考えられる。

杯身 (33~51、59~63)

33~51は、月ノ浦 I 号窯跡の分類に従えばA類に当たる。最大径は11.4~14.8cmで、形態的には底部が丸味を持つもの(36等)と平坦に近いもの(45・46等)がある。前者は最大径の大きめの方に多く、後者は小さめの方に多い。また、立ち上がりの形態に基部が太く先端の細い

もの(36等)と基部から先端まであまり厚さの変わらないもの(33・34等)があるが、これは 径の大小と関係が薄いようだ。技法的に見ると、底部外面を回転ヘラケズリするものが多いが、 41・45~47はヘラ切り後ナデるだけである。後者は口径の小さい方に多い。

59~61は形態的に疑問のあるものもあるがB類の杯身と考えられる。口径が8.8~10.5cmの大きさである。底部外面は回転ヘラケズリする。

椀 (52~58)

あるいは鉢とした方が良いものもあろう。復元値も含めて口径が11.1~14.2cmを測る。口縁端部が直立するもの(52)、内湾気味のもの(53・55・56・58)、外反気味のもの(54・57)がある。55・57を除いて体部に沈線を持つ。54はカキ目を施す。

高杯(62~82)

62~65は有蓋高杯であるが、脚部のみの場合は判断しかねる。有蓋の場合、脚部がゆるやかなカーブを描いてそのまま終わるもの(62~64)と、途中で段を持つもの(65)がある。透しはない。杯部は立ち上がりの形態に差異があるが、技法的にも62・65が底部外面を回転へラケズリするのに対して63はナデるだけという違いが見られる。無蓋高杯の66~67を見ると、脚部の全体がわかるもののうち段を持つものは見られないが、透かしのあるもの(68)とないものがある。杯部は丸味のあるもの(67・68)と角張るものがある。68は中位に刺突文をめぐらす。その他角張るタイプは沈線をめぐらすものが多い。脚部のみの破片を見ると段を成すもの(79~82)とそうでないものがある。79はカキ目を施す。

器台(83)

脚部のみで全容が不明だが、通常の高杯脚部より太いため器台と考えたものである。内外面 とも回転ナデを行なう。

瓰 (84∼86)

84は全体の4分の3が残存するもので、口縁部と頸部の境の段がなくなり、わずかに沈線状に窪む線が見られるのみである。胴部には一孔を穿ち、その高さに沈線で画された刺突文帯をめぐらす。胴部下位に回転ヘラケズリが見られる。85・86は胴部のみで、技法的にはほとんど同じだが、85は刺突文帯を持たず、86は持つという違いが見られる。

壺 (87・88)

87は一見手捏土器のようであるが、底部外面を回転ヘラケズリし、他を回転ナデするものである。灰白色を呈する。88は内外面とも淡青灰色と呈するものであるが全容が不明である。小型の壺と考えたものである。

長頸壺 (89)

胴部がやや扁球気味の形態を持ち、上位にカキ目と複線の波文帯を持つ。その他の部分は回転ナデである。

台付短頸壺 (90)

途中で段を持つ脚部が付くもので、胴部上位に2本の沈線を持ち、胴部下位を回転へラケズ リする。内面中央に同心円の当て具痕を持つ。

把手付壺 (91)

胴部小片から復元したものである。 2条の沈線を持ち、把手はヘラケズリで整える。焼きの 良いものである。

すり鉢 (92)

底部外面を回転ヘラケズリするものである。底部中央に穿孔がある。底部以外は回転ナデを 行なう。

平瓶 (93)

口縁部のみの破片で、内外面は回転ナデを行っている。

長頸壺 (94)

これも口頸部のみの破片である。口縁部下に2条の浅い沈線がめぐる。内外面は回転ナデである。

鉢(?)(95)

脚が付くかもしれない。段は比較的シャープである。底部外面を回転ヘラケズリする。

高台付椀 (?) (96・97)

底部付近の小破片のため全容が不明である。96はカキ目を施す。蓋の項で述べた通り、後田46地点の高台付椀と同様だとすると、26や28の蓋と整合することが考えられる。

鉢 (98)

あまり例を見ない形で、器種名についても迷う。底部外面を回転ヘラケズリする。

蕎 (99)

これもあまり見ないもので、復元口径16.1cmを測る比較的大きい蓋である。かえりのつけ方はしっかりしている。

m (100)

1点しか出土していない。復元口径20.8cmを測る。底部外面は粗いナデ、内面不定方向のナデ、他は回転ナテを行なう。

壺(102~103)

2個とも中央よりやや上位に最大径を持つものである。胴部外面は102が下半、103は中位から下部に回転ヘラケズリする。内面は回転ナデである。

甕(101~104~112)

口径の大きさによって小型 (11.3~13.5cm、101·104~106)、中型 (16.6~23.3cm、107~110)、大型 (34.5~44.0cm、111·112) に分けられる。口縁部の形態は小型のものにシンプル

なものが多く、中型、大型は凸帯等複雑になる。また、大型の甕の頸部は沈線によって上下二段に分けられ、上段にヘラで付けたと思われる「連続斜線文」がめぐらされる。ただし102・103の壺と小型の甕を見分けるのは難しい。

2. 土師器 (第44図)

甕 (113・114・116)

丸底を呈し、長胴気味で、口縁部がゆるくカーブを描いて外反するものである。胴部外面は 刷毛目、内面はヘラケズリが見られる。

壺 (115)

丸底を呈し、外湾する口縁部を持つ。口縁部内外面と胴部外面にミガキがなされる。胴部内面下部はヘラケズリ、上位に指オサエの痕が残る。形はシャープではないが、いわゆる小型丸底壺の部類に入るものと考えられ、他の器種に比べ時期的にさかのぼるものと思われる。

3. 石製品 (第44図、図版28)

紡鍾車

 $4.4 \times 3.8 \text{cm}$ 、厚さ1.1 cmの大きさである。周囲に4 r所の切り込みがある。

4. 瓦

i. 丸瓦・平瓦

丸瓦が2ヶ分平瓦が整理箱で3箱分出土した。

- a. 丸瓦 (第45図、図版29)
- 2ヶとも玉縁式の丸瓦である。

1は土師質で明褐色を呈する。玉縁は基部を残すのみで全容は不明である。また、胴部側面のうちの1面と広端部も失われている。従って、狭端・広端の幅と胴部長も不明である。胴部凹面は狭端付近がヨコナデ、その下は縦方向のナデ、さらにその下は斜めのナデを行っている。凸面は縦方向のナデ(指ナデか)を行っている。側面は凹凸両側が面取りされている。玉縁との連結面は水平で、ヨコナデされ、肩は比較的はっきりしたものである。

2は須恵質の丸瓦で、やはり玉縁が付く。玉縁の長さ約5cm、胴部は現存長24cmである。広端部を欠くが、その他は比較的残りが良い。胴部凹面は粘土紐の痕跡と思われるひだが見られる。幅は約5cmである。狭端側はヨコナデされ、その下は斜め方向のナデが見られる。凸面は全体的にヨコナデされている。両側面は凹面側が面取りされ、凸面側に切り離しの際に残ったと思われる粘土が盛り上がる。玉縁との連結面は玉縁側がやや高く水平ではない。玉縁の立ち上がりは直に近い。連結面、玉縁内外面ともヨコナデされる。玉縁端面は丸く終わる。

b. 平瓦 (第46~51図、図版29~35)

図示したのは 17_{τ} 分である。表面観察では粘土紐の巻き上げか粘土板巻きつけか明瞭には判断できない。ここでは凸面の調整によって分類した。即ち、タタキによって平行条線を残すもの $(3\cdot 4)$ 、ヘラケズリするもの $(5\cdot 6)$ 、ナデるもの $(7\sim 19)$ である。凹面は模骨痕の明瞭なもの、布目の残るもの、ナデるものがあるが、凸面の調整の違いと完全に一致はしない。

3は須恵質で狭端部が丸く終わる特徴がある。端部近くは凹凸面ともヨコナデをする。凹面は縦方向に指ナデを行ったのち、狭端側やその他必要に応じヨコナデを加えている。粘土紐巻き上げの跡と思われる貼り付け痕が一条認められる。

4は土師質で磨滅が激しい。凸面に残る平行条線も半分ほど消えかかっている。凹面は調整が不明である。側縁は凸面側の狭端付近が破断されているため、分割の際はその部分に刃物を入れずに割ったものと思われる。

5 は熱のためややゆがんでいるが完形の平瓦である。狭端幅30cm、広端幅40cm、長さ43cmを 測る。灰白色を呈し、狭端から約11cmのところから上が急に薄くなる。それが主に凸面側に現れているため、ゆるやかな肩状の段をなす結果となっている。狭端縁は丸く仕上げられている。凸面はこの薄くなった部分を縦方向のナデ、狭端部付近をヨコナデ、それらの下方は縦方向のヘラケズリと思われる。広端縁は凹凸面ともに面取りされている。凹面は全面ヨコナデである(指ナデか)。両側縁は凹凸両面から分割されているが、一部凸面から入れた刃物が凹面側から入れた刃物より後であることを示す粘土の余りのあることより凹面側にまず分割載線を入れてその後に凸面側から刃物を入れたことが考えられる。

6 は土師質の平瓦である。凸面は広端から狭端側にヘラケズリしている。狭端部は面取りする。凹面には模骨の痕跡と布目が残る。

7は土師質で、凸面は主に縦方向のナデを行なう。狭端は面取りする。凹面は模骨痕と布目が残る。模骨の幅は約3cmと思われる。側縁付近はナデのため模骨痕、布目とともに消えている。

8 も土師質で、凸面は縦方向のナデによってかなり平滑になっている。狭端縁は丸味を持たせている。凹面は模骨痕と布目が残るが、ナデを行っているため、狭端側やその他の部分でも消えている所が多い。凹面右隅には須恵器のヘラ記号状に「メ」印がある。

9は土師質で、凸面狭端付近はヘラケズリを行なう。その下方は磨滅のため詳細は不明だが、 ナデを行っているようだ。凹面には模骨痕と布目が残るが、ナデを加えているためだいぶ消え ている。凹面狭端縁は面取りしている。

10は須恵質で焼成堅緻である。しかし、径 2 mm程度の小石が多く含まれていて、表面は粗い。 凸面は縦方向のナデを行なう。凹面は模骨痕と布目が残るがナデを加えているためかなり消え ている。 11もやはり須恵質で、凸面はナデ、凹面は模骨痕と布目は残るが、ナデを加えるものである。 側縁部凹面は面取りする。

12は土師質で、凸面はナデ、凹面は模骨痕と布目が残る。模骨の幅は約2cmである。

13は須恵質で、凸面はナデ、凹面は模骨痕と布目が残るがナデを加える。模骨の幅は約2.5cmである。広端縁は面取りしない。

14も土師質で凸面をナデ、凹面には模骨痕と布目が残るものである。模骨の幅は約2cmである。側縁はまず内側から刃物を入れ、それから外側から再度刃物を入れたものと見られる。

15は須恵質で、凸面は狭端付近は向きがわからないがナデを行い、狭端縁下方約3 cmぐらいからは縦方向のナデを行っている。凹面は模骨痕と布目が残るが、ナデを加えているため半分消えかかっている。分割は凹面側と凸面側両方から刃物を入れて行っている。

16も須恵質で、凸面は15同様縦方向のナデを行い、凹面は布目が残る。模骨を使用したものと考えられるが、ナデを加えているため、明確ではない。凹面側狭端縁は面取りされている。

17は土師質で、凸面は縦方向のナデ、凹面は横方向と縦方向のナデを行うものである。側面は平坦で一度に分割されたと思われる。凹面側に面取りされた部分がある。

18も土師質で、両面ともにナデを行うものである。側面は平坦である。19も土師質で両面ともにナデを行うものである。凹面に残る右下がりの数条の沈線は粘土板切り離しの際の痕跡かもしれない。

5. 鍔付円筒状土製品(第52図、図版36)

1は小破片であるが、口縁部復元径19cmの大きさのものである。赤褐色を呈する土師質のもので、口縁端部はやや丸味を持ち、口縁部下7cm付近に鍔が付く。基部しか残っていないが、その部分の厚さ約3cmである。内面及び口縁部はナデによって平滑になっている。外面は口縁からやや下に平行タタキの痕跡がある。その上にナデ、又は刷毛目を施す。その他はヨコナデである。

2は1より大型で残存具合も良い。ただし、やはり上部だけなので全容は知り得ない。口縁部の外径は復元値で27cm、現存高21cmである。下部に向かって徐々に外開きとなる円筒状の器形で、口縁端より7cmの所に鍔がめぐる。

鍔の幅は2~2.5cm程で基部での厚さ約3cmである。また、口縁部はナデによって丸く仕上げられているが、内側に接合痕状に凹む部分もある。調整は口縁端部内外面と鍔接合部はヨコナデ、それより下方は右下がりのナデを行なうが、下方のナデは何か原体を用いたようで一見へラケズリを思わせるものである。内面はナデである。

6. 円筒状土製品(第52·53図、図版36)

3は色調、調整ともに4・5と違い、それらはむしろ前項の鍔付円筒状土製品、あるいは次項の大型円筒状土製品と似ているが、形態的には円筒状を呈しているためこの項で述べるものである。赤褐色を呈し、復元底径(?)24cm、現存高26cmの大きさである。底部から最初はゆるやかなカーブを描きながらそのあとほぼ垂直に胴部が伸びる。2 mmぐらいの小砂粒を多く含む。外面は平行タタキを行ならが、胴部はまず強いナデを行って形を整えている。内面は斜め方向の強いナデ、そして底部付近は同心円の当て具痕が見られるが、さらにその上をナデている。外面の平行タタキと内面の同心円文当て具痕の位置は対応している。

4は5と似た色調であるが、小さい破片のため全容はわからない。5のように曲がるものではないが、円筒状土製品として扱う。用途不明のため上下もわからないが、小さい口径側を上とする。口縁部は自然に丸く収め、下方に向けて徐々に広がる。調整は器面の荒れのため不詳だが、外面はナデ、内面も粗いナデと思われる。

5 は淡黄灰褐色を呈し、小さい口径側が直角方向に曲がる円筒状の土製品である。用途が不明のため向きもわからないが、一応小口径側を上として記述する。口径は小さい方が13.5cm、大きい方が22cm、高さ29cmである。調整は外面がナデ、内面は底部付近をヨコナデ、その上部は斜め方向のヘラケズリを行なう。口径近くは磨滅のためよくわからない。

7. 大型円筒状土製品? (第55図、図版37)

7~11まで5片図示したが、調整や厚さ等から、7・10・11はそれぞれ別個体をなし、8・9は同一個体になるものと考えられる。これらの破片を見ると、側縁と言うべき面が見当たらないことから円筒状になるものと考えられる。また、形状から円錐状に片方がすぼまっていくと思われるが、狭端面と言うべき面も見当たらない。しかし、完全な円錐状を示す破片もないし、それは考えにくく、おそらくは裁頭円錐状を呈する円筒になるものと思われる。残存している破片の形状からは平瓦用として製作した粘土円筒を平瓦として分割しないでそのまま焼き上げてしまったもののようにも見える。

7は最も大きな破片で、高さ25cm、また円筒状であればその半分ほどが残っていると思われる。この場合底径は約55cmである。全体に赤褐色を呈し、外面の一部に黒斑が見られる。厚さは底部付近が約2cm、その上部は約1.8cmである。外面の調整を見ると底部付近は格子目タタキがある。底部から低い所で約13cm、高い所では約18cmまで施されている。それより上は縦方向の強いナデを行っている。内面は外面の格子目タタキに対応する部分には同心円文の当て具痕、その上は強い斜め方向のナデが見られる。両面ともナデの方が後である。また、底面、平瓦で言えば広端面に当たる部分には、外面と同様格子目タタキを行っている。仮にこの円筒を4分割した場合、広端幅は約43cmとなる。

8・9は暗赤褐色を呈し、7に比べやや薄い。やはり底部近くにはタタキが見える。外面は 木目が浮き出てきたため格子目状に見える平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。そ の上部はナデである。底面にもタタキ痕がある。円筒状とすると推定底部外径は約47cmである。

10も暗赤褐色を呈するが一部に黒斑がある。厚味は底部付近が約2.2cm、上部が1.5~1.8cm である。調整は前述のものと同様底部付近は外面が格子目状の平行タタキ、内面には当て具痕が見られ、その上はナデである。底面には平行タタキと格子目状のタタキ痕がある。推定底部外径は約55cmである。

11は淡黄赤褐色を呈し、底部付近の厚さ約2cm、上部は約1.8cmを測る。調整が8~11と大きく異なる。外面を見ると、底部近くの一部に格子目状のタタキが見られるが、ほとんどはヨコナデである。上部はヨコナデの上をさらにナデて平滑にしている。内面は底部付近が横方向の強いナデ、上部が斜め又は縦方向の強いナデである。底面には平行タタキが見られる。推定底部外径は約60cmである。

8. 丸瓦状土製品(第54図6、図版37)

丸瓦の一種または土管状の土製品を思わせるものである。両端面は残存するが、側面と言うべき面がないため、形状が不明であるが一方が広がるものである。長さは約31cmである。凸面は全面をナデている。凹面は広がる部分はヨコナデ、胴部と言うべき部分には模骨と布目が残り、その上をナデている。模骨の幅は約3cmである。以上のことから丸瓦と同様桶巻き作りで作られていることがわかる。行基式丸瓦の一変種と考えて良いものだろうか。

- 〈註1〉 『牛頸後田窯跡群』大野城市教育委員会 1991 P55
- 〈註2〉 『牛頸小田浦窯跡群』大野城市教育委員会 1992 P50
- 〈註3〉 愛知県埋蔵文化財センター調査課長補佐 城ヶ谷和弘氏よりご教示を受けた。

(4) その他の遺構・遺物

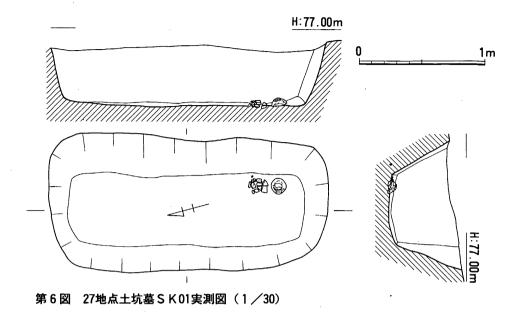
A. 土坑墓(第6図、図版38)

No.27地点、即ち月ノ浦 I 号窯跡灰原のあった場所で土坑墓が 1 基検出された。土坑墓は灰原の東側にあって、灰原よりやや高い地点に位置する。検出面は標高で約76.9mであった。

プランは隅丸の長方形状を呈し、主軸長2.27m、短軸長1.06m、深さ約0.5mを測る。断面は 逆台形状を呈し、床面は平坦に近い。床面の南東隅から土師器の杯2個と椀1個が出土した。 椀が伏せた状態であったが、原位置に近いものと考えられる。

B. 遺物

遺物は前述のとおり、土師器の杯2個と椀1個である。



1 土師器 (第25図、図版 8)

杯 (84·85)

84は口径10.8cm、器高3.5cmを測るもので、平坦な底部から斜めに伸びた体部がやや外反気味に終わるものである。底部と体部の境は明瞭ではない。調整は全面磨滅が激しく明らかではない。85は口径12.4cm、器高3.5cmを測るもので、84に比べ底部と体部の境がわかりやすい。これも磨滅が激しく調整不詳である。

椀 (86)

口径11.5cm、器高4.3cmを測る。丸味を持った体部、平坦な底部をなし、底部と体部との境に高台を付す。調整は磨滅のため明らかではない。

Ⅳ. 牛頸窯跡群内の瓦

1968年(昭和43年)、宅地造成工事に伴って大野城市(当時は大野町)大字上大利字大浦にある大浦窯跡群(牛頸窯跡群の一支群)が福岡県教育庁文化課の手によって発掘調査された。そして、2号窯跡から須恵器に伴って瓦が出土した。須恵器はN~V期のもので、6世紀末~7世紀前半代のものであった。大分県中津市の伊藤田窯跡からも同時期の瓦が見つかり、九州における寺院の出現期である7世紀後半~末頃に先行して瓦が生産されたことが明らかになった。、

その後、牛頸窯跡群内の窯跡・集落跡が調査されるにつれ瓦の出土例がふえた。いずれも白鳳期以後の定例化された瓦と違い、稚拙な作りで、九州のみならず瓦の出土例の多い幾内の研究者を始め全国的に注目されている。しかし、調査主体者が多種で今一つまとまりに欠けていた。そこで今回月ノ浦 I 号窯跡の調査報告を出すに当たり、今まで報告されたものを集成しておきたい。研究の足がかりにしていただけば幸いである。なお、マスコミでも注目された春日市のウトグチ窯跡出土例は既に定型化した例としてここでは取り上げない。それぞれの遺跡の調査者、報告した自治体の労を多としたい。

現在、牛頸窯跡群内での瓦の出土例は、窯跡の場合8例、集落跡では3遺跡4例にのぼる。 以下に表としてまとめ、次頁以降に概要を記したい。また、52ページ第19図を参照願いたい。

〈註1〉 『野添・大浦窯跡群』 福岡県教育委員会 1970

牛頸窯跡群内瓦出土遺構一覧表

		遺構名	所在地	種 類	参考文献等	
窯跡出土例	1	神ノ前2号窯跡	太宰府市	軒丸瓦、丸瓦、平瓦	『神ノ前窯跡』	
	2	大浦 2 号窯跡	大野城市	丸瓦、平瓦、熨斗瓦	『野添·大浦窯跡群』 『野添窯跡群』	
	3	野舔13号窯跡	大野城市	丸瓦、平瓦、熨斗瓦		
	4	月ノ補[号窯跡	大野城市	軒丸瓦、丸瓦、平瓦、鴟尾	本報告書	
	5	小田浦28地点	大野城市	丸瓦、平瓦、その他	本報告書	
	6	大谷窯跡	大野城市	丸瓦、平瓦	『春日地区遺跡群Ⅲ』、(未)	
Du	7	浦ノ原 4 号窯跡	春日市	平瓦	『浦ノ原窯跡群』	
	8	春日平田窯跡	春日市	平瓦	『野添・大浦窯跡群』、表採	
	9	補ノ原A地区	春日市	平瓦	『補ノ原窯跡群』	
集		竪穴状遺構	おロロ			
落	10	惣利西遺跡	春日市	軒丸瓦、丸瓦	『春日地区遺跡群Ⅲ』	
跡		2 号住居跡	各口川			
出		惣利西遺跡	春日市	丸瓦、平瓦	[宋口孙云/\$B+#+ m ^	
出例		4号住居跡	各口巾		『春日地区遺跡群Ⅱ』	
	11	九州大学筑紫	春日市	TT 75	『春日地区遺跡群Ⅲ』、(未)	
		地区キャンパス 内遺跡	大野城市	平瓦		

(未):本報告がまだなされていないもの

神ノ前2号窯跡出土瓦

- 1. 所 在 地 太宰府市 (調査当時は町) 大字吉松
- 2. 調 査 年 1978年 (昭和53年) 10~11月
- 3. 調査主体 太宰府町教育委員会(福岡県文化課から技師派遣)
- 4. 瓦の種類 軒丸瓦・丸瓦・平瓦
- 5. 文 献 『神ノ前窯跡』 太宰府町教育委員会 1979
- 6. 遺 構

窯跡は地下式窯で、焼成部上半と煙道部は削平されていた。それでも残存長12.0mを測る大型の窯跡である。焼成部は約2m幅でほぼ一定である。

7. 出土状態

焼成部第1次床面上から軒丸瓦が、その他は窯内崩壊土堆積層中から出土。

8. 瓦の概要

軒丸瓦 瓦当は無文で、全長44.1cm、直径15.7cm、中心部での瓦当厚1.4cmである。玉縁を持つ。瓦当面はナデ、胴部凸面は細かな格子目の叩きのあと横方向のハケ目調整。凹面は全体に

強い横方向のナデ。側縁はていねいなヘラ ケズリ。玉縁は両面ともにヨコナデ。端部 が丸く仕上げられている点が特徴的。

丸瓦 10点出土。軒丸瓦と同じ技法によったと考えられるが、凸面が格子目のままのものがある。

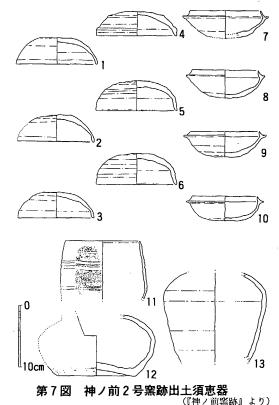
平瓦 45点出土。全体に薄手で厚さは1~1.5cm。粘土板らしきものによるものと粘土紐によるものがある。調整は両面とも指ナデによるもの、凸面をハケ目によって仕上げるもの等がある。模骨の痕跡を明らかにするものはない。

9. 共伴資料

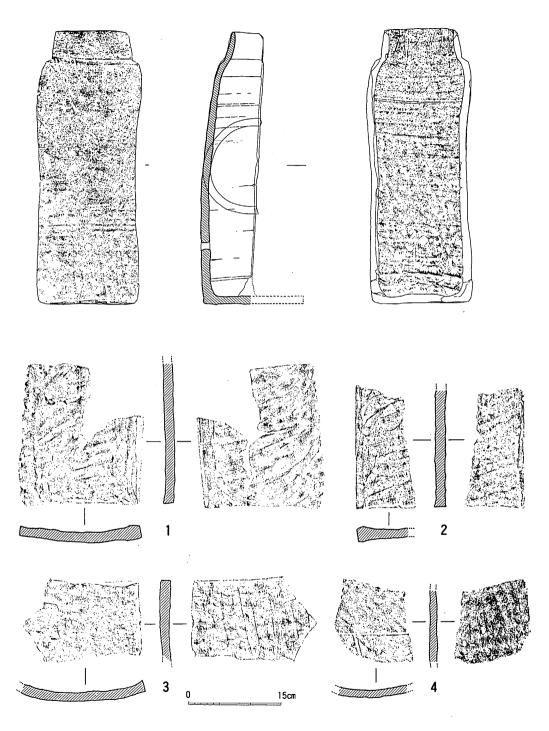
須恵器は小田氏編年のNA期のものがほとんどであるが、一部 ■B期にさかのぼる可能性があるとしている。

10. 小結

互はAD600年をさかのぼるとされる。



-32-



第8図 神ノ前2号窯跡出土瓦(『神ノ前窯跡』より)

大浦2号窯跡出土瓦

- 1. 所 在 地 大野城市(当時は大野町)大字上大利
- 2. 調 査 年 1968年 (昭和43年) 6~8月
- 3. 調查主体 福岡県教育委員会
- 4. 瓦の種類 丸瓦・平瓦・熨斗瓦
- 5. 文 献 『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会 1970
- 6. 遺 構

窯は地下式の可能性が高いもので、焼成部の約半分から上部が消滅していた。残存長は5.5 mである。焼成部はやや胴張り気味のプランで、1~3次の床面が観察できた。壁面にはスサ入り粘土による塗り壁が残っている。

7. 出土状態

瓦は第1次床面からの出土が多い。完形の宝珠形つまみを持つ蓋が共伴している。

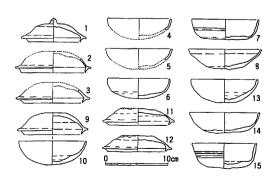
8. 瓦の概要

丸瓦 玉縁を持つものは発見されていない。凹面に模骨と布目の痕跡がある。

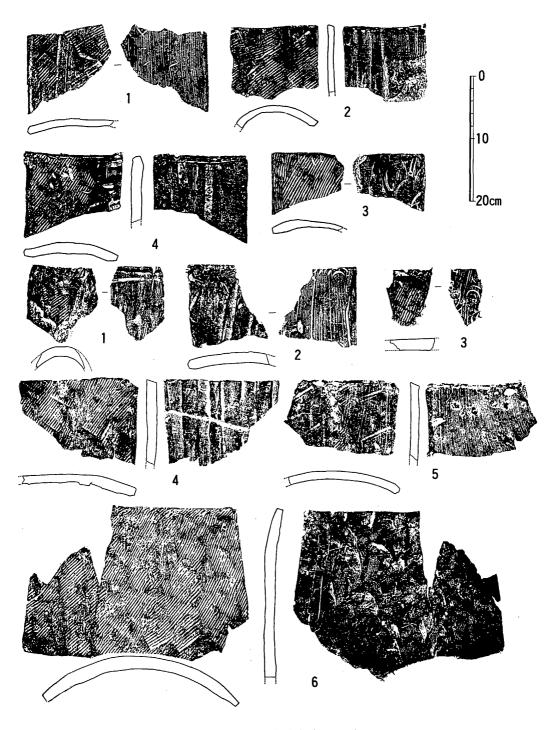
平瓦 凸面には平行叩きがあるもの、ナデを行うものがある。凹面は①糸切痕と思われる平行条痕が全面にありその中に一部布目が見えるもの、②条痕、布目の後から同心円の叩きを行うもの、③条痕、布目の後から円形体のもので叩きしめられているもの、④布目を不規則なヘラケズリで消すものがある。凸面の平行叩きは伴出する甕外面の叩きと同種のものである。また、凹面には模骨の痕跡のあるもの、粘土の継ぎ目が縦に走るものがあり、粘土板桶巻作りの方法がとられたと考えられる。

熨斗瓦 1点だけの出土である。凸面には平行叩きがあり、凹面は模骨の痕跡と思われる縦の凹みの線しか残っていない。

- 9. 共伴資料 須恵器はNB期からV期に及ぶ時期である。
- 10. 小結 瓦の年代は6世紀末~7世紀 前半代が考えられ、畿内の飛鳥寺や幡枝 窯と同時期、少なくともこれよりは下ら ない時期に北九州でも瓦の生産が始まっ ていたことが判明した。



第9図 大浦2号窯跡出土須恵器 (『野添・大浦窯跡』より)



第10図 大浦2号窯跡出土瓦(『野添・大浦窯跡』より)

野添13号窯跡出土瓦

- 1. 所 在 地 大野城市大字上大利
- **2. 調 査 年** 1986年(昭和61年) 8~9月
- 3. 調査主体 大野城市教育委員会
- 4. 瓦の種類 丸瓦・平瓦・熨斗瓦
- 5. 文 献 『野添窯跡群』 大野城市教育委員会 1987
- 6. 遺 構

燃焼部のごく一部しか残らない窯跡であった。

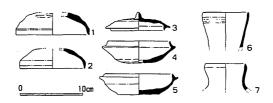
7. 出土状態

窯体内から2点出土した他は灰原と近くの溝の中から出土している。

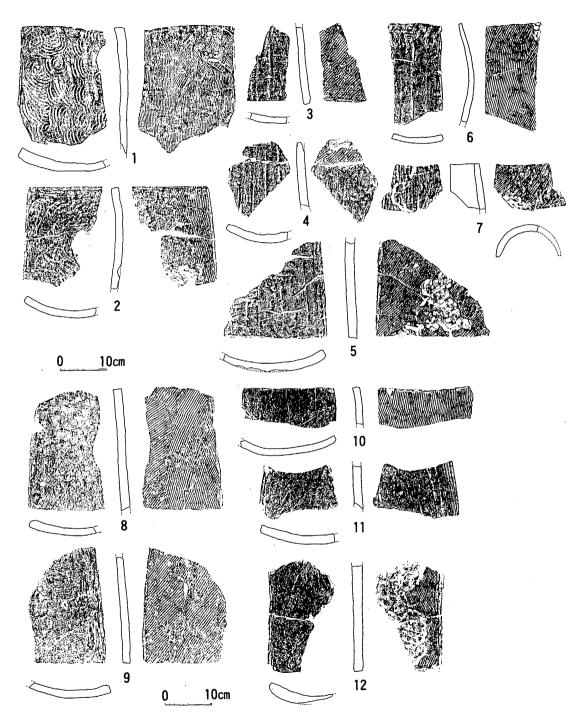
8. 瓦の概要

丸瓦 行基瓦で、凸面は平行タタキの後ナデ、凹面は布目が残るがナデている。模骨痕がある。 **平瓦** 凸面はすべて平行タタキを行ならが、部分的にナデを加えるものが多い。凹面は同心円 文タタキのあとナデるもの、布目があってその上をナデるもの、ケズリのあるものがある。模 骨痕のあるものも多い。また糸切り状の痕跡のあるものも見られ、粘土板桶巻作りを想定させ る。

- 9. 共伴遺物 須恵器はN~V期のものである。
- 10. 小結 野添13号窯跡は大浦2号窯跡と大きな谷をはさんで相対する位置にある。時期的に も同じで瓦の調整法にも類似点が見られるなど、同一工人集団の製作を思わせる。



第11図 野添13号窯跡出土須恵器 (『野添窯跡群』より)



第12図 野添13号窯跡出土瓦(『野添窯跡群』より)

浦ノ原 4 号窯跡出土瓦(A地区竪穴状遺構出土瓦)

1. 所 在 地 春日市下白水

2. 調査年月日 1977年(昭和52年)12月~1978年(昭和53年)3月

3. 調査主体 春日市教育委員会

4. 瓦の種類 平瓦

5. 文 献 『浦ノ原窯跡群』春日市教育委員会 1981年

6. 遺 構

4号窯跡は大型の部類に属すが、焼成部上半が削平され、6.05mしかなかった。焼成部の中央付近がやや広がり、1.5mを測る。2回以上のかさ上げの可能性がある。A地区竪穴状遺構は長方形のプランを有し、柱穴6個を持つ。上部構造として堀立柱建物が考えられている。

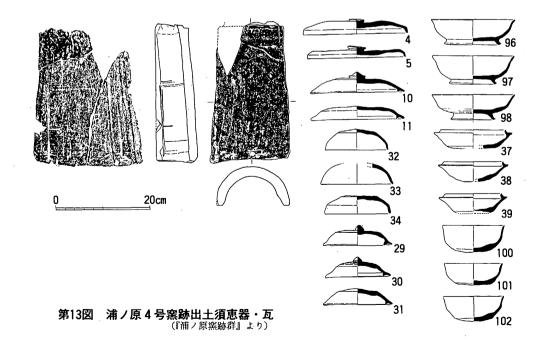
7. 出土状態 4号窯跡は燃焼部と灰原上層から、竪穴状遺構は壁に添って出土した。

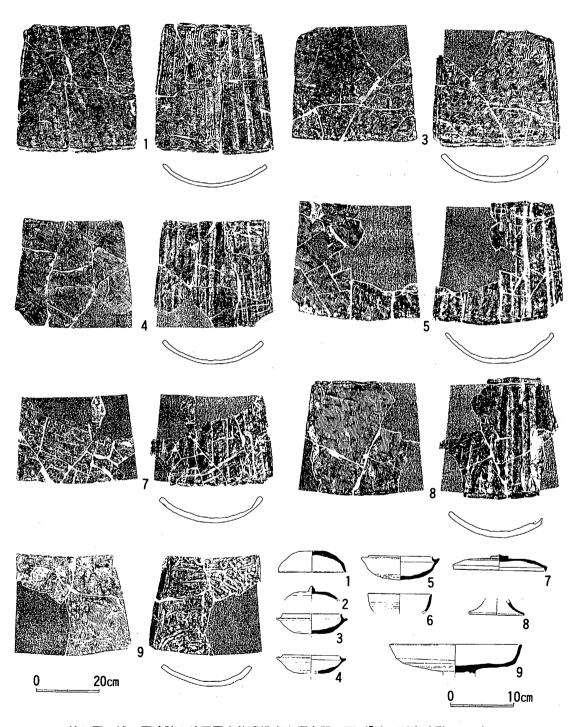
8. 瓦の概要

丸瓦 玉縁の付くもので、模骨痕があり、粘土紐巻き付けが考えられる。叩きは消されている。 **平瓦** 粘土紐と粘土板両者があり、凹面には同心円文圧痕の残るもの、ナデのものがある。

- 9. 共伴遺物 出土須恵器はNB~N期に属するものである。
- 10. 小結 瓦は7世紀後半代のものと考えられる。

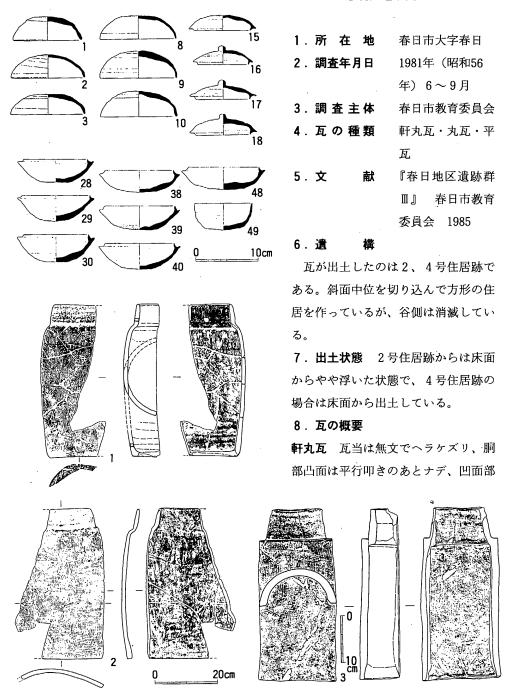
〈註1〉 調査者はA地区竪穴状遺構出土瓦も4号窯で焼かれた可能性が高いと考えている。



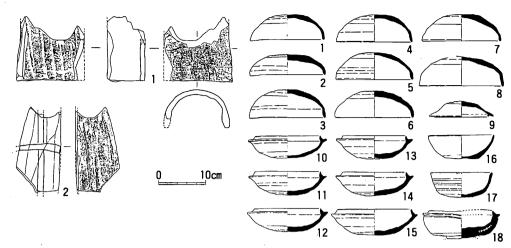


第14図 浦ノ原遺跡A地区竪穴状遺構出土須恵器・瓦 (『浦ノ原窯跡群』より)

物利西遺跡出土瓦



第15図 物利西遺跡 2 号住居跡出土須恵器・瓦(『春日地区遺跡群Ⅲ』より)



第16図 物利西遺跡 4 号住居跡出土須恵器・瓦(『春日地区遺跡群Ⅲ』より)

はヨコナデ。

丸瓦 玉縁が付くものが 2個。凸面は平行叩きのあとナデ、凹面はナデ、又は布目の残るものがある (2号住居跡出土)。また、凸面をヘラ削り、凹面に模骨痕・布目が残りナデを行うものがある (4号住居跡出土)。

平瓦 凸面へラケズリ、凹面は強いナデを行なうが、布目が残る。平瓦とするには疑問もある。 9 . 共伴遺物 $2 \cdot 4$ 号住居跡とも $\mathbb{N} \sim \mathbb{N}$ 期の須恵器が伴う。

10. 小結 瓦は共伴須恵器から7世紀前半代と考えられる。また、惣利西遺跡自体が須恵器工人集団と関係の深いことが考えられる。

春日平田窯跡表採瓦

近くに灰原のある畑で採集されたものである。平瓦で、凸面は平行叩き、凹面には糸切り痕や同心円文叩きが見られる。共伴須恵器は不明だが、同じく表採資料として杯身があり、N期

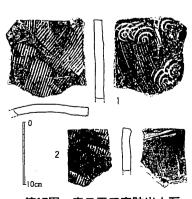
末~V期のものとされる。(『野添・大浦窯跡群』P38)

大谷窯跡出土瓦

詳細は不明だが、平瓦が出土している。凸面に平行叩き、凹面に布目を残し、NB期の須恵器と共伴するとのことである。(福岡県文化課参事補佐高橋章氏による)

九州大学筑紫キャンパス内遺跡出土瓦

当遺跡からは凸面に平行条線のある平瓦等が出土して いるが、現在整理中。(九州大学助手西健一郎氏による)



第17図 春日平田窯跡出土瓦 (『野添・大浦窯跡群』より)

V. ま と め

(1) 各遺構の時期

月ノ浦|号窯跡

出土した蓋杯にはA類、B類(P10の分類に従う)の二種類ある。量的にはA類が圧倒的に多い。A類の蓋は口径が $11.2 \sim 12.9 \text{cm}$ の大きさだが、12 cm以下の方が多い。また、蓋・身ともに外面をヘラケズリしている。これらの特徴から考えてA類は小田富土雄氏の編年のIV期に当たるものである。一方、B類、特に B_1 類を見ると宝珠型のつまみを持ち、天井部は平坦に近くヘラケズリしているものである。これらから、B類はIV期に属するものと考えられる。即ち IV世紀末~IV世紀前半のものとすることができる。

先に、主に小田浦40-I号窯跡出土須恵器の観察から、蓋杯については

① A タイプのみですべて外面をヘラケズリする段階(小田浦33-1号窯跡出土須恵器)

,

②A・B両タイプが共伴し、Aタイプにはヘラケズリするものとしないものがある段階 (小田浦40-1号窯跡出土須恵器)

③Bタイプのみの段階(小田浦50-1号窯跡出土須恵器)

の3段階が想定でき、①・②は N 期、③は V 期と考えられることを述べた。月ノ浦 I 号窯跡出土遺物の場合についてどうなるか考えてみたい。 A・B両タイプがあるが、Aタイプはすべてヘラケズリしている。これは①段階に当てはまる。またBタイプについてみると、②段階とした小田浦40-I 号窯跡出土のB I 類蓋杯では、杯蓋の場合、つまみは宝珠型より乳頭状のものが多く、器高は高めで、かえりも高い傾向があり、杯身は丸味を持つものが多い。つまり、V 期に分類されるものに比べ、初現的な傾向にある。これからすると、月ノ浦 I 号窯跡出土例は②段階のものとするより、次の③段階に含めた方が良いと考えられる。出土した瓦はどの須恵器に共伴するかについては、灰原出土遺物だけに細かい特定はできない。

小田浦28地点

出土した蓋杯はA類が大多数である。杯蓋の口径は10.6~13.2cmと幅があるが、12cm以上のものがほとんどである。天井部外面は回転ヘラケズリするものが多いが、ヘラ切り後ナデるだけのものも含まれる。杯身も同様である。これらは小田氏編年のN期に属する。また、小量ながらB類に含まれる蓋杯も出土している。これはV期に属するものと考えられる。さらに第41

図89の長頸壺はそれらより新しい段階、小田氏編年の W 期に属するものと考えられる。以上より、小田浦28地点では W 期を中心に、 W 期まで窯が操業されたと考えられる。これらより窯体が検出できなかったが、灰原が横に広く、遺物の内容から見ても複数の窯があった可能性がある。

さて、ここでも前述の①~③段階との対応について見てみたい。前提として、遺物は灰原出土であり、同時焼成された群を抽出できないことを念頭に置かなければならない。蓋杯A類は12cm以上13.2cm以下のものがほとんどで、ヘラケズリするものが多いが、しないものも含まれる。これから②段階のものと考えることがてきるが、ヘラケズリするものがすべて②段階に属するか、あるいは①段階のものが含まれるかは出土状態からはわからない。これは①~③段階の設定がタイプの組み合わせと技法(ヘラケズリの有無)を基準にしたからである。この点、太宰府市宮ノ本窯跡群出土須恵器を中心に検討を加えた山本信夫氏は上記基準以外に法量の違いにやはり先後関係があることを認めて細分している。しかし、今回報告した2窯跡の出土須恵器でも、月ノ浦Ⅰ号窯跡出土Aタイプ杯蓋は12cm以下のものが多いにもかかわらず、すべてヘラケズリする。そして、小田浦28地点出土Aタイプ杯蓋は12cm以上のものが多いにかかわらず、ヘラケズリしないものが含まれる。報告者としては、大きな流れとして、口径の大→小があるとは考えるが、法量は確実には変化の流れと一致はしないと考える。それではヘラケズリしているAタイプを①・②段階に分類することは不可能なのかと言うことになるが、その他の要素・形態・技法等を加味して検討を重ねなければならないと考えるので、しばらく結論は留保したい。

B類については、小田浦40-I号窯跡出土例に比べて②段階よりも③段階のものと考えた方が良いと思われる。

土坑墓

土師器の椀は高台付小椀と呼ぶものに当たり、体部が丸くなり始める時期のものと考えられる。前川威洋氏の分類による I - 2 Aに属すとすれば、9世紀終末~10世紀初頭の年代が推定される。

- 〈註1〉 『牛頸小田浦窯跡群』大野城市教育委員会 1992 P45
- 〈註2〉 山本信夫「4・まとめ」『宮ノ本遺跡Ⅱ-窯跡篇』 太宰府市教育委員会 1992
- 〈註3〉 焼成具合による縮小程度も検討しなければならないと思われる。
- 〈註4〉 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集(下) 福岡県教育委員会 1978

(2) 月ノ浦 | 号窯出土瓦について

(i) 軒丸瓦について

軒丸瓦2点の瓦当文様の系譜的な問題や製作された場所、供給先などの問題などいくつかの問題がある。

瓦当文様の系譜については、石松、舟山は「この2点の軒丸瓦は瓦当文様の形態から百済との関連性が指摘でき、百済と北九州との直接的な交渉のもとに出現したものとも考えられる。」としている。

また、亀田修一は「類例を捜すのはむずかしいが、蓮弁の形等によるわずかな類似点を捜せば、百済・高句麗にあるのかも知れない。」と見ている。

『日本書記』では我が国における瓦の生産は飛鳥寺の造営とともに始まった。さらにはその技術者は百済であることなどを考えれば当然の推論であろう。また、月ノ浦窯の軒丸瓦の瓦当文様が単弁であるからその系譜を考える以上、朝鮮半島三国時代に単弁蓮華文が盛行した百済や高句麗が瓦当文様の古地として推定されたものだろう。

しかし、亀田が言うように現時点でも「類例を捜すのはむずかしい」状況であるものと思う。 月ノ浦窯の2点の瓦当文様の特徴は蓮弁部分が窪んで表現されている。この点百済や高句麗の 軒丸瓦の瓦当の蓮華文様の蓮弁のあり方とは異なっているものと思う。

現状では、二つの論考が示す系譜については、月ノ浦窯の軒丸瓦の瓦当文様が自然発生した ものと考えられない以上、問題を今後に残しながらも妥当な推論とすべきものと考える。

2つの軒丸瓦のうち、第1図の2の軒丸瓦と同笵と考えられる軒丸瓦が最近福岡市博多区の那珂遺跡第23次調査で出土している。また、その調査でSD89と呼ぶ構からは神ノ前2号窯の無文の瓦当も出土しており、それぞれに共伴している丸瓦片・平瓦片のなかにも月ノ浦 I号窯で生産されたと思われる瓦片が認められることから1つの需要地として考えられるようになった。

(ii) 丸瓦片・平瓦片について

丸瓦片では行基式丸瓦・玉縁式丸瓦の両者があった。

行基式丸瓦片と考えられるものには粘土紐の巻きあげによるものと粘土板の巻きつけによる ものとがあり、模骨の痕跡にも竹状模骨を用いたものと板状の模骨が用いられたものとがあっ た。また、叩き痕には格子目が残っているものがあった。

玉縁式丸瓦片は点数が限られているから、不明な部分も多いが使用された模骨は平瓦と異なり板を連結したような痕跡のないものである。

平瓦片では、粘土紐桶巻き作りのもの粘土板桶巻作りのものがあった。

また、平瓦には平行・格子目・青海波文など須恵器の叩きしめに用いられる叩打具痕が認められた。

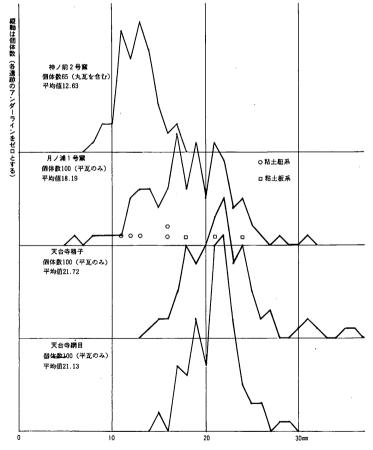
これらの要素を組み合わせることにより月ノ浦 I 号窯で焼かれた瓦の生産工房の単位にも注目してみたい。

丸・平瓦片の叩き痕で見るかぎり粘土紐・粘土板の製作技法の相異にかかわらずどちらにも 叩き跡を残しているから分類する基準とはならない。

そこで月ノ浦窯の平瓦片100点を無作為に選び厚さを1点ずつ計測し度数分布図を作成した。この結果、最小値0.6cm・最大値3.1cm・平均値18.19cmの度数分布曲線を描くことが出来る(第18図)。この表に粘土紐桶巻作りによるもの、その可能性のあるもの、粘土板桶巻作りによるもの、その可能性のあるものの厚さを挿入すると粘土紐桶巻き作りによるものは1.7cm以下の厚さの中でおさまり、粘土板桶巻き作りによるものは1.7cm以上の厚さに分布していることがわかる。

これに加えて神ノ 直 2 号窯(泥条盤架 技法)・天台寺跡出 土の格子瓦(粘土板 ・天台寺跡出 板 天台 ・大の格子瓦(粘土板 ・大の格子瓦(粘土板 ・大の格子瓦(粘土板 ・大の格子瓦(粘土で ででした。 ででしたではいるでは ででしたでするのででは がした(第18図)。

これによると神ノ 前2号窯の瓦の厚に は0.8~1.7cmの間に あり、平均値12.63 cmとなり薄手である こと。天台寺出土格 子目瓦では1.4~3.6 cmまであり平均値2 1.72cmで月ノ間型とな る。粘土紐桶巻き作



第18図 月ノ浦 | 号窯跡出土瓦と他遺跡出土瓦の厚さによる度数分布比較図

りで瓦は薄手に仕上がり、粘土板桶巻き作りではより厚く仕上げるというごく当然のことと言えばそれまでのことにすぎないが製作技法上での大きな相違である。月ノ浦 I 号窯で焼かれた瓦について、これを工房の差異と見ることが出来るとすれば粘土紐桶巻き作りを行った工房と粘土板桶巻き作りを行った工房の二つの存在を予想して良いのではないか。また、丸瓦の行基式例では竹状模骨・板を連結した模骨が、玉縁式はそれと異なるのではないかと思われる模骨が認められる。製作工具の差違がただちに工房の数とは言えないまでも、工房の数を予想する1つの素材とは考えて良い。丸瓦・平瓦のここでは月ノ浦 I 号窯には 2 つ以上の生産工房があったものと考えておくのにとどめたい。

最近、福岡市博多区所在の那珂遺跡第22・23次の発掘調査で神ノ前2号窯で生産されたと想定される丸・平瓦とともに月ノ浦1号窯で生産された瓦も発見されている。軒丸瓦とともにこの瓦窯で生産された瓦の需要先として注目される。

(iii) 鴟尾について

破片資料ではあるが、第10図 1 や第11図 5 から鰭と腹部との開き方を見ると通常の鴟尾の開きかたよりもかなり広い感じを持つ。試みに破片を想定位置にならべながら復元的な図を描いて見ると腹部鰭端の頂部近くでも60cm近いものと想定され、高さは140cm以上になるものと考えられる。 1 体の鴟尾を考えるのには部分が想定出来る破片が少ないから大きさについての推定は根拠としては弱い。

これ等のことから、教示を仰いだ方々の御意見のなかでも「想定される形が大型であるうえ、 これまでの見て来た鴟尾の形とはかなり異なったものではないか。」と言う意見や「日本風と いうより大陸的なものではないか。」という御意見もあった。

ここでは、御意見を紹介しておくに留めたい。

なお、今日まで九州地方においての鴟尾片の発見例を紹介しておこう。

- 椿市廃寺 福岡県行橋市大字福丸
 7世紀後半 『椿市廃寺』 行橋市教育委員会 1980
- 2. 舟迫堂帰り瓦窯跡 福岡県築上郡築上町舟迫
 7世紀後半 『豊前の古瓦展』図録北九州市立博物館 1979
- 3. 太宰府跡 福岡県太宰府市観世音寺 10世紀中葉 『太宰府史跡』 福岡県教育委員会 1969
- 4. 伊藤田ホヤ池瓦窯跡 大分県中津市伊藤田 7世紀後半 『豊前の古瓦展』図録北九州市市立博物館 1979

5. 渡鹿廃寺·渡鹿遺跡 熊本県熊本市大江町渡鹿

7世紀後半 松本雅明「肥後国渡鹿廃寺発掘調査報告」(『法文論叢』17文化篇・熊本大学)1964他

6. 興善寺廃寺 熊本県八代市興善寺町馬場

7世紀後半~8世紀? 鶴嶋俊彦「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学』 三島格会長石稀記念号 1991

- 7. 那珂八幡古墳周濠 福岡県福岡市博多区那珂
 - 7世紀後半? 福岡市教育委員会菅波正人の教示による。
- 8. ウトグチ窯跡 春日市大字上白水

7世紀後半 (1987年 春日市教育委員会調查)

これに本例を加えて 9 例である。なお $1\sim5$ は、『日本古代の鴟尾』 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館(1980)に収録されている。

(iv) おわりに

ここまで軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾について個別に取りあつかったが、これ等が1つの窯跡で焼き上げられたものであるから1体のものとして見なおすことが必要であろう。さらには、神ノ前2号窯や大浦窯との関連についても考える必要があろう。

3つの窯は、それぞれの瓦片に須恵器の製作に使用される叩打具痕が認められたように、瓦生産にあたっては須恵器製作工人が大きく関与したものと思われる。ただ、瓦の製作技法を比較すると、神ノ前2号窯の瓦は、「泥条盤築」技法で模骨痕や布目痕が一切認められない特徴があり、大浦窯の粘土板桶巻作りで凹面胴部に明瞭な糸切り痕跡や模骨痕跡を残している。この点、月ノ浦1号窯の瓦には粘土紐桶巻き作りによって製作された瓦と、粘土板桶巻き作りによって製作された瓦とがある。月ノ浦1号窯の粘土組桶巻き作りの瓦と神ノ前2号窯の粘土組巻き上げによる瓦の分離は神ノ前2号窯のものが、模骨痕や布目を一切残していないから比較的行いやすいものと思われる。ただし、第3図の2~4に見る狭端部を丸く作る瓦は、両方の瓦窯に見られる特徴でその分離は困難であろう。粘土板桶巻き作りによる瓦の大浦窯出土瓦との比較では、大浦窯のものでは糸切り痕跡が残っているのに対し、月ノ浦1号窯のものでは、明瞭な糸切り痕跡が見られないうえに平瓦胴部凸面が幅広くへラ削りされ、厚さも1.7cm以上のものが多い。3窯で生産された瓦には大きくは以上のような差違が認められる。

私見ではあるが、神ノ前2号窯は模骨やかぶせ布の存在がなく、土器と同じように作られた 瓦で瓦製作の最も初期の段階であり、大浦窯は粘土板桶巻き作りの一応完成された技術が導入 されたように見える。この点では月ノ浦 | 号窯の瓦は大浦窯の瓦に比較すると稚拙である。3 窯とも牛頸窯跡群のなかにあり、年代的にも接近していることを考えるとき、瓦の製作法を 知っている技術者の集団それぞれがグループを異にしているのではないかという気がしてならない。

また、月ノ浦 | 号窯では軒丸瓦・鴟尾を出土している。建物の屋根に葺く目的で軒丸瓦や鴟尾を用いることを知っている人々、その製作方法を知っている人々の存在を7世紀前半代の北部九州にも認める必要がある。

北部九州に瓦の製作技術をもたらしたものは、朝鮮半島の交流の所産と推論しておきたい。 また、その供給先は那珂遺跡群のなかに出土例を認めるように那珂遺跡群をはじめとする福 岡平野の同時期の建物(大和政権の出先機構)であったと考えるべきであろう。

- 〈註1〉 石松好雄・舟山良一「月ノ浦窯の小型瓦」『古代研究』25・26 元興寺文化財研究所 1983
- 〈註2〉 亀田修一「古瓦塼よりみた太宰府と朝鮮」『太宰府古文化論叢』下巻1983
- 〈註3〉 下村智他『那珂遺跡群第23次調査の報告その2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集ー那 珂遺跡4- 1992
- 〈註4〉 酒井仁夫他『神ノ前窯跡』太宰府町文化財調査報告 2 1979 なお、「泥条盤築」技法については、大脇潔(「研究ノート丸瓦の製作技術」奈良国立文化財研究所学報第49冊『研究論集 N. 1991)によれば中国では〈西周早期の瓦は、「泥条盤築」技法、すなわち、模骨を使わずに粘土紐を巻き上げて作った粘土円筒を4分割したものである。〉と解説し神ノ前2号窯出土瓦をその例として掲げている。筆者も今日の概要報告の作成にあたって神ノ前2号窯出土片のすべてを見なおした。

報告書にも「本例は模骨や成形台を使用しておらず……」とあるとおり、1 点として模骨痕 や布目痕を残した資料はない。従って、大脇の言う「泥条盤築」技法の好例と見なおすべきも のと考える。

- 〈註5〉 石松好雄他 「天台寺跡」『田川市文化財調査報告書』第6集 田川市教育委員会 1990 なお、粘土板桶巻き作りについては佐原真「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 1972 による。
- 〈註6〉 拙著 「九州における平瓦一枚作り」『九州歴史資料館研究論集』15 1990
- 〈註7〉 荒牧宏行「那珂遺跡群第22次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第253集 那珂遺跡群 3 1991
- 〈註8〉 註3に同じ

(3) 牛頸窯跡出土瓦について

(i)共伴須恵器と時期について

瓦と共伴する須恵器は小田氏編年の N~ N 期に属すが、小田浦40- I 号窯跡出土須恵器から42ページのように3段階に分けて考えた。これに高台付きの杯身が現われる④段階を加え、A 期、A B 期、B 期、C 期として論を進めたい。もう一度整理すると

A期-N期の中に含まれるが、Aタイプの蓋杯のみが出土し、Bタイプの蓋杯は出現しない。 また、すべて回転へラケズリを行う時期。

AB期ーやはりN期の中に含まれるが、Aタイプと共にBタイプの蓋杯も出現する時期。A タイプの蓋杯には回転ヘラケズリを行わないものも比較的多い。

B期-V期とされる時期。BタイプのみでAタイプの蓋杯はない。

C期- Ⅵ期に当たる。高台付きの杯身が現れる。細分できるが、ここでは行わない。 報告されている各遺跡の共伴須恵器を見ると以下のようになる。番号はP31の表に従う。

3. 野添13号窯跡 ------ AB期

4. 月ノ浦 I 号窯跡 ------ A~B期

5. 小田浦28地点 ------ A~C期

7. 浦ノ原 4 号窯跡 ------ AB~C期

9. " A地区竪穴状遺構 …… AB~C期

10. 惣利西遺跡 2 号住居跡 ------ A~B期

同 4号住居跡 ·········· A~B期

瓦が共伴する須恵器のすべての時期にわたって焼かれたのか、ある一時期に焼かれたものかはわからない。たとえば、月ノ浦 I 号窯跡の場合、須恵器の量はA期のものがほとんどでB期のものは少ない。これから、須恵器が多く焼かれたA期に瓦も焼かれたのか、B期の須恵器が少ないのはこの時期に瓦を多く焼いた結果であるのか判断できない。従って、瓦の製作年代としては、一応共伴資料の新しい時期に比定しなければならないが、可能性としては古い共伴資料の時期もあり得る。

以上のことより、最も古い瓦を出す窯跡は神ノ前2号窯跡で、次に大浦2号窯跡、野添13号窯跡が続く。月ノ浦1号窯跡、小田浦28地点、浦ノ原4号窯跡は出土須恵器に時期差があって必ずしも、一系列的に呈示できない。A期は6世紀末~7世紀初頭、AB期を7世紀前半でも早い時期、B期はそれに続く7世紀前半、C期は7世紀中頃~後半頃と考えられるので、牛頸窯跡群では6世紀末~7世紀初頭頃に瓦の生産が始まり、7世紀前半には数ヶ所の窯で瓦を焼

成していたことがわかる。

(ii) 技法の問題

月ノ浦 「号窯跡や小田浦28地点出土の瓦を見た方々の感想は「何と変わったものか」、「よくわからない」というものであった。定型化した瓦と違って、技法が一定していない、系譜がわからないというのが特徴の一つとして上げられると思う。

報告者としては、技法について細部にわたって検討する力量はない。ここでは、特徴的な同心円文タタキと平瓦の狭端部の断面形に着目して、それぞれの瓦がどう位置付けられるか検討してみたい。初めに窯跡出土瓦の特徴をおおざっぱにまとめると以下のようになる。

やはり神ノ前 2 号窯 跡のものが布目、模骨 痕がないなど他と大栗 気をしている。 栗 氏も述べておられる うに現在牛頸窯跡群内 最古の瓦と考えてしい だろう。

その他について見ると、大浦2号窯跡、野

	粘土板 粘土紐	模骨痕	凹面調整	凸面調整
神ノ前2号窯跡出土瓦	粘土紐*	なし	指ナデ	指ナデ、ハケ貝
大浦 2 号 ″	粘土板	あり	布目→同心円文タタキ 布目→円形体のタタキ	平行タタキ ナデ
野添13号 "	粘土板	あり	同心円文タタキ、ナデ ケズリ、布目	平行タタキ →ナデ
月ノ補【号 "	両 者	あり	布目→ナデ 同心円文タタキ	平行タタキ 格子目 〃 ヘラケズリ、ナデ
小田浦28地点		あり	布目、ナデ	平行タタキ ヘラケズリ、ナデ
浦ノ原 4 号窯跡出土瓦	両 者	あり	同心円文タタキ ナデ、布目	平行タタキ 格子目 "

*栗原氏ご教示

添13号窯跡、月ノ浦 I 号窯跡そして浦ノ原 4 号窯跡(A地区竪穴状遺構)のものには同心円文タタキが見られるという共通点がある。浦ノ原出土瓦について報告者は共伴須恵器の新しいものに合わせて7世紀後半としているが、より古い須恵器も多く出土しており、総合的に考えれば、大浦、野添のものと同様AB~B期に製作されたと考えても不都合はないと思われる。

次に月ノ浦 I 号窯跡出土瓦については平瓦狭端部断面を土器の口縁部のように丸く作るものがあるが、これは大浦例にはなく神ノ前出土の瓦に見られる。栗原氏が「月ノ浦 I 号窯の瓦は大浦窯の瓦に比較すると稚拙である。」(P 47)と述べていることと合わせ、月ノ浦 I 号窯跡出土瓦を神ノ前例の後で野添・大浦・浦ノ原例よりも前の段階のものと推定したい。

小田浦28地点出土瓦については、特徴の一つとして同心円文タタキが見られないことを上げたいが、報告したとおり円筒状土製品や大型円筒状土製品内面には見られる。また、平瓦の中に月ノ浦例と同様に狭端部断面を丸く作るものがある。これは野添・大浦・浦ノ原例には見られない。以上のことから月ノ浦例と同様神ノ前例と野添・大浦・浦ノ原例の間に位置づけたい。

以上、牽強付会に過ぎるかもしれないが、位置付けを行ってみた。しかし、神ノ前2号窯跡 出土瓦が若干先行する他はそれほど時期的に差のない一群と考えて良いのではないかと思われ

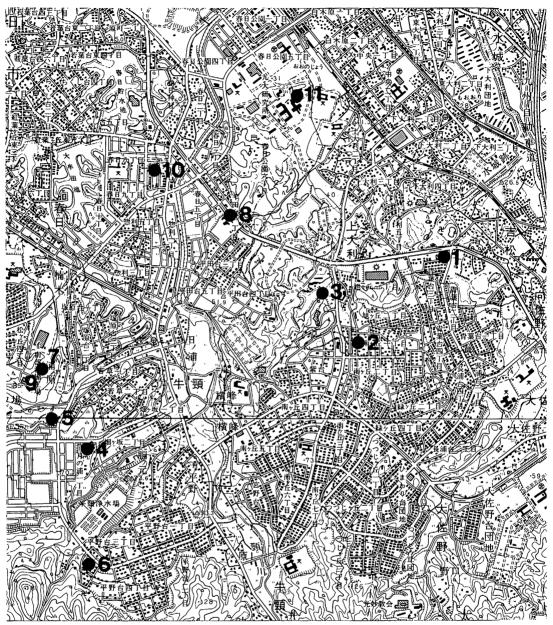
(iii) まとめ

月ノ浦 I 号窯跡出土瓦を始め、言わば牛頸窯跡群内の初期瓦が 6 世紀末~ 7 世紀初頭から 7 世紀前半のある時期に比較的多く焼成されていたことが確認された。いずれも技法が一定しておらず、系譜をたどることが難しい。また、窯は瓦専用のものではなく、須恵器を焼く通常の窯であった。野添13号窯跡と大浦 2 号窯跡は位置的にも時期的にも近く、瓦も似ている。おそらく同一の工人(須恵器工人)が粘土をこね、その時々の都合で焼成する窯を決めたのではないかと思われる。まさしく瓦陶兼業窯と呼ぶにふさわしい。その結果としてか、出土遺物総量のうち瓦の占める割合は低い。

さて、これらの瓦が葺かれた建物の性格並びにその建物の建っていた場所について興味が持たれる。畿内においても宮殿が瓦葺きになるのは藤原宮からで、それ以前の瓦はもっぱら寺に使われている。牛頸窯跡群の瓦の年代は7世紀前半頃と考えられることから、やはり古い寺があったことを想定するのが妥当か、外国の使節と最初に接する場所という北部九州の特殊性を認めて筑紫大宰等の官の建物を想定するのが良いか、または、稚拙な作りの瓦であることから場合によっては竪穴住居の棟の部分等を飾ったのではないかという意見まである。最近、牛頸窯跡群から約9㎞北にある福岡市那珂遺跡から月ノ浦 I 号窯跡出土軒丸瓦と同范と思われる軒丸瓦や神ノ前 2 号窯跡出土の軒丸瓦と似た軒丸瓦片そして平瓦類が出土した。主にSD89と名付けられた大溝からの出土である。近くには7世紀前半代とされる並び倉様の堀立柱建物がある。しかし、遺跡の中心はここより東または南にあるのではないだろうかということである。

この項を書くに当たり、栗原氏を始め、福岡大学教授小田富士雄先生、春日市教育委員会丸 山康晴、平田定幸、福岡市教育委員会下村智の各氏にご教示いただいた。感謝の意を表したい。

- 〈註1〉 報告者は一部小田氏編年のⅡB期までさかのぼる可能性があるとしている。
- <註2〉 報告書では N ~ V 期としたが、本文のようにしぼれるのではないかと思う。
- 〈註3〉『那珂遺跡 4 』福岡市教育委員会 1992 同遺跡からは他にも初期瓦が出土している。
- 〈註4〉 福岡市教育委員会技師下村智氏にご教示。

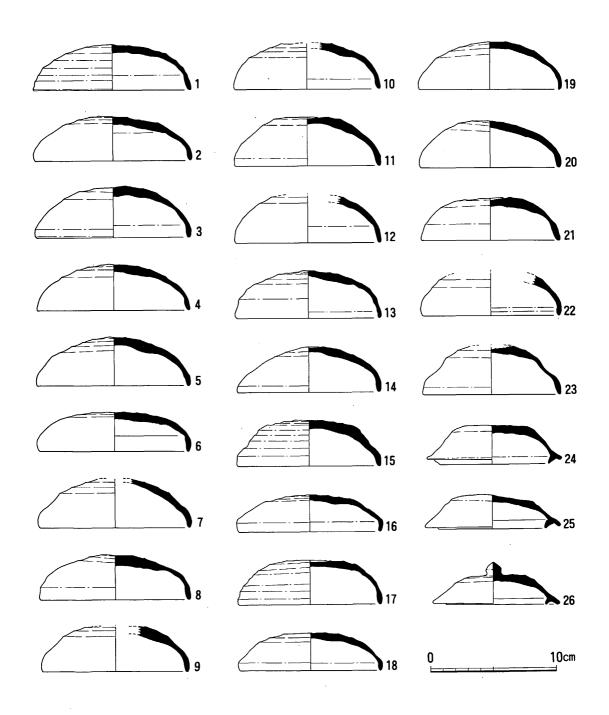


第19図 牛頸窯跡群内の瓦出土遺跡(1/2.5万)

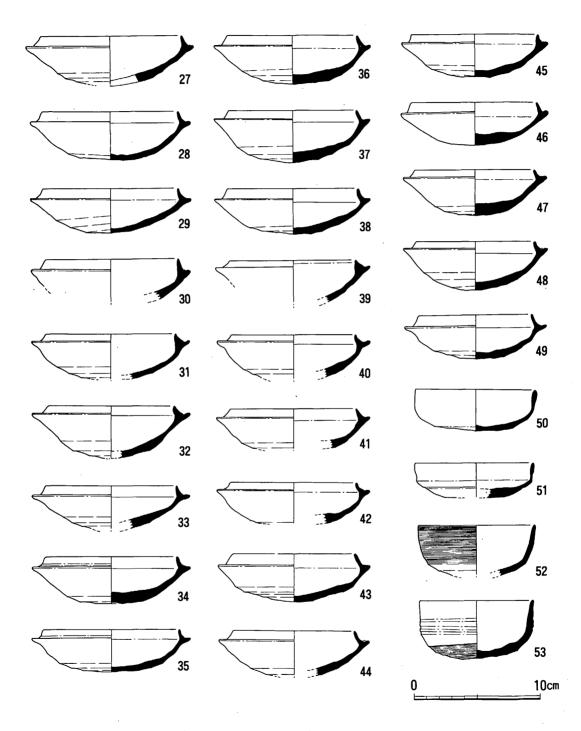
- 1. 神ノ前2号窯跡。
- 2. 大浦2号窯跡
- 3. 野添13号窯跡
- 4.月ノ浦[号窯跡
- 5. 小田浦28地点
- 6. 大谷窯跡
- 7. 浦ノ原 4 号窯跡
- 8. 春日平田窯跡
- 9. 浦ノ原A地区竪穴状遺構
- 10. 惣利西遺跡 2・4 号住居跡
- 11. 九州大学筑紫地区キャンパス内遺跡

遺物実測図

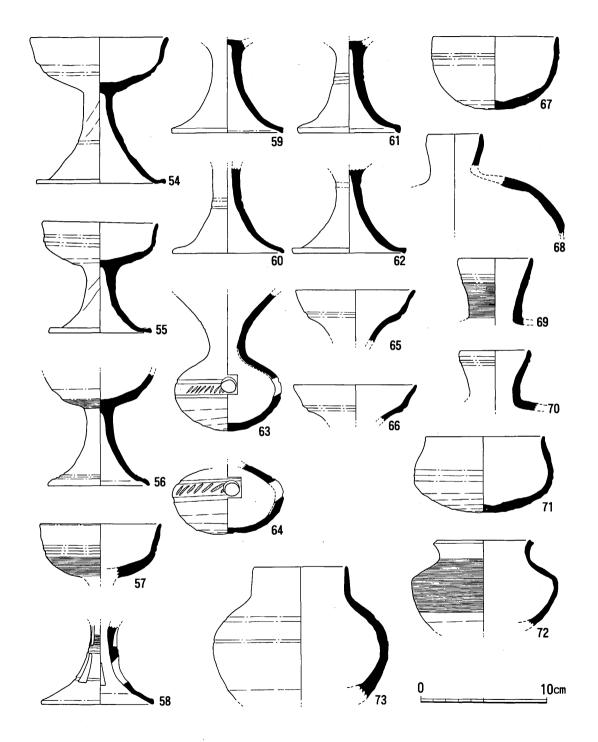
~-9							
月ノ浦Ⅰ号窯跡53							
、田浦28曲占60							



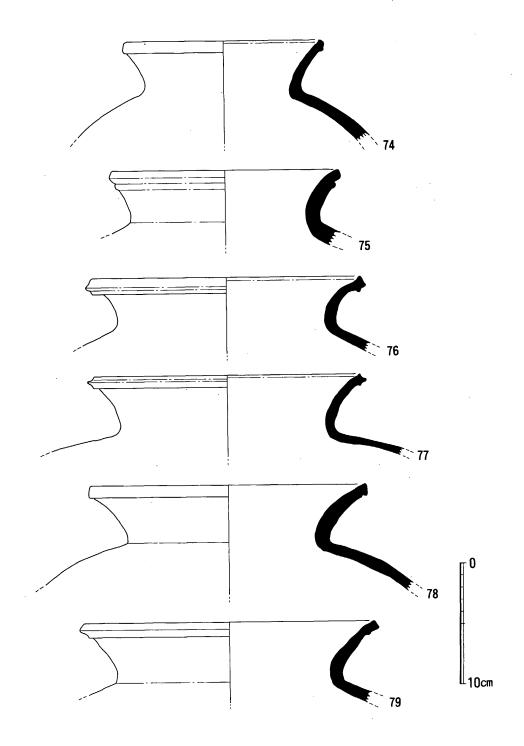
第20図 月ノ浦 | 号窯跡出土須恵器実測図①(1/3)



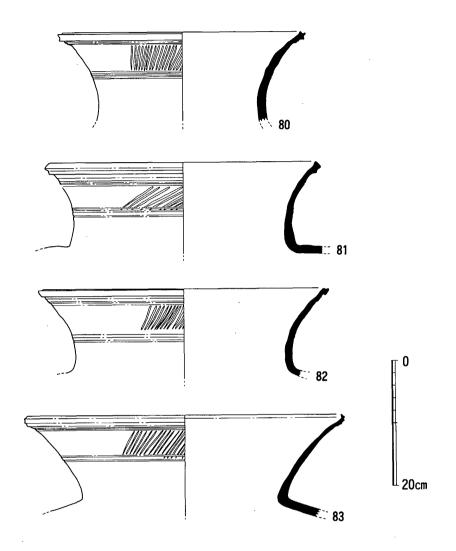
第21図 月ノ浦 | 号窯跡出土須恵器実測図②(1/3)



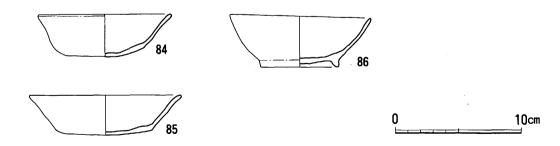
第22図 月ノ浦 | 号窯跡出土須恵器実測図③(1/3)



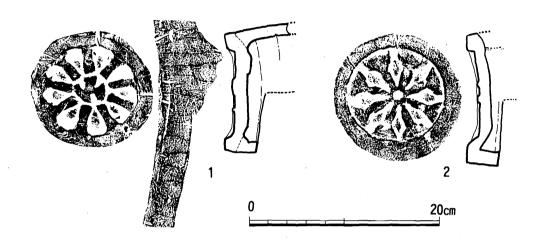
第23図 月ノ浦 | 号窯跡出土須恵器実測図④(1/3)



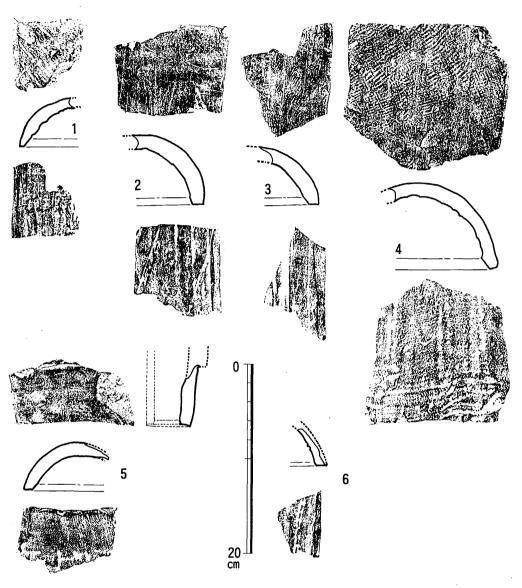
第24図 月ノ浦 [号窯跡出土須恵器実測図⑤(1/6)



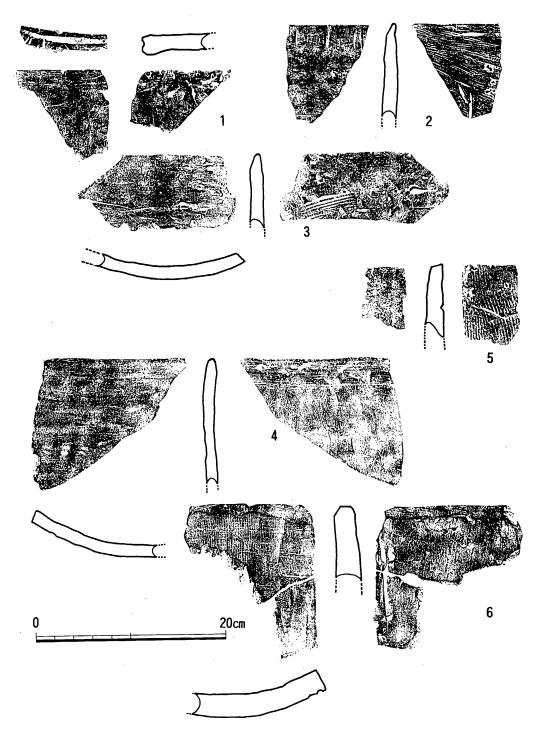
第25図 27地点土抗基 S K 01出土遺物実測図(1/3)



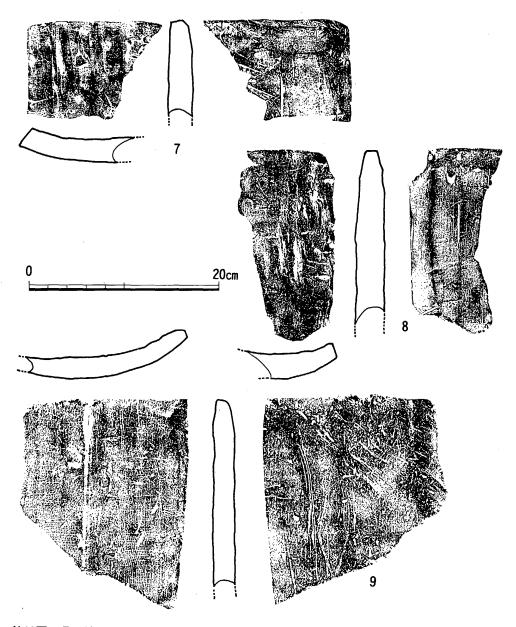
第26図 月ノ浦 [号窯跡出土軒丸瓦実測図・拓影 (1/4)



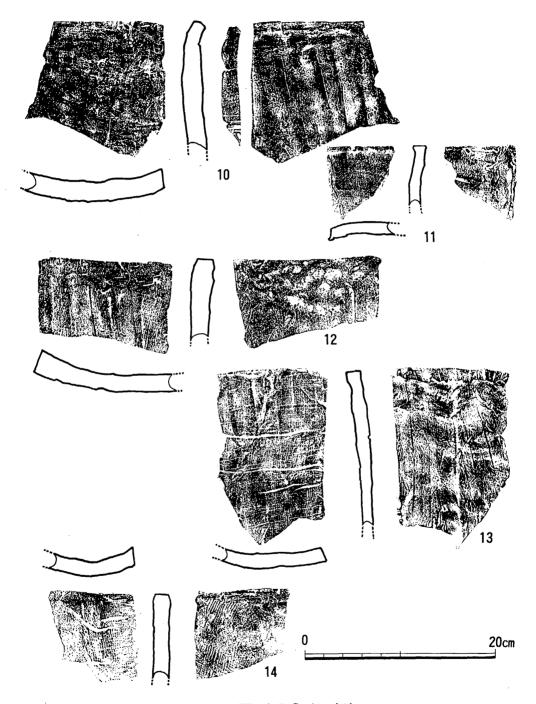
第27図 月ノ浦 | 号窯跡出土丸瓦実測図・拓影 (1/4)



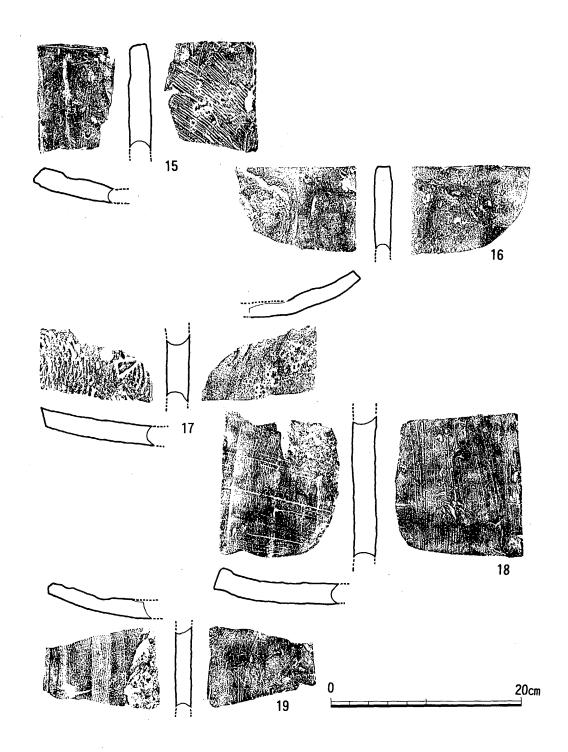
第28図 月ノ浦 | 号窯跡出土平瓦実測図・拓影① (1/4)



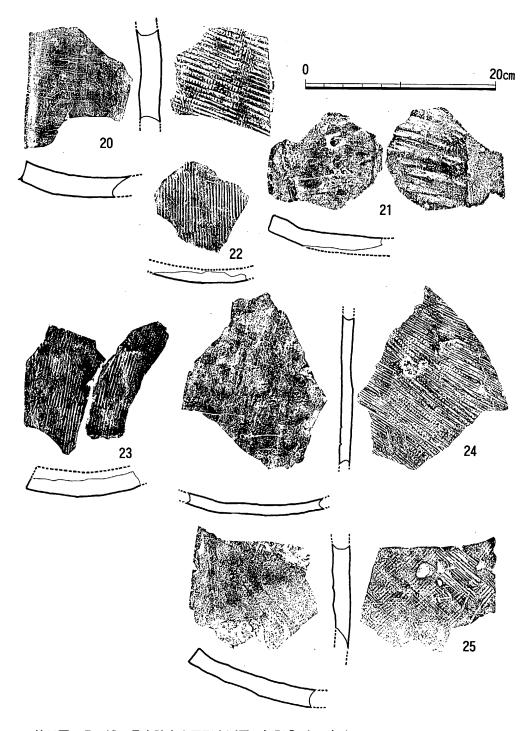
第29図 月ノ浦「号窯跡出土平瓦実測図・拓影② (1/4)



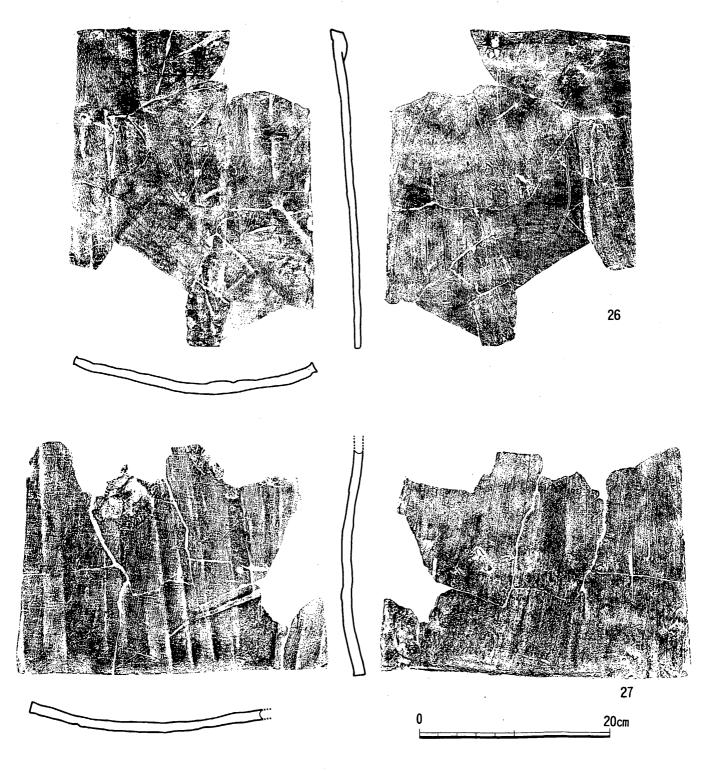
第30図 月ノ浦 | 号窯跡出土平瓦実測図・拓影③(1/4)



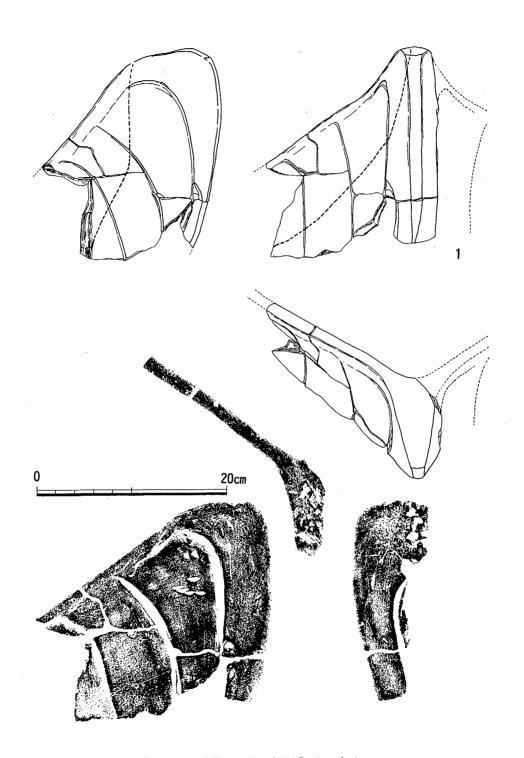
第31図 月ノ浦 | 号窯跡出土平瓦実測図・拓影④(1/4)



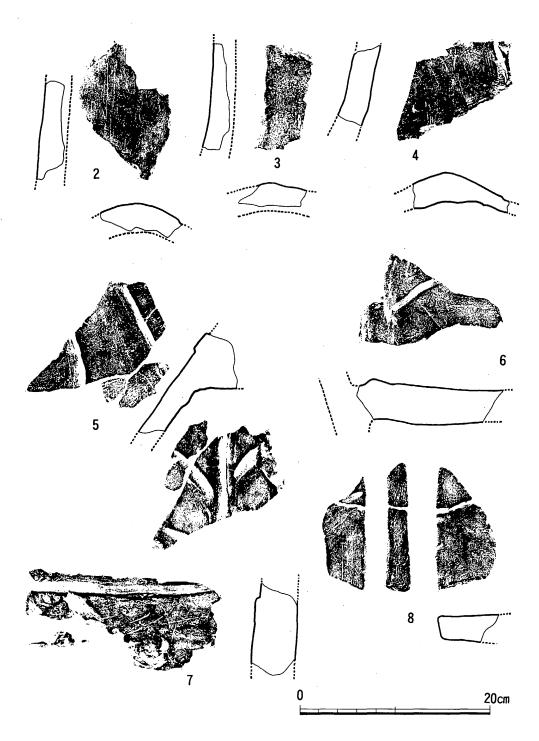
第32図 月ノ浦 | 号窯跡出土平瓦実測図・拓影⑤ (1/4)



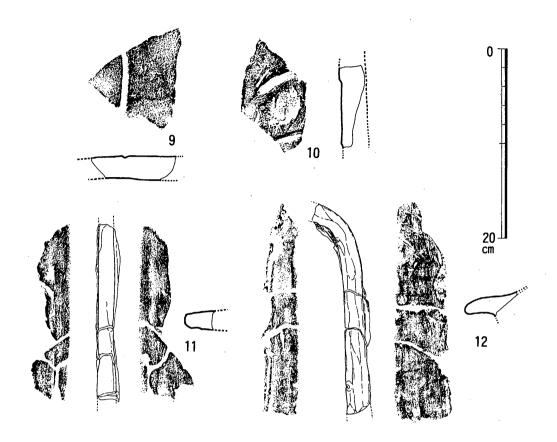
第33図 月ノ浦 [号窯跡出土平瓦実測図・拓影⑥ (1/4)



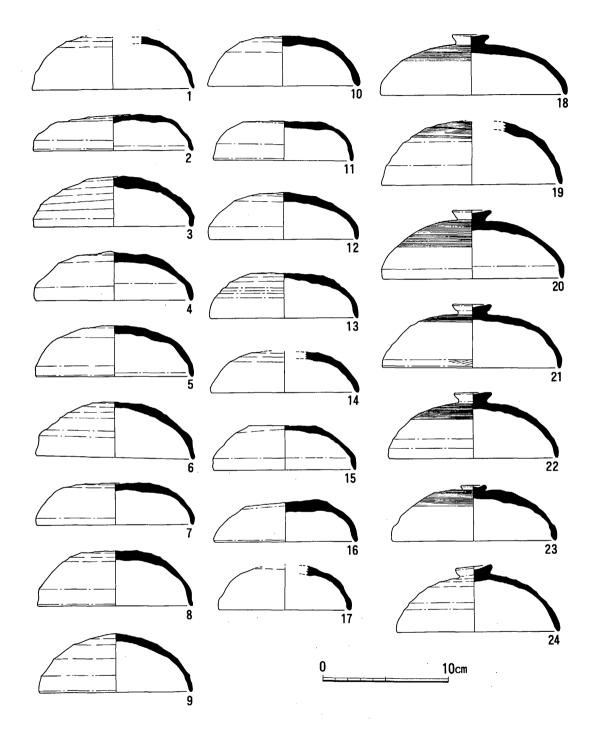
第34図 月ノ浦 | 号窯跡出土鴟尾実測図・拓影① (1/4)



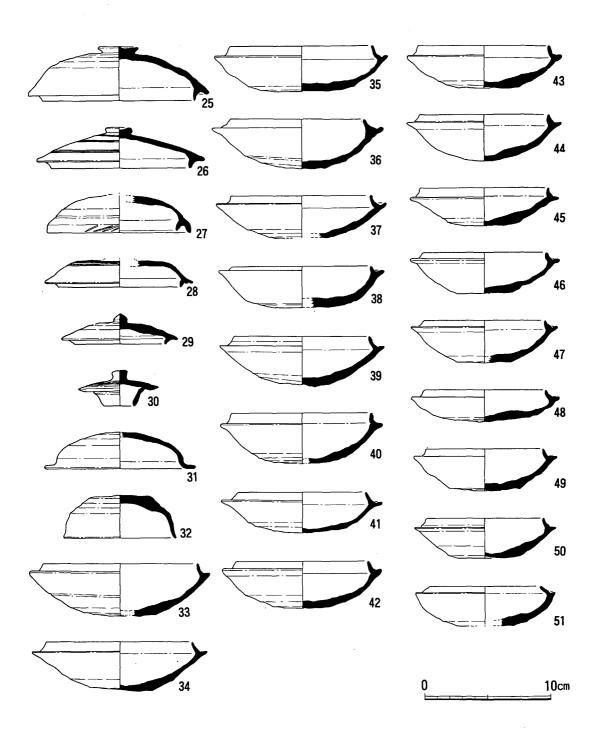
第35図 月ノ浦 | 号窯跡出土鴟尾実測図・拓影②(1/4)



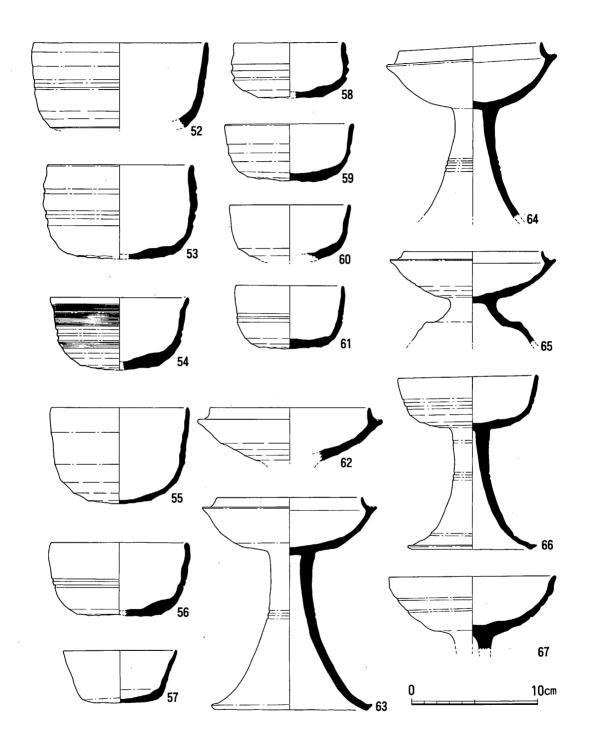
第36図 月ノ浦 | 号窯跡出土鴟尾実測図・拓影③ (1/4)



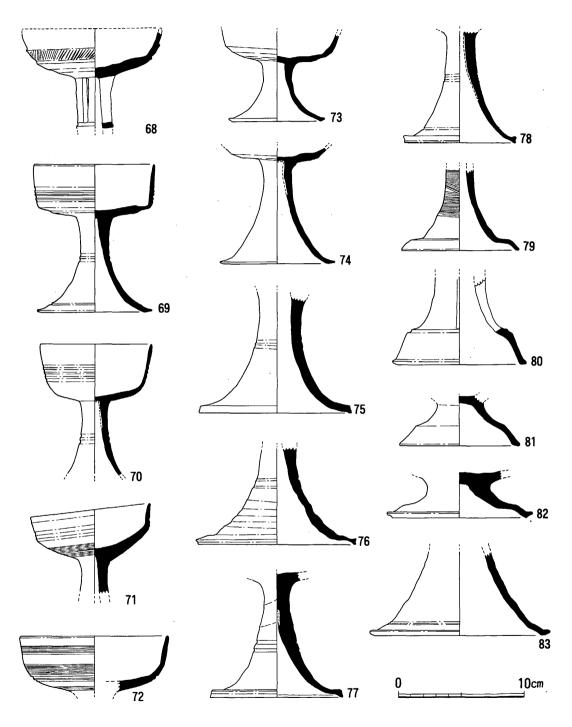
第37図 小田浦28地点出土須恵器実測図① (1/3)



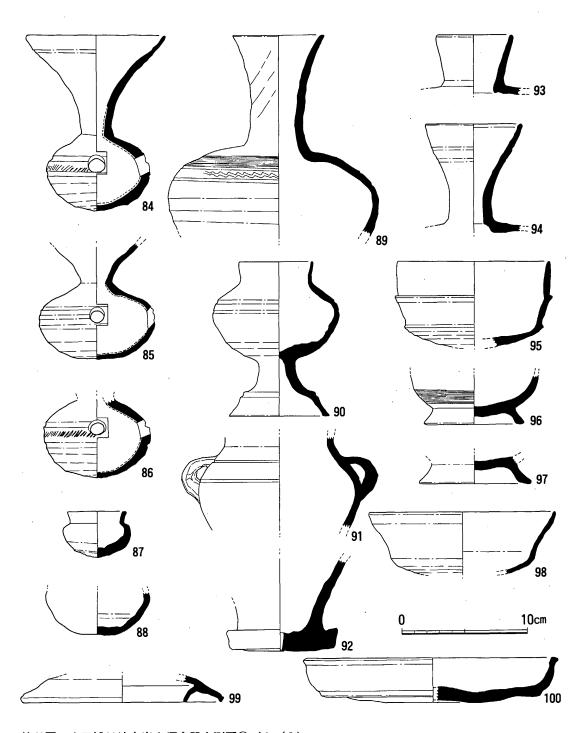
第38図 小田浦28地点出土須恵器実測図②(1/3)



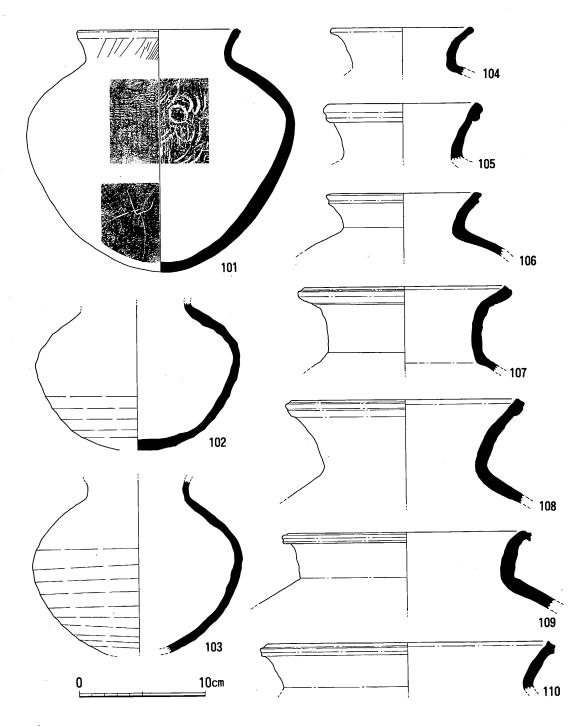
第39図 小田浦28地点出土須恵器実測図③(1/3)



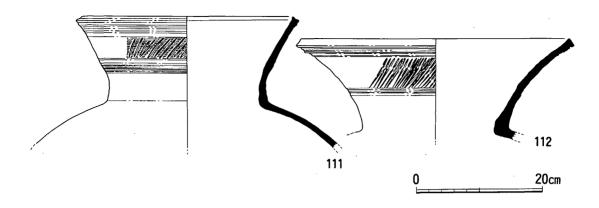
第40図 小田浦28地点出土須恵器実測図④(1/3)



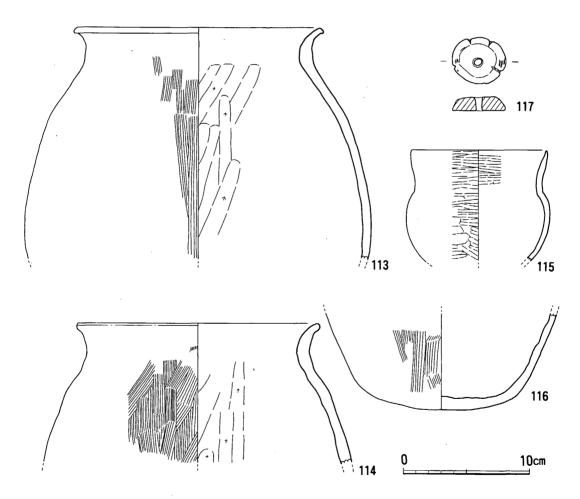
第41図 小田浦28地点出土須恵器実測図⑤(1/3)



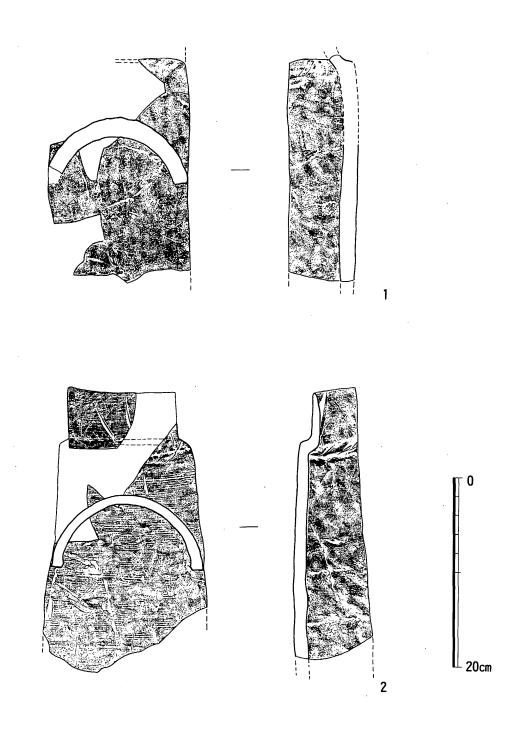
第42図 小田浦28地点出土須恵器実測図⑥(1/3)



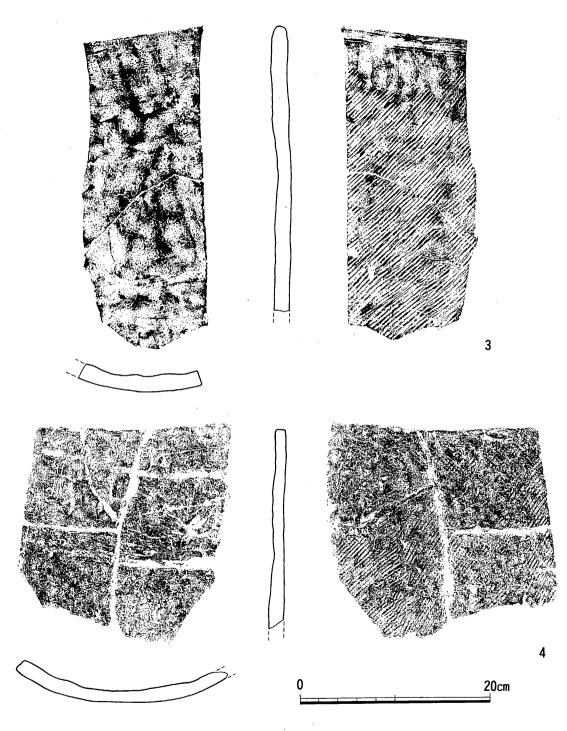
第43図 小田浦28地点出土須恵沿実測図⑦(1/6)



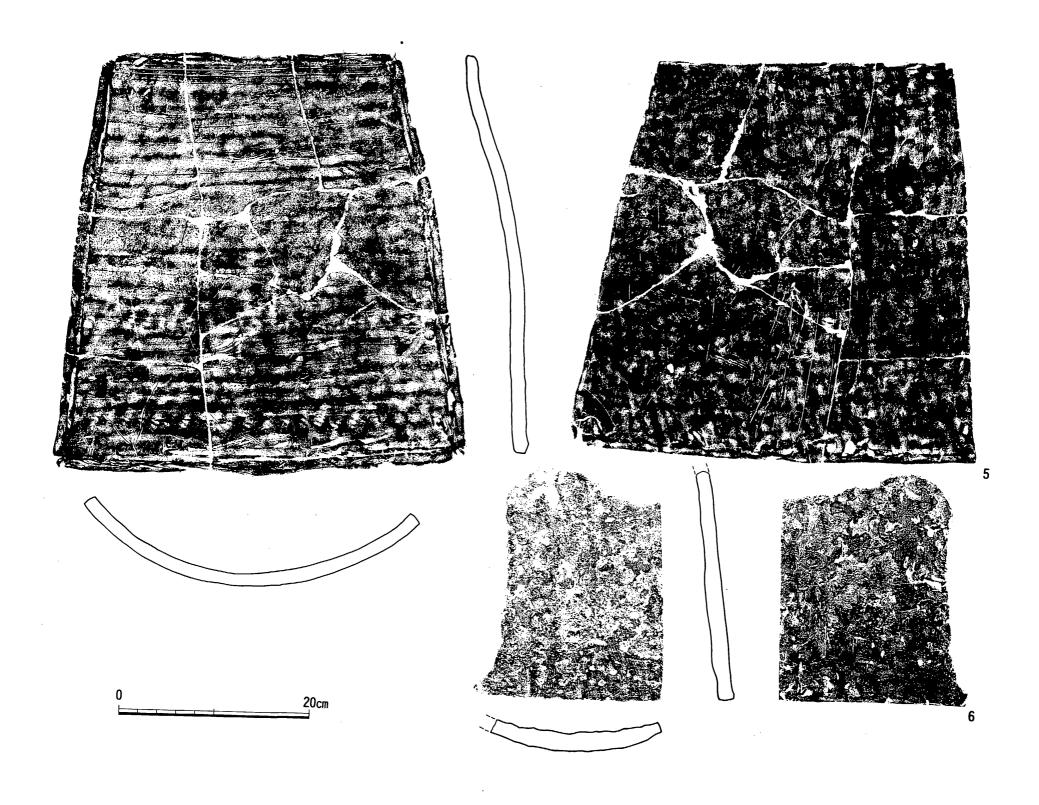
第44図 小田浦28地点出土遺物実測図(1/3)



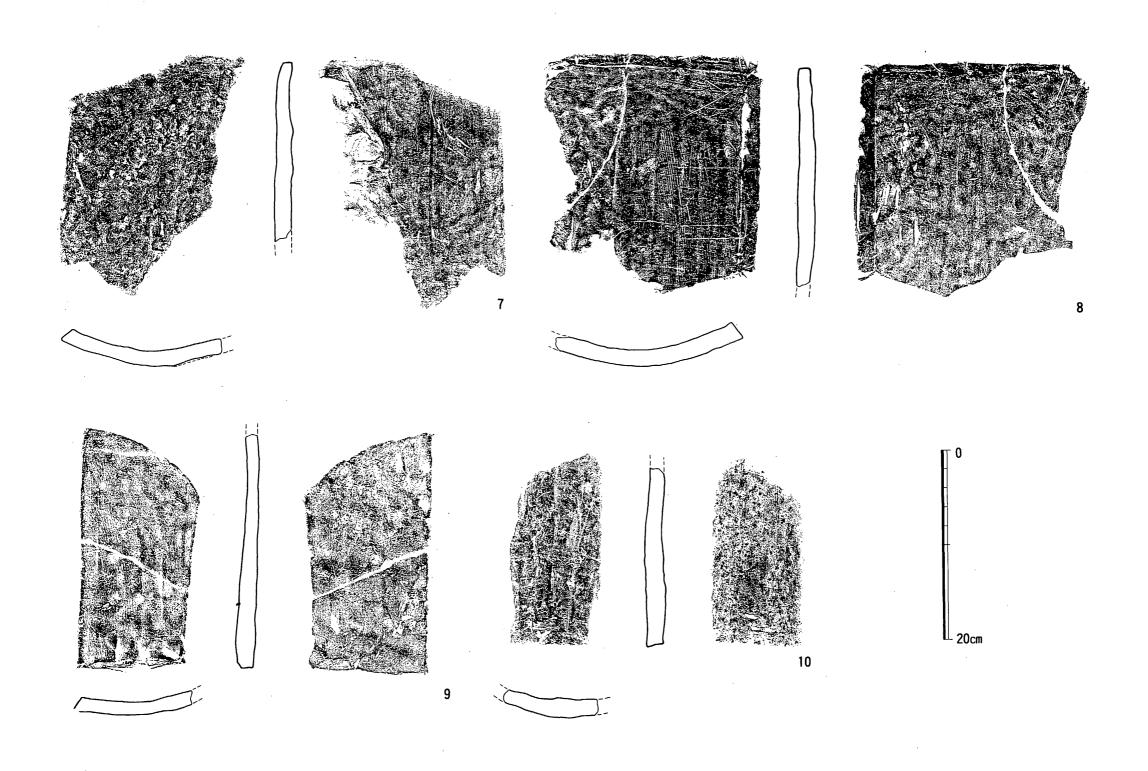
第45図 小田浦28地点出土丸瓦実測図・拓影(1/4)



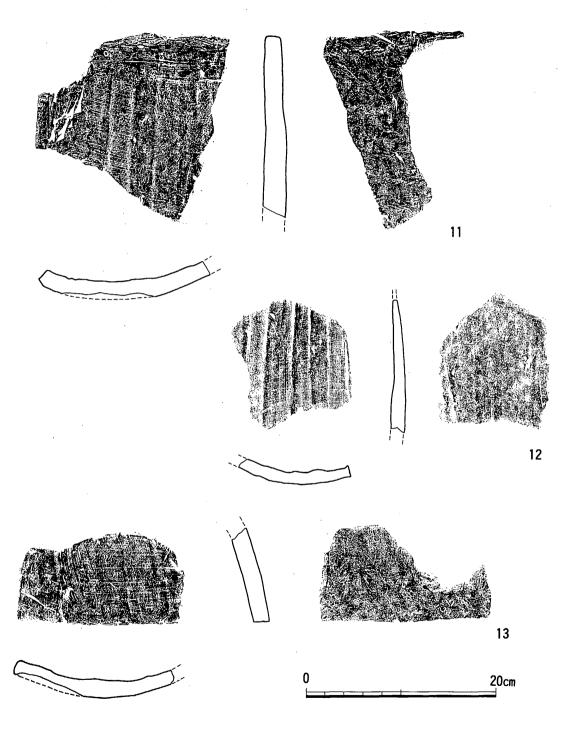
第46図 小田浦28地点出土平瓦実測図・拓影① (1/4)



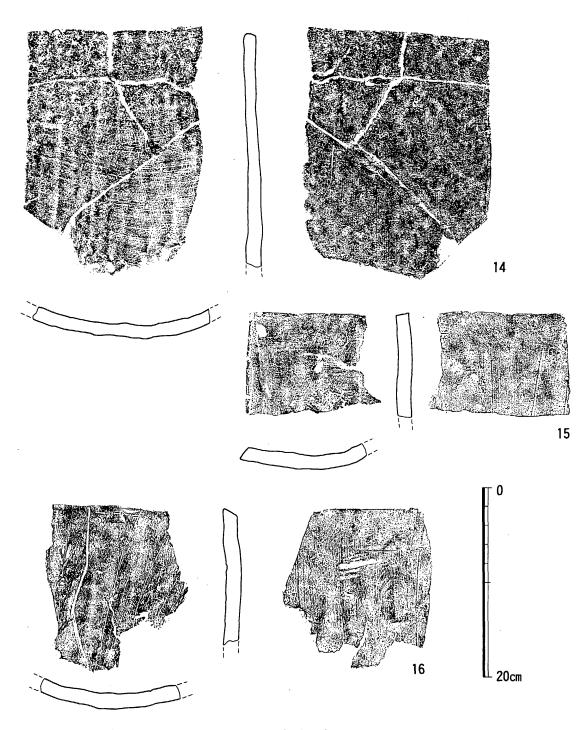
第47図 小田浦28地点出土平瓦実測図・拓影②(1/4)



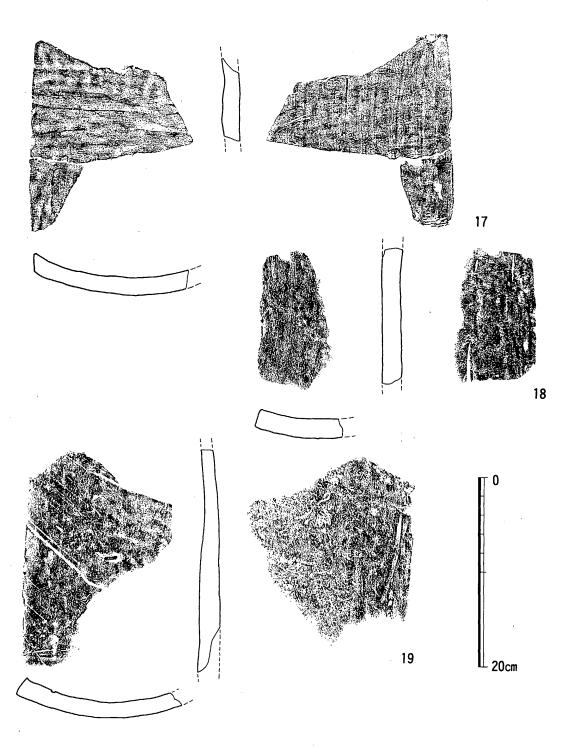
第48図 小田浦28地点出土平瓦実測図・拓影③(1/4)



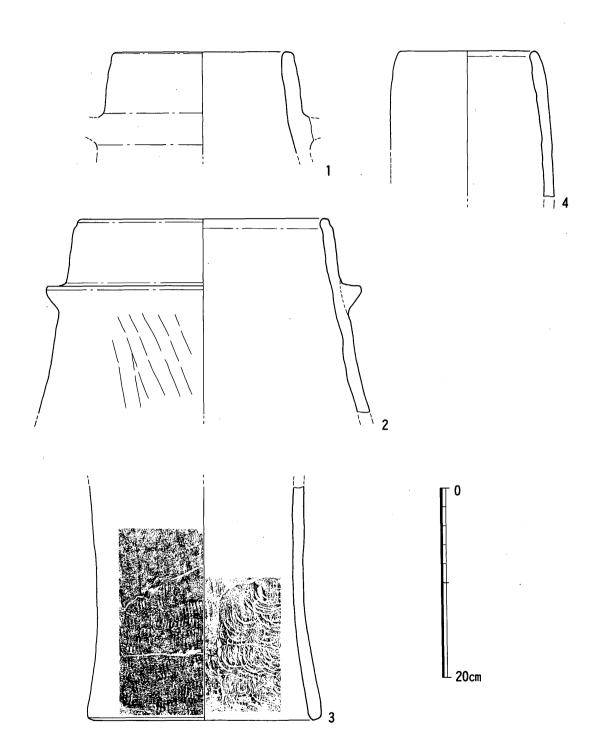
第49図 小田浦28地点出土平瓦実測図・拓影④(1/4)



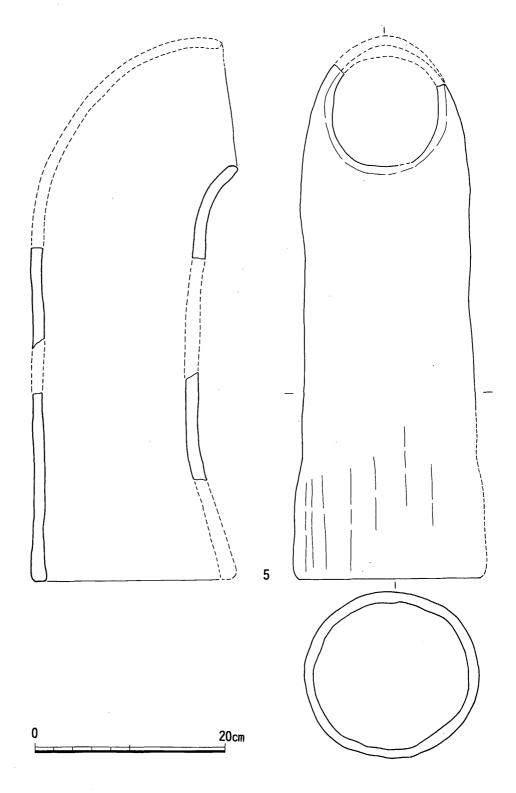
第50図 小田浦28地点出土平瓦実測図·拓影⑤(1/4)



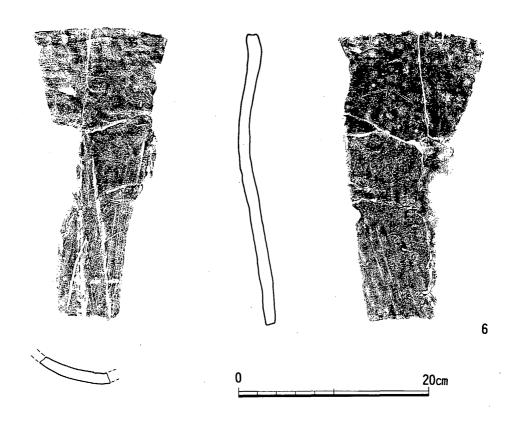
第51図 小田浦28地点出土平瓦実測図・拓影⑥(1/4)



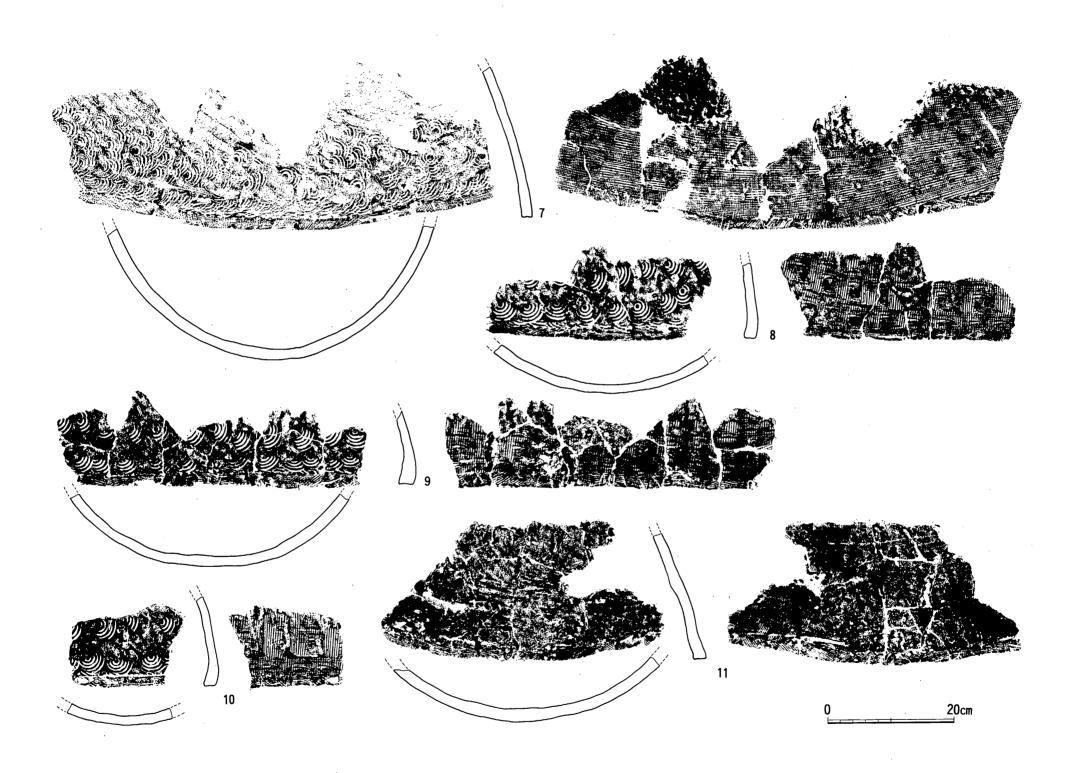
第52図 小田浦28地点出土円筒状土製品実測図・拓影①(1/4)



第53図 小田浦28地点出土円筒状土製品実測図・拓影②(1/4)



第54図 小田浦28地点出土丸瓦状土製品実測図・拓影 (1/4)



第55図 小田浦28地点出土大型円筒状土製品実測図・拓影(1/6)

遺物観察表

ページ
月の浦 号窯跡85
小田浦28地点88
※()は推定値を表わす。

月の浦|号窯跡

遺物 番号	器種	出土地点	法①口径 ②器高 量®最大径	手 法	の 特 復	ģ	備 考 A 色調 B 胎土 C 佐成 D 残存 A 内外面 淡青灰色
. 1	杯盏	灰原	① (12.9) ② 3.8	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面 1 / 2 不定方向のナデ、	他は回転	B 砂粒わずかに含む、やや密 C 良好 D 1/2
2	"	"	① (12.6) ② 3.7	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面 2 / 3 不定方向のナデ、	他は回転	D 1/2 A 内外面 暗背灰色 B 砂粒やや含む、密 C D 1/2
3	. 11	"	① (12.5) ② 4.2	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面 1 / 2 不定方向のナデ、	他は回転	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好
4	"	"	① (12.4) ② 3.8	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面 1 / 2 不定方向のナデ、	他は回転	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好
5	"	"	① (12.4) ② 4.0	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面 1 / 2 不定方向のナデ、	他は回転	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 1/2
6	"	"	①12.2 ② 3.3	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面 1 / 2 不定方向のナデ、	他は回転	A 内面 狭灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
7	"	"	① (12.2) ② 4.0	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。	内面 3 / 5 不定方向のナデ、	他は回転	A 内面 青灰色 外面 灰色 B 砂粒多く含む、密 C 良好 D 1/3
8	"	"	① (12.2) ② 3.7	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面 1 / 2 不定方向のナデ、	他は回転	A 内面 狭宵灰色 外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
9	"	"	① (11.9) ② 3.7	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面 1 / 2 不定方向のナデ、	他は回転	D 1 2 A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C セヤベ良 D 1 4
10	"	"	① (11.8) ②(3.8)	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。	内面 1 / 3 不定方向のナデ、	他は回転	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 良好 D 1/5
11	"	"	① (11.8) ② 4.0	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。	内面 1 / 2 不定方向のナデ。	他は回転	A 内外面
12	"	"	① (11.8) ② 3.8	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。	内面 1 / 4 不定方向のナデ、	他は回転	B 砂粒やや含む、相 C 不良 D 1/3
13	"	"	① (11.7) ② 3.9	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。	内面 1 / 2 不定方向のナデ、	他は回転	A 内面
14	"	"	① (11.6) ② 3.8	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面1/3不定方向のナデ、	他は回転	A 内外面 青灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
15	. "	"	① (11.6) ② 3.8	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。	内面 2 / 3 不定方向のナデ、	他は回転	D 1/2 A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、やや粗 C 良好 D 1/3
16	"	"	①11.6 ② 3.1	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面 3 / 4 不定方向のナデ、	他は回転	A 内面 淡灰色 外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 2/3
17	"	"	①11.6 ② 3.7	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。	内面 1 / 2 不定方向のナデ、	他は回転	A 内面 背灰色 外面 暗背灰色 B 和粒かずかに含む、密 C 良好 D 2/3
18	"	"	① (11.5) ② 3.1	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。	内面 1 / 2 不定方向のナデ。	他は回転	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 1/2
19	"	"	①11.5 ② 4 .9	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面1/2不定方向のナデ、	他は回転	C 良好 D 6/7
20	"	"	① (11.3) ② 3.8	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面2/3不定方向のナデ、	他は回転	A 内面 淡青灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好
21	"	"	① (11.2) ② 3.6	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。ヘラ記号あり。	内面1/2不定方向のナデ、	他は回転	D 4*/5 A 内面 接灰色 外面 暗胃灰色 砂粒やや含む、密 C 良好 D 3/4 A 内外面 灰色 B 細粒やや含む、密
22	"	"	① (11.2) ⑧ (11.6)	残存部内外面回転ナデ。			C 良好
23	"	"	① (11.2) ② 4.0	天井部外面回転へラ削り、 ナデ。	内面1/2不定方向のナデ、	他は回転	A 内外面 淡灰色 B 細粒やや含む、やや密 C やや不良 D 1/3
24	"	"	① 8.9 ② 3.2 ⑧11.1	天井部外面回転へラ削り、	. 他は回転ナデ。ヘラ記号あり	b.	A 内外面 淡茶灰色 B 砂粒ややきむ、粗 C やや水良 D 完形
25	"	"	① 8.7 ② 2.9 ⑧11.1	天井部外面へラ切り後ナ 転ナデ。	デ、内面1/2不定方向のナラ	デ、他は回	A 内面 淡茶灰色 外面 暗茶灰色 B 砂粒やや含む、粗 C やや不良 D 完形

遺物 番号	器	種	出土地点	法①口径 量⑦受部径	②器高 ⑧最大径	手	- 法	Ø	特	徵	G	C)K(X
26	杯	蓋	灰 原	① 8.2 ⑧10.4	② 3.5	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号あ		、内面1/2	不定方向のナラ	デ、他は回転	A B C D	内外面 淡茶灰色 細粒やや含む、やや粗 やや不良 はぼ完形
27	杯	身	η	①11.5 ⑦13.8	② 3.8	底部外面回転へラ デ。	削り、	内面 1 / 2 オ	定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	は注完形 内面 背灰色 外面 灰色 砂粒やや含む、密 良好 2/3
28	,	,	"	① (11.2) ⑦ (13.2)	② 4.0	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり。		内面 1 / 2 7	定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内面 暗背灰色 外面 灰色 砂粒やや含む、密 良好 2/3
29	,	,	"	①11.1 ⑦13.2	② 3.7	底部外面回転ヘラ デ。	削り、	内面 2 / 3 オ	で定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内面 淡青灰色 外面 淡灰色 砂粒わずかに含む、密 e.G.
30	,	,	"	① (10.9) ⑦ (13.1)		残存部内外面回転	ナデ。	ヘラ記号あり).		A B C D	1.4 内外面 淡黄灰色 砂粒やや含む、粗 やや不良 1 内外面 灰色
31	,	,	"	① (10.6) ⑦ (13.0)	② 3.7	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり	削り、	内面 2 / 3 7	で定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	細粒わずかに含む、やや粗 良好 レン3
32	,	,	"	① (10.4) ⑦ (13.0)	② 4.4	底部外面回転へラ デ。	——— 削り、	内面 1 / 2 オ	で定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内面 淡茶灰色 外面 灰色 砂粒わずかに含む、粗 良好 1/2
33	,	''	"	① (10.8) ⑦ (13.0)	② 3.5	底部外面回転へラ デ。	削り、	内面 2 / 3 7	で定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内外面 灰色 砂粒やや含む、やや粗 良好 1/3
34	,	,	"	① (10.8) ⑦ (13.0)	② 3.9	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり		内面 1 / 3 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内外面 褐色 砂粒多く含む、粗 不良 1/3
35	,	,	"	① (11.2) ⑦ (13.0)	② 3.5	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり		内面 1 / 2 7	ド定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内面 背灰色 外面 灰色 砂粒やや含む、密 良好 2/3
36	,	,	"	①10.7 ⑦12.9	② 4.0	底部外面回転ヘラ デ。ヘラ記号あり	削り、 。	内面 2 / 3 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	2/3 内外面 暗灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 5/6
37	,	"	"	①10.5 ⑦12.8	② 4.3	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり		内面 1 / 2 7	応定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	**/6 内外面 淡灰色 砂粒多く含む、密 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日
38	,	"	"	①10.8 ⑦12.8	② 3.8	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり		内面 1 / 2 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内面 淡青灰色 外面 灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 2/3
39	,	,	"	①10.4 ⑦12.7		残存部内外面回転	ナデ。				A B C D	内面 淡青灰色 外面 灰色 砂粒やや含む、密 良好 1/3
40	,	"	"	① (10.2) ⑦ (12.6)	② 3.5	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり		内面 1 / 2 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内外面 淡青灰色 砂粒わずかに含む、やや密 良好 1/3
41	,	"	"	①10.4 ⑦12.6	② 3.5	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり		内面 1 / 2 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内外面 灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 小片
42	,	"	"	① (10.3) ⑦ (12.6)	② 3.4	底部外面回転ヘラ	削り、	他は回転ナラ	デ。ヘラ記号あり	າ.	A B C D	内外面 暗灰色 砂粒やや含む、密 良好 1/3
43	,	"	"	① (10.0) ⑦ (12.5)	② 4.0	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり		内面 1 / 2 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内面 淡青灰色 外面 淡灰色 砂粒多く含む、密 良好 1/2
44	,	,,	"	① (9.8) ⑦ (12.4)	② 3.7	底部外面回転へラ デ。	削り、	内面 1 / 3 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ		内外面 灰色 砂粒やや含む、やや粗 良好 1/3
45	,	"	"	① (10.4) ⑦ (12.0)	② 3.5	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり	削り、	内面 2 / 3 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内面 淡灰色 外面 灰色 砂粒やや含む、密 良好 1/2
46	,	"	"	①10.2 ⑦12.5	② 3.6	底部外面灰かぶり 他は回転ナデ。	のため	調整不明、内	内面 1 / 2 不定2	方向のナデ、	A B C D	内外面 灰色 砂粒多く含む、密 良好 完形
47		"	"	① (9.8) ⑦ (11.8)	② 3.8	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり	削り、 。	内面 2 / 3 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内面 淡青灰色 外面 淡灰色 砂粒多く含む、やや密 ^{良好}
48		"	"	① (9.7) ⑦ (11.8)	② 4.0	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり	削り、 。	内面 1 / 2 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	1/3 内面 背灰色 外面 淡背灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 1/2
49		"	"	① (9.2) ⑦ (11.6)	② 3.6	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり	削り、 。	内面 2 / 3 7	下定方向のナデ、	他は回転ナ	A B C D	内外面 灰色 砂粒やや含む、密 良好 2/3
50		"	"	① 9.7	② 3.5	底部外面回転へラ 回転ナデ。ヘラ記	切り後 号あり	ナデ、内面な	2/3不定方向。	のナデ、他は	A B C D	内外面 淡黄灰色 砂粒やや含む、粗 やや不良 完形

遺物 番号	器 種	出土地点	法①口径 ②器高 量⑦受部径®最大径	手	法	Ø.	特	徵	Á	考 A 色調 C <u>焼成</u> 内外面 暗灰色	B胎土 D残存
51	杯	灰 原	① (9.6) ② 3.0	底部外面手持ちへ	ラ削り	、他は回転ナデ	•		B C D	細粒わずかに含む、密 良好 小片	
52	"	"	① 9.5	底部外面回転へラ 1/3不定方向の	削り、 ナデ、	口縁部から体部 他は回転ナデ。	にかけてカ	キ目、内面	A B C D	内外面 暗灰色 砂粒やや含む、やや粗 やや不良 小片	
53	"	"	① 9.2 ② 4.9	底部外面カキ目、 部に 3条の沈線が	内面 l 巡る。	/2 不定方向の へラ記号あり。	ナデ、他は	回転ナデ。体	A B C D	内外面 淡青灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 5/6	
54	高杯	"	①(11.4)②12.0 脚端径 (10.6)	杯部内面1/2不 1条の沈線が巡る	定方向 。 脚部	のナデ、他は回 にシボリ 痕あ り	転ナデ。杯 。	体部と脚部に	A B C D	内外面 暗灰色 砂粒やや含む、やや密 やや良好	
55	"	"	① 9.4 ② 9.2 脚端径 (8.5)	杯体部外面回転へ ナデ。杯体部に 2	ラ削り条の沈	、内面 1 / 2 不 線が巡る。	定方向のナ	デ、他は回転	ABCD	1/2 内外面 暗黒灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 2/3	
56	"	"	脚端径 (8.4)	杯体部外面カギ目 号あり。	、内面	不定方向のナデ	、他は回転	ナデ。ヘラ記	A B C D	2 ² /3 内面 淡青灰色 外面 砂粒やや含む、密 良好 2/3	暗黒灰色
57	"	"	① (9.8)	杯体部外面カキ目 杯体部に 2 条の沈	、内面 線が巡	1 / 3 不定方向 る。	のナデ、他	は回転ナデ。	A B C D	内外面 淡灰色 砂粒やや含む、粗 良好 杯部1/3	
58	"	"	脚端径 (9.2)	脚部上位カキ目、 段は貫通していな	他は回い。	転ナデ。脚部3	方向に方形	2段透し。上	ABCD	(X部1/3 内外面 灰色 細粒やや含む、やや密 良好 脚部1/3	
59	"	"	脚端径 9.2	脚部内外面回転ナ	デ。脚	部内面にへラ記	号あり。		ABCA	内外面 暗灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 1/2	
60	"	"	脚端径 9.1	脚部内外面回転ナ	デ。脚	部中位に2条の	沈線が巡る	0	ABCD	内面 淡青灰色 外面 砂粒やや含む、やや密 良好 脚部 2 / 3 内外面 青灰色	淡灰色
61	"	"	脚端径 8.2	脚部内外面回転ナ	ー デ。脚	部中位に2条の	沈線が巡る	•	A B C D	砂粒やや含む、密 良好	
62	"	"	脚端径 (9.4) ⑦12.8	脚部内外面回転ナ	デ、脚	部上位に浅い窪	【みが1段巡	ప .	A B C D	加部残存 内外面 灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 脚部 1 / 2	
63	酿	"	胴部最大径 8.73 残存高 11.3	底部外面回転へラ り、その間に刺突	削り、 文が施	他は回転ナデ。 iされている。へ	胴部に2条 ラ記号あり	の沈線が巡 。	A B C D	脚部 1 / 2 内外面 青灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 2 / 3	
64	"	"	胴部最大径 9.1	底部外面回転へラ その間に刺突文が	削り、f 施され	也は回転ナデ。 たいる。ヘラ記	胴部に 2 条の !号あり。	D沈線が巡り、	A B C D	2 ¹ /3 内面 暗灰色 外面 F 砂粒やや含む、密 良好 1/2	暗黒灰色
65	"	"	① 9.7	残存部内外面回転	ナデ。	口縁部下端に1	条の沈線が	巡る。	A B C D	内外面 灰色 砂粒やや含む、やや密 良好 小片	
66	"	"	①10.0	残存部内外面回転	ナデ。	口縁部下端に 2	条の沈線が	巡る。	A B C D	内外面 灰色 細粒わずかに含む、や 良好 小片	や密
67	椀	"	① (10.1) ② 6.0	底部外面回転へラ デ。口縁部下端に	削り、 1条の	内面 1 / 3 不定 沈線が巡る。 ^	方向のナデ ラ記号あり	、他は回転ナ 。	A B C D	内外面 淡黄灰色 細粒やや含む、粗 不良 1/2	
68	平瓶	"	① 4.4	残存部内外面回転	ナデ。	ヘラ記号あり。			A B C D	内面 狭青灰色 外面 砂粒やや含む、やや密 良好 1 / 4	
69	"	"	① (6.0)	ロ縁端部内外面回 沈線が巡る。	転ナデ	、口縁部下端カ	キ目、口縁	部下に2条の	A B C D	内外面 淡背灰色 細粒わずかに含む、や 良好 小片	や粗
70	"	"	① (5.7)	口縁部内外面回転	ナデ、	口縁部に 2条の	沈線が巡る	•	A B C D	内外面 淡青灰色 砂粒わずかに含む、密 良好 小片	
71	鉾	"	① (9.6) ② 6.3 ⑧11.4	底部外面回転へラ デ。胴部に2段の	削り、	内面 1 / 3 不定 よみが巡る。 へき	方向のナデ 記号あり。	、他は回転ナ	A B C D	内面	暗霄灰色
72	雪	, "	① 7.6	ロ縁部下端から胴 は回転ナデ。	部にか	けてカキ目、胴	帮下端回転	ヘラ削り、他	A B C D	- 内面 暗背灰色 外面 砂粒やや含む、密 良好	淡灰色
73	"	"	① (7.5) ⑧(14.4) 残存高 10.9	口縁部から胴部に 段の浅い窪み、胴	かけて 部に 1	回転ナデ、胴部 条の沈線が巡る	B回転へラ削 か。	り。肩部に1	A B C D		
74	魏	"	① (16.6)	口縁部内外回転ナ	デ、肩]部外面格子目叫]き、内面同	心円文叩き。	A B C D	1/3 内外面 淡青灰色 細粒やや含む、やや密 良好 小片	
75	"	"	① (19.0)	口縁部内外面回転口縁部部外面にへ	ナデ、) ラ記号	同部外面格子目 あり。	叩き、内面同	心円文叩き。	A B C D	内外面 淡青灰色 砂粒やや含む、密 良好 口縁部1/2	

遺物 番号	器種	出土地点	法①口径 ②器高 量⑤高台径⑥高台高	手	法	0	特	徽	備		考 Af	莊成	B胎土 D残存
76	塑	灰 原	① (20.3)	口縁部内外面回転口縁部部外面にへ	ナデ、肩部外 ラ記号あり。	面格子目叩	き、内面同	心円文叩き。	B C D	良好	多く含む、		淡灰色
77	"	"	① (23.0)	口縁部内外面回転	ナデ、肩部外	面格子目叩?	き、内面同	心円文叩き。	C	砂粒白椒	面 暗灰(多く含む、 部 1 / 3	密	_
78	"	"	① (23.0)	口龣部内外面回転	ナデ、肩部外	面格子目叩	き、内面同	心円文叩き。	B C D	砂粒	灰色 ダ やや含む、 部 2 / 3	やや密	灭色
79	"	"	① (22.6)	口級部内外面回転	ナデ、肩部外	-面格子目叩る	き、内面同]心円文叩き。	C	良好口級	面 暗灰(やや含む、 部1/3		
80	"	"	① (40.2)	口縁部外面2条と は回転ナデ。	3条の沈線	間に連続斜線	文が施さ	れている。他	C	良好	面でです。 やや含む、		
81	"	"	① (44.8)	口縁部外面 2 条 ど は回転ナデ。肩部	3条の沈線 外面格子目	間に連続斜線 叩き、円面同	文が施さ 心円文叩	れている。他 lき。	D	良好	灰色 タ 多く含む、	不可一暗"的一个"有"。 "有"	背灰色
82	"	"	① (47.2)	口縁部外面 1 条と は回転ナデ。	2条の沈線	間に連続斜線	文が施さ	れている。他	C	砂粒良小	面 灰色 多く含む、		
83	"	"	① (52.0)	口縁部外面2条ず 他は回転ナデ。	つ、2 段の法	(線間に連続)	科線文がは	施されている。	C	細粒白椒	背灰色 多く含む、 部 1 / 5	やや密	音背灰色
84	杯	土坑墓	① (10.8) ② 3.5	内外面磨滅の為調	整不明。				A B C D	砂粒良工/	2	粗	
85	"	n,	① (12.4) ② 3.5	内外面磨滅の為調	整不明。底	部外面板状圧	痕あり。		A B C D	砂粒良好2	3	粗	
86	椀	"	①11.5 ② 4.3 ⑤ 6.5 ⑥ 0.6	内外面磨滅の為調	整不明。				ΙĒ	内砂粒段は	黒色 ź やや含む、 完形	外面 淡: 粗	黄灰色

小田浦28地点

遺物番号	器	種	出土地点	法 ① 口径	②器高	手	法	Ø.	特	徴	備	~ ~ C	色調焼成	B胎土 D残存
1	杯	蓋	灰 原	① (13.2)	② 4.3	天井部外面回転へ かぶり。	ラ削り、	他は回転ナ	デ。ヘラ記号	おり。外面灰	BCD	内面 - 青灰色 砂粒多く含む 良好 1 / 3	、密	
2	,,,	,	"	①12.9	② 3.0	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号あ	ラ削り、 り。	内面 1 / 3 7	下定方向のナ	デ、他は回転	C	内面 灰色 砂粒やや含む 良好 ほぼ完形		
3	"		" .	① 12.9	② 4.2	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号あ		内面 1 / 2 2	下定方向のナ	デ、他は回転	B C D	内面 淡灰色 砂粒やや含む 良好 ほぼ完形	、密	青灰色
4	"	'	"	①12.7	② 4.1	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号あ		内面 2 / 3 7	下定方向のナ	デ、他は回転	B C D	内外面 灰色 砂粒やや含む やや良好 4/5	· **	
5	"		"	①12.8	② 4.2	天井部外面回転へ ナデ。ヘラ記号あ		内面 2 / 3 7	下定方向のナ	デ、他は回転	B C D	内面 - 青灰色 砂粒やや含む 良好 2/3	, 449	暗灰色 图
6	"		"	①12.8	② 4.7	天井部外面回転へ ナデ。	ラ削り、	内面 1 / 2 7	下定方向のナ	デ、他は回転	B C D	内外面 淡灰 砂粒やや含む やや良好 完形	、やや !	1
7	"		"	①12.8	② 3.5	天井部外面回転へ ナデ。	ラ削り、	内面 1 / 2 7	ド定方向の ォ	デ、他は回転	B C D	内外面 - 背灰 砂粒やや含む 良好 2 / 3	, <i>やや</i> ?	
8	"	'	"	① (12.5)	② 4.6	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号あ		内面 1 / 2 7	下定方向のナ	デ、他は回転	B C D	内外面 灰白 砂粒やや含む やや不良 1/2	, <i>やや</i>	1
9	"		. "	① (12.3)	② 4.8	天井部外面回転へ ナデ。ヘラ記号あ		内面 2 / 3 7	下定方向の ォ	デ、他は回転	B C D	内外面 淡檀 砂粒わずかに やや不良 2 / 3	含む、	やや密
10	"		"	① (12.2)	② 4.1	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号あ		内面 2 / 3 7	 下定方向のナ	デ、他は回転	B C D	内外面 緑灰 砂粒多く含む 良好 1/2	、粗	
11	"		"	①11.3	② 3.3	天井部外面へラ切 転ナデ。	り後ナラ	デ、内面 2 / :	3 不定方向の	ナデ、他は回	B C D	内外面 暗線 砂粒多く含む 良好 完形	、粗	
12	"		"	① (12.0)	② 3.9	天井部外面回転へナデ。	ラ削り、	内面 2 / 3 7	下定方向のナ	デ、他は回転	B	内面 茶灰色 砂粒やや多く 良好 2/3		

遺物 番号	器 種	出土地点	法①口径 ②器高 法③つまみ径④つま 量み高 ⑦受部径	手	法	ø	特	徵	備	考	A色調 C焼成	B胎土 D残存
13	杯蓋	灰 原	① (12.0) ② 3.8	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号あ		内面 1 / 5	不定方向のナ	デ、他は回転	B	内外面 明 ゆ粒わずか ほ好 2 / 3	いに含む、	
14	"	"	① (12.0) ② 3.4	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号あ	・ラ削り、 oり。	内面 1 / 2	不定方向のナ	デ、他は回転	B を C 自 D 1	2/3 内面 灰色 妙粒やや台 夏好 1/3	きひ、や	暗灰色 や密
15	"	"	① (11.6) ② 3.7	天井部外面へラ切 転ナデ。	り後ナラ	デ、内面1/	2 不定方向の	ナデ、他は回	A P B & C B	列面 D 少粒やや多 &好 3 / 4	らく含む、	密
16	. "	"	① (11.5) ② 3.5	天井部外面へラリ 転ナデ。内外面灰		デ、内面 2 /	3 不定方向の)ナデ、他は回	A P B & C B	内外面 W が粒多くを 見好 2/3	さむ、粗	
17	"	"	① (10.6)	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号あ	ラ削り、	内面 1 / 2 5灰かぶり。	不定方向のナ	デ、他は回転	A P B C D	月面 - 背刃 田粒わずか 見好 I ∕ 4	に含む、	密
18	蓋	"	① (15.3) ② 4.9 ③ 3.1 ④ 0.7	天井部外面カキ目	、内面:	2/3不定方	向のナデ。他	は回転ナデ。	C S	内外面 電 出粒わずか Pや良好 2/3		密
19	"	u u	① (14.7)	天井部外面カキ目	、内面:	2/3不定方	向のナデ。他	は回転ナデ。	A P B &	り外面 りかなるくさい かんしゅう かんしょう かんしょう アンター・ファイ アンター・ファイ アンター・ファイ アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・アン・ア		
20	"	"	① (14.5) ② 5.6 ③ 3.3 ④ 0.9	天井部外面カキ目	、内面:	1 / 3 不定方	向のナデ。		C F	内外面 が粒やや多 見好 まば完形		
21	"	. "	①14.5 ② 5.3 ③ 3.3 ④ 0.9	天井部外面カキ目	l、内面	1 / 3 不定方	向のナデ。他	は回転ナデ。	A P	り外面 〒 少粒やや彡 夏好 1 / 5		やや粗
22	"	. "	① (13.9) ② 5.5 ③ 3.2 ④ 0.8	天井部外面カキ目	、内面:	1 / 4 不定方	向のナデ。他	は回転ナデ。	B &	内外面 W が粒わずか 見好 1/2	いに含む、	密
23	″	"	①13.3 ② 4.6	天井部外面カキ目	、他は[回転ナデ。へ	ラ記号あり。		B A	内外面 ゆ粒ややさ Pや良好 3/4	さむ、や	や密
24	"	"	① (13.4) ② 5.5 ③ 3.1 ④ 0.7	天井部外面回転へ ナデ。	・ラ削り、	内面 1 / 2	不定方向のナ	デ、他は回転	B E	内外面 明 少粒やや3 良好 1/2	とく含む、	
25	// (杯苕?)	"	① (12.6) ② 4.4 ③ 3.3 ④ 0.5 ⑧ (14.8)	天井部外面回転へ ナデ。外面灰かる	・ラ削り、 ざり。	内面 1 / 2	不定方向のナ	デ、他は回転	C 3	で マ ク / 3		面 暗灰色 や粗
26	" (杯蓋?)	ıı .	① (11.3) ② 3.4 ③ 2.2 ④ 0.5 ⑧ (13.8)	天井部外面カキ目 他は回転ナデ。外	のあと回	回転ナデ、内 ばり。	面 2 / 3 不定	方向のナデ、	D	内外面 W 地位やや 見好 1/4		
27	"	"	① (9.6) ② 3.1 ⑧ (11.8)	外面灰かぶりのた 回転ナデ。	め調整を	下明、内面 1	/2不定方向]のナデ、他は ·	B A	内面 青灰 ゆ粒ややさ やや良好 1/4	きむ、や・	面 灰色 や粗
28	" (杯蓋?)	"	① (10.0) ⑧ (12.2)	天井部外面カキ目 ヘラ記号あり。	1、内面	1 / 2 不定方	向のナデ、他	は回転ナデ。	B A	内外面 W 砂粒わずた 良好 1 / 2	いに含む、	やや密
29	(杯蓋?)	"	① (7.4) ② 2.5 ③ 1.1 ④ 0.8 ⑧ (9.6)	天井部外面回転へ	・ラ削り、	他は回転ナ	デ。		B G C J	内外面 D ゆ粒やや4 b好 1/2	多く含む、	やや粗
30	"	"	① 2.4 ② 3.0 ③ 1.1 ④ 0.8 ⑧ (6.6)	天井部外面カキ目	l、他は[回転ナデ。			B A C I D	内外面 D 地粒やや4 見好 1 / 2	多く含む 。 	
31	蓋	"	① (12.4) ② 3.0	天井部外面回転へ ナデ。へラ記号を		内面 1 / 3	不定方向のナ	デ、他は回転	B #	内面 灰色 田粒わずた 良好 1 / 2	いに含む、	、やや密
32	"	"	① (9.2) ② 3.5	天井部外面へラリ 転ナデ。ヘラ記号		デ、内面 1 /	′2 不定方向の)ナデ、他は回	D	内外面 を かねややで シ好 2/3		や粗
33	杯身	"	①12.7 ② 4.3 ⑦14.8	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり		内面 1 / 2 不	定方向のナテ	、他は回転ナ	B	内外面 を 部粒やや 下良 3/4	さむ、や	
34	"	"	① (12.0) ② 3.9 ⑦ (14.4)	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり	が削り、F P。	内面 1 / 5 オ	定方向のナテ	、他は回転ナ		3/4 内外面 B 砂粒ややで シ好 1/2		
35	"		① (11.7) ② 3.7 ⑦ (14.2)	底部外面回転へラ 定方向のナデ、他	削りの記	あと不定方向 ナデ。]のヘラナデ、	内面2/3不	15 1	X/2 内外面 D か粒やや 良好 1/2		
36	"	"	①10.8 ② 4.1 ⑦14.0	底部外面回転へラ デ。ヘラ記号あり	i削り、i)。	内面 4 / 5 オ	定方向のナテ	、他は回転ナ	A F B A C A	内外面 砂粒やや1 やや不良 まば完形	くすんだ! 含む、や 	東 灰色 や密

遺物 番号	器 種	出土地点	法①口径 ②器高 量3つまみ径④つま 量み高 ⑦受部径	手 法	Ø	特	徵	備	A色調 考 C焼成	B胎土 D残存
37	杯身	灰 原	① (11.5) ② 3.5 ⑦ (14.0)	底部外面回転へラ削り、 デ。ヘラ記号あり。	内面5/6不定	方向のナデ、	他は回転ナ	C ***	l	
38	"	"	① (11.3) ② 3.4 ⑦ (13.6)	底部外面回転へラ削り、 デ。	内面1/2不定	方向のナデ、	他は回転ナ	C 良好	前 背灰色 oずかに含む、密	1
39	"	"	①11.1 ② 4.2 ⑦ (13.5)	底部外面回転へラ削り、	他は回転ナデ。			U やや/	き形	
40	"	"	① (11.4) ② 4.1 ⑦ (13.3)	底部外面回転へラ削り、 デ。	内面 2 / 3 不定	方向のナデ、	他は回転ナ	A 内外面 B 細粒・ C やや7 D 1/3	面 淡黄灰色 Pや多く含む、密 F良	5
41	"	"	①10.4 ② 3.4 ⑦13.2	底部外面へラ切り後ナラ ナデ。	デ、内面1/2不	定方向のナラ	デ、他は回転	B 砂粒料	暗灰色 外面 Pや多く含む、客 S形	青灰色
42	"	"	① (10.9) ② 3.6 ⑦ (13.1)	底部外面回転へラ削り、 デ。ヘラ記号あり。	内面 1 / 2 不定	方向のナデ、	他は回転ナ	C 良好 D 1/2	記形 町 灰色 P や含む、密 2	
43	"	"	①10.7 ② 3.5 ⑦12.6	底部外面回転へラ削り、 デ。ヘラ記号あり。	内面 2 / 3 不定	方向のナデ、	他は回転ナ	B 砂粒* C 良好 D 3/4	面 暗霄灰色 やや含む、密 1	
44	"	"	①10.4 ② 3.8 ⑦12.6	外面灰かぶりのため調査 回転ナデ。	整不明、内面 1 /	4 不定方向の	Dナデ、他は	A 内面 B 砂粒 C 良好	っずかに含む、キ 2	
45	"	. "	① (10.4) ② 3.1 ⑦ (12.2)	底部外面ヘラ切り後ナ: ナデ。内外面灰かぶり。	デ、内面 1 / 2 不	定方向のナラ	デ、他は回転	C 良好.	灰色 外面 黒 多く含む、やや額 3	
46	"	"	①10.0 ② 3.4 ⑦12.2	底部外面へラ切り後ナデ ナデ。	デ、内面 1 / 2 不	定方向のナラ	デ、他は回転	C 良好 D 1/2		I
47	"	"	① (9.9) ② 3.5 ⑦ (12.0)	底部外面へラ切り後ナ: ナデ。ヘラ記号あり。	デ、内面 1 / 2 不	定方向のナラ	デ、他は回転	B 砂粒名 C 良好	面 緑灰色 多く含む、やや料 4	
48	"	"	① (9.8) ② 2.7 ⑦ (12.1)	底部外面回転へラ削り、	. 他は回転ナデ。	ヘラ記号あり	Ď.	C 良好 D 1/3	前 緑灰色 多く含む、やや和 3	
49	"	"	① (9.5) ② 3.5 ⑦11.6	底部外面回転へラ削り、 デ。外面灰かぶり。へ	,内面1/2不定 ラ記号あり。	方向のナデ、	他は回転ナ	B 砂粒4 C 良好 D 2/		灰色
50	"	"	① (9.5) ② 3.3 ⑦ (11.5)	底部外面回転へラ削りの 不定方向のナデ。	のあと、不定方向	のヘラナデ、	内面 1 / 2	B 砂粒 C 良好 D 1/1	面 灰色 bずかに含む、Y 3	7
51	. #	"	① (9.1) ② 3.3 ⑦ (11.4)	底部外面回転へラ削り、 デ。ヘラ記号あり。	,内面1/2不定	方向のナデ、	他は回転ナ	B 砂粒 ³	面 暗灰色 やや含む、やや留 3	
52	麹	"	①14.2	体部下位回転へラ削り、	、他は回転ナデ。(体部に2条の	沈線が巡る。	C ***!	3	
53	"	"	① (11.8) ② 7.7	底部外面手持ちヘラ削 ナデ。体部に1条と25	り、内面 1 / 2 不 条の 2 段の沈線が	定方向のナラ 巡る。	デ、他は回転	C 良好	面 暗灰色 hずかに含む、智 3	5
54	"	"	① (11.2) ② 6.0	底部外面回転へラ削り、 体部に 2 条の沈線が巡	、口縁部から体部 る。底部外面へラ	カキ目、内i 記号あり。	面回転ナデ。	B 砂粒* C やや! D 1/	2	A
55	"	"	① (11.2) ② 7.9	底部外面回転へラ削り、 デ。ヘラ記号あり。	、内面 1 / 2 不定	方向のナデ、	他は回転ナ	B 砂粒油	所 緑灰色 bずかに含む、智 2	
56	"	"	① (11.1) ② 6.1	底部外面回転へラ削り、 デ。	、内面 1 / 4 不定	方向のナデ、	他は回転ナ	IC BH	2 面 淡黄灰色 わずかに含む、* 3	
57	"	"	① (9.2) ② 3.3	底部外面へラ切り後ナーナデ。ヘラ記号あり。	デ、内面1/2不	定方向のナ	デ、他は回転	D 2	3 新 緑灰色 やや含む、やや* 良好 3 **FRA A A	
58	"	"	① (8.8) ② 4.5	底部外面回転へラ削り、 記号あり。	、他は回転ナデ。	体部に2条2	が巡る。ヘラ	C 良好	多く含む、粗 2	暗灰色
59	杯身	"	① (10.5) ② 4.7	底部外面回転へラ削り、	、他は回転ナデ。			C 良好 D 2/	面 淡背灰色 やや含む、やや8 3	8
60	"	"	① (9.7)	底部外面回転へラ削り。 デ。	、内面 1 / 2 不定	三方向のナデ。	他は回転ナ	A 内外 B 砂粒 C 良好 D 1/	面 淡背灰色 わずかに含む、2 4	ž

遺物 番号	器	種	出土地点	法①口径 ②器高 量②受部径	手 法 の 特 後	
61	杯	身	灰 原	① 8.8 ② 5.2	杯体部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。体部に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
62	髙	杯	"	① (13.0) ⑦ (15.2)	底部外面回転へラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 淡緑灰色 B 砂粒多く含む、やや相 C 良好 D 1/4
63	,	,	. "	① (11.9) ②17.5 ⑦ (14.3) 脚端径 13.2	杯部内面 1 / 2 不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。脚部中位に浅い 2 条の沈線が巡る。	D 1 4 A 内外面 淡青灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 1 / 2
64	,	,	"	① (11.7) ⑦ (14.8) 残存高 14.4	杯体部外面灰かぶりのため調整不明、内面 1 / 2 不定方向のナデ、脚部内外面回転ナデ。脚部中位に 3 条の沈線が巡る。	A 内外面 暗灰色 B 和粒やや含む、密 C 良好 D 2/3
65	髙	杯	灰 原	① (11.4) ⑦ (13.5)	杯体部外面回転へラ削り、内面中央不定方向のナデ、他は回転ナ デ。 へラ記号あり。	A 内面 茶場色 外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 2/3 A 内外面 降灰色
66		,	"	①(11.7) ②14.3 脚端径 10.5	杯体部外面回転へラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。 杯部に2条、脚部上位と下位に1条、中位に2条の沈線が巡る。	日本相似やや含む、俗
67	,	,	"	①13.5	杯体部下位回転へラ削りの後回転ナデ、他は回転ナデ、体部に 2 条の沈線が巡る。	A 内外面 橙色 B 細粒わずかに含む、やや密 C 不良 D 杯部4/5
68		,	"	① (11.3)	杯体部外面灰かぶりのため調整不明、内面 1 / 3 不定方向のナデ、他は回転ナデ。杯体部に刺突文を施す。脚部 3 方向方形の透かしあり。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C 良力 1/2
69		,	"	①(9.8)②12.2 脚端径 9.5	杯体部外面回転へラ削り、内面1/2 不定方向のナデ、他は回転 ナデ。杯部に4条、脚部に2条の沈線が巡る。脚部にシボリ痕あ り。へラ記号あり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや良好 D 2/3
70		,	"	① (9.0) 残存高 10.9	杯部内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。杯部に4条、脚部に2条の抗線が巡る。脚部内面にヘラ記号あり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 2/3 A 内面 暗灰色 外面 暗青灰色
71		"	"	① (9.9)	杯体部外面カキ目、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	B 砂粒やや含む、密 C 良好
72		"	"	① (11.9)	杯体部外面カキ目、内面不定方向のナデ、体部に 2 条の沈線が巡る。杯部内外面一部灰かぶり。	A 内外面 淡茶灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 杯部 / 2
73		"	"	脚端径 (7.9)	杯体部外面回転へラ削り、内面 1 / 2 不定方向のナデ、他は回転 ナデ。脚部内面へラ記号あり。	A 内外面 暗緑灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/2
74		"	"	脚端径 (9.4)	杯体部外面回転へラ削り、内面 1 / 2 不定方向のナデ、他は回転 ナデ。杯部内外面一部灰かぶり。	A 内面 灰色 外面 暗黒灰色 B 細粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
75		"	"	脚端径(12.5)	脚部内外面回転ナデ。脚部中位に投い2条の沈線が巡る。	A 内面 暗背灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
76		"	"	脚端径 12.8	脚部内外面回転ナデ。脚部中位に浅い2条の沈線が巡る。	A 内外面 黄灰色 B 砂粒カデかに含む、やや粗 C やや不良 D 脚部のみ残存
77		"	"	脚端径 (11.0)	脚部内外面回転ナデ。脚部中位に浅い2条の沈線が巡る。シボリ 真あり。	A 内面
78		"	"	脚端径 9.3	脚部内外面回転ナデ。脚部上位に2条、下位に1条の沈線が巡る。	B
79		"	"	脚端径 9.6	脚部外面上位から中位にかけてカキ目、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 脚部残存
80		"	"	脚端径 11.9	脚部内外面回転ナデ。脚部下位に1条沈線が巡る。2方向の方形 透かしあり。	D 脚部残存 A 内外面 背灰色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C 良好 D 脚部小片
81		,,	"	脚端径 9.9	脚部内外面回転ナデ。杯部内面ナデ。	D 胸部小片 A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D 脚部1/2
82		"	"	脚端径 (12.0)	脚部内外面回転ナデ。杯部内面不定方向のナデ。	D 関部 / 2 A 内面 暗灰色 外面 灰色 B 細粒わすかに含む、やや密 C 良好 D 1 / 3 A 5 / 4 5 /
83	器	台?	"	脚端径(14.8)	脚部内外面回転ナデ、脚裾部に浅い縦みが巡る。	D 1/3 A 内外面 淡褐色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 脚部 3/4
84	Ā	鬼	"	① (11.3) ②14.4 胴部最大径 8.5	ロ縁部から胴部上位回転ナデ、胴部下位から底部回転へラ削り。 胴部 2 条の沈線間に刺突文を施す。へラ記号あり。	D 脚部3/4 A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 3/4

遺物 番号	器種	出土地点	法 ①口径 ②器高 最 ⑧最大径	手	法	Ø.	特	徵 .	備	考 A色調 C焼成	B胎土 D残存
85	酿	灰 原	胴部最大径 9.5	口縁部から胴部。 胴部に2条の沈線		、胴部下位	たから底部回転		C 良好	′3	E
86	"	"	胴部最大径 8.8	胴部上位回転ナラ 沈線間に刺突文を		から底部回	転へラ削り、	胴部2条の	B 砂粒 C 良好	面 暗灰色 やや含む、密 のみ残存 面 灰灰白色	
87	壺	"	① 4.8 ② 3.8 ⑧ 5.5	底部外面回転へ:	ラ削り、他は	回転ナデ。			B 砂粒C 不良	とやや含む、やや質	ř
88	"	"	8 8.5	残存部外面磨滅。	の為調整不明	」、内面回 板	云ナデ。		B 砂粒 C 良好	完形 面 淡背灰色 やや含む、ややP	Pr
89	長頸壺	"	①10.4 ⑧17.3	ロ縁部内外面回収 位回転ナデ、胴部 リ痕あり。	転ナデ、胴部 部2条の沈線	上位回転け 間にヘラ描	ーデ、一部カキ まき文を施す。	·目、胴部下 類部にシボ	B MON	3小片 面 淡青灰色 2やや含む、密 4 面 淡灰色	
90	台付短 類 壺	"	① (6.0) ②12.7 胴部最大径 (10.3) 脚端径 (8.2)	胴部下位回転へ に2条の沈線が	ラ削り、内面 巛る。	i中央当て具	↓痕、他は回 板		日 良好	(ዯዯ ጜሇ、፞፞፞፞ጜ ′3	
91	把手付 ত	"	胴部最大径(13.4)	胴部内外面回転	ナデ。2条の	沈線が巡る	る。把手部へラ		C 良好 D 胴部	3小片	
92	すり鉢	"	底径 8.2	底部外面回転へ	ラ削り、他は	は回転ナデ。	底部中央に第	孔あり。	A 内間という	ī 背灰色 外面 Ź多く含む、ややキ └ ^ 3	1
93	平瓶	"	① 6.0	口縁部内外面回	転ナデ。				C BH	面 暗灰色 2多く含む、ややを そ 部のみ残存	
94	長頸壺	"	① (7.8)	口縁部内外面回	転ナデ。口縁	 k部下に 2 <i>条</i>	kの浅い沈線が	3巡る。	C 良好 D 口稿	於部残存	
95	雄(?)	"	① (12.5)	底部外面回転へ デ。体部に2つの	ラ削り、内面 の段を有する	i 1 ∕ 2 不定 >。	営方向のナデ、	他は回転ナ	C 良好	′ ງ	
96	高台校的	"	⑤ 8.2 ② 1.3	底部外面へラ切 面磨滅のため調	り後ナデ、体 整不明。 	*部下位カキ	F 目、高台部回	転ナデ、内	C 不良 D 店舗	R 段 在	
97	"	"	⑤ 9.2	残存部外面回転	ナデ、内面不	定方向のナ	+デ 。		D 小片		
98	鉢 (?)	"	①15.2	底部外面回転へ	ラ削り、内面	1/4不定方	向のナデ、他は		C やキ D 1/	i 紫灰色 外面 iわずかに含む、i c g y 3	灰色 答
99	蓋	"	① (10.2) ⑧ (16.1)	残存部内外面回	転ナデ。				Bを砂料	6	
100	m	"	① (20.8) ② 3.6	底部外面粗いナ: ヘラ記号あり。	デ、内面不定	方向のナテ	デ、他は回転ナ	-デ。	C 88	面 暗茶灰色 2やや含む、やや 2 2 4	舒
101	缆	"	①13.5 ②19.8 ⑧22.9	ロ縁部から肩部が 内面同心円文叩	外面回転ナデき。口縁部外	、胴部中位 ト面に叩きれ	から底部外面	格子目叩き、	B 砂粒 C やや D ほほ	面 黄灰色 Zやや含む、密 P不良 5元形	
102	壺	"	⑧ (16.9) 残存高 12.0	胴部外面中位か 他は回転ナデ。	ら底部回転へ 胴部下位にへ	、ラ削り、内 、ラ記号あり	面 1 / 3 不定)。	方向のナデ、	C 良妇	∕ २	
103	,,	"	®17.2 残存高 13.0	胴部外面中位か	ら底部回転へ	ヽラ削り、化	也は回転ナデ。		B 和粒C 良好	面 暗青灰色 なやや含む、やや f 2	
104	甕	"	① 11.3	口縁部内外面回	転ナデ。					2 面 淡黄褐色 2多く含む、やや 4 な部のみ残存	
105	. "	"	① (12.0)	口縁部内外面回	転ナデ。					を部のみ残存 面 淡黄灰色 ロやや含む、やや マ不良 最部小片	
106	"	"	① (11.5)	口縁部内外面回	転ナデ、肩部	外面格子目	叩き、内面同心	ン円文叩き。	A 内面 P 内面 P 中代 D	を部分に 一般の 一般の では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	外面 灰色 やや密 けて1/3
107	"	"	① (16.6)	口縁部内外面回	転ナデ。				() RJP	-	
108	"	"	① (18.4)	口縁部内外面回	転ナデ、肩部	8外面平行口	リき。		A 内外 B 砂粒 C 良好	新2/3 簡	

遺物 番号	器種	出土地	点	法 ①口径	②器高	手	法	Ø	特	徵	備	考 A色調 C焼成	D残存
109	舞	灰	京	① (20.3)		口縁部内外面回	転ナデ、肩部	外面叩き後	(カキ目、内面)	司心円文叩き。	C 良好 D 口縁	!やや含む、や : :部から胴部に	灰色 や粗 かけて1 <u>/</u> 6
110	"	"		① (23.0)		口縁部内外面回	転ナデ。				B 砂粒 C やや D 口縁	面 灰色 わずかに含む 良好 部小片	
111	"	"		① (34.3)		口縁部内面回転 下に2条の沈線	ナデ、外面カ が巡る。 肩音	キ目のある 部外面平行	と連続斜線文 叩き、内面同	が施され、その 引心円文叩き。 	B 砂粒 C 良好	部から層部に	
112	"	"		① (43.3)		口縁部内回転ナ の下に2条の沈	デ、外面連絡 線が巡る。	統斜線文が	施され、その)上に1条、そ	B 砂粒 C 良好 D 口縁	部小片	や粗
113	"	"		①(20.6) 胴部最大径	(28.5)	口縁部内外面ョ	コナデ、胴質	部内面へラ	削り、外面ハ	ケ目。	B 砂粒 C やキ D 口縁	面 赤褐色 2多く含む 不良 部から胴部に	かけて小片
114	"	"		① (20.0)		口縁部内外面ョ 部黒斑あり。	コナデ、胴部	部内面へラ	削り、外面パ	、ケ目。外面一	B 砂粒C 良好	部から胴部に	かけて小片
115	荽	"		① (11.0) 胴部最大径	(11.7)	口縁部内面から	外面にかけ	てヘラミガ	キ、胴部内面	īヘラ削り。 	B 砂粒 C 良好 D 1/	′3	
116	"	"				底部内面ナデ、	外面ハケ目、	底部ハケ	目のあとナテ	÷.		i 茶灰色 外 はやや含む P良好 、3	面明橙色

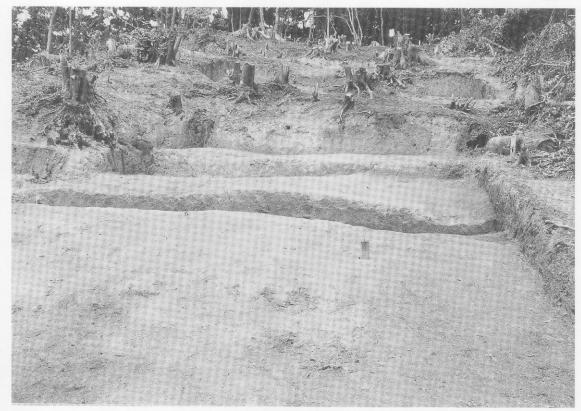
図 版



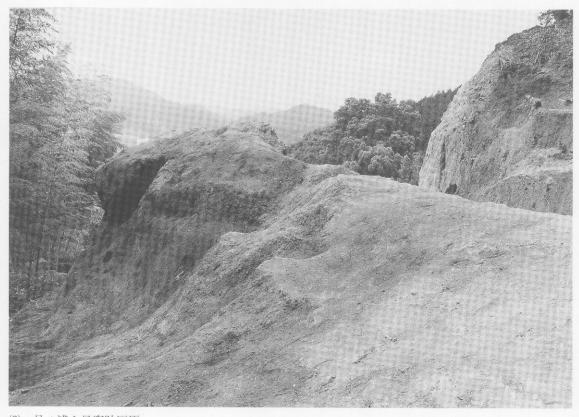
(1) 月ノ浦 I 号窯跡調査前



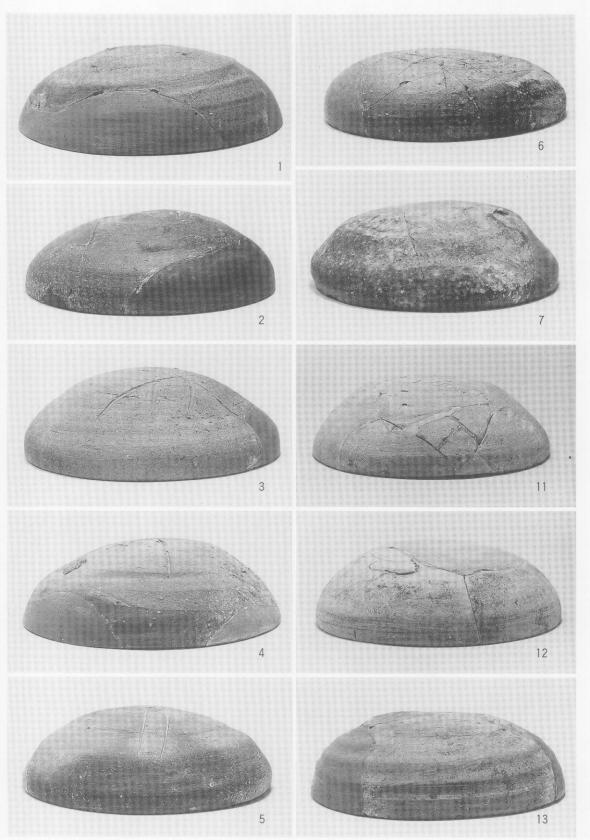
(2) 月ノ浦 I 号窯跡調査前



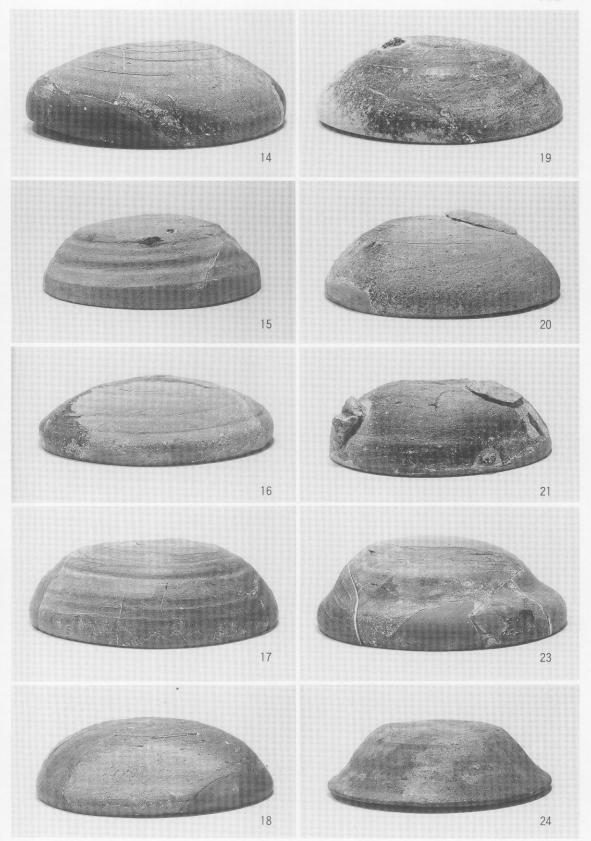
(1) 月ノ浦 I 号窯跡調査後



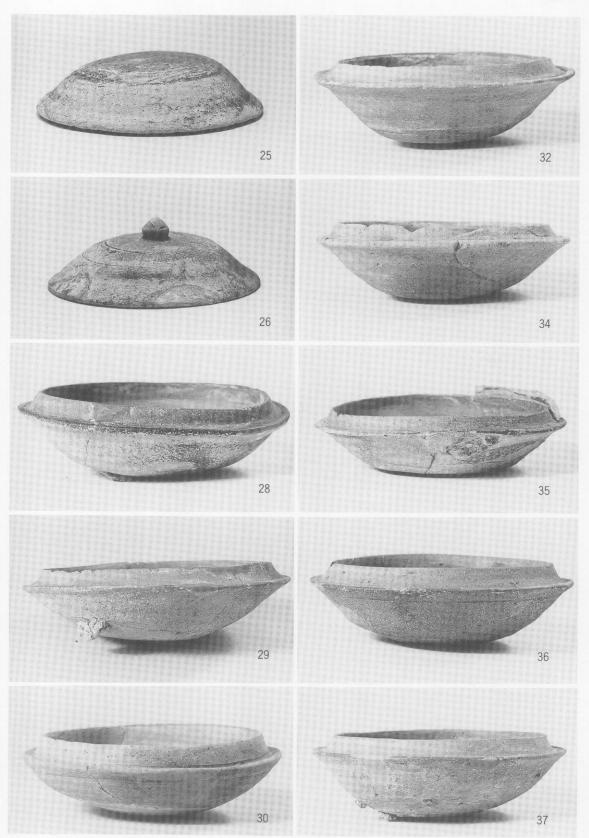
(2) 月ノ浦 I 号窯跡灰原



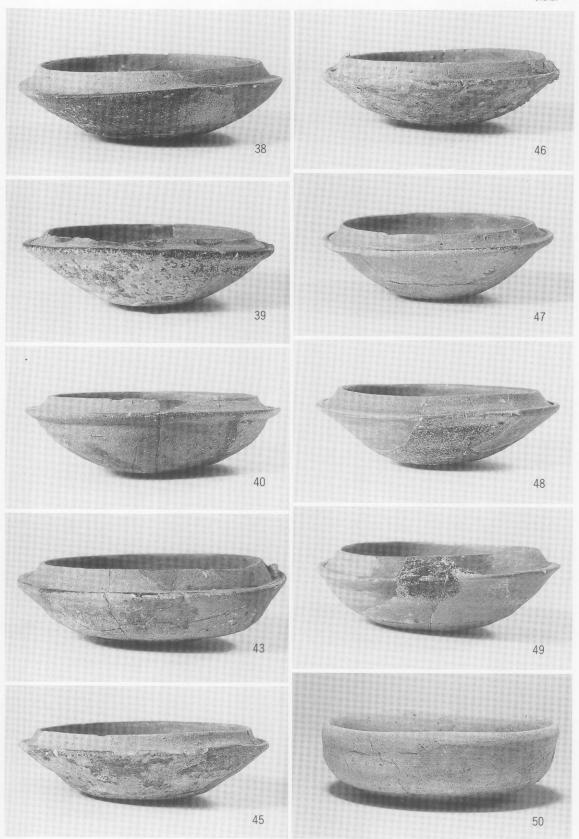
月ノ浦 I 号窯跡出土須恵器



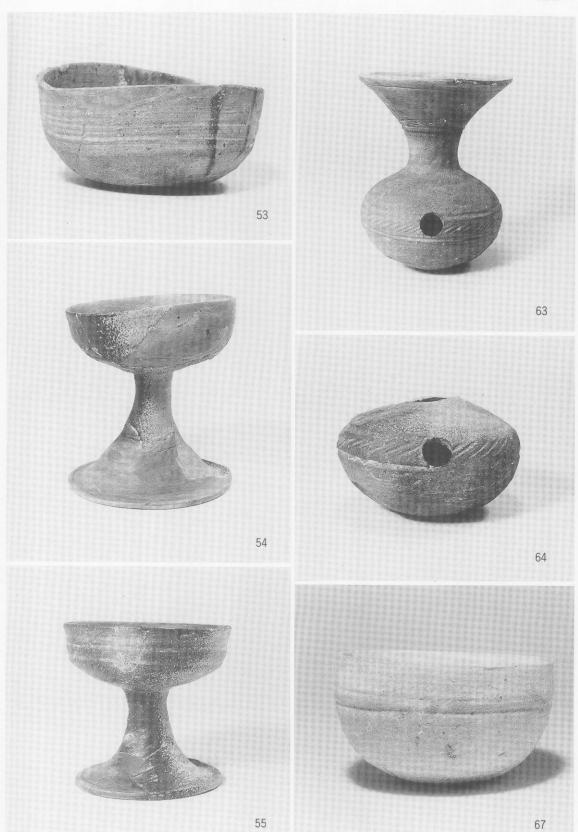
月ノ浦Ⅰ号窯跡出土須恵器



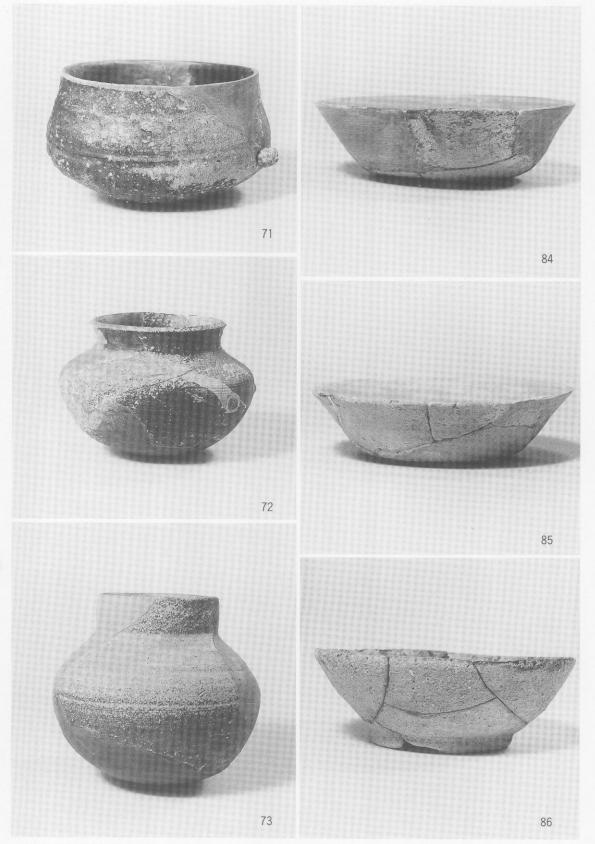
月ノ浦Ⅰ号窯跡出土須恵器



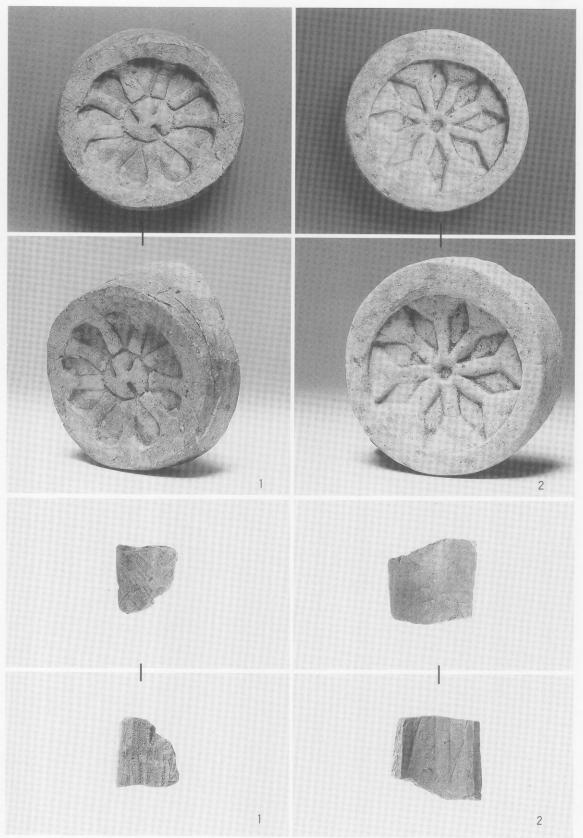
月ノ浦 [号窯跡出土須恵器



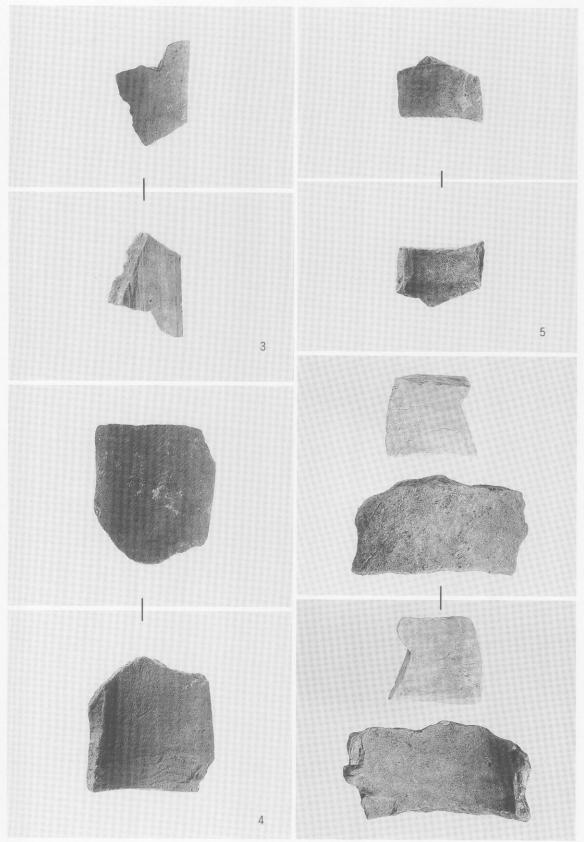
月ノ浦 [号窯跡出土須恵器



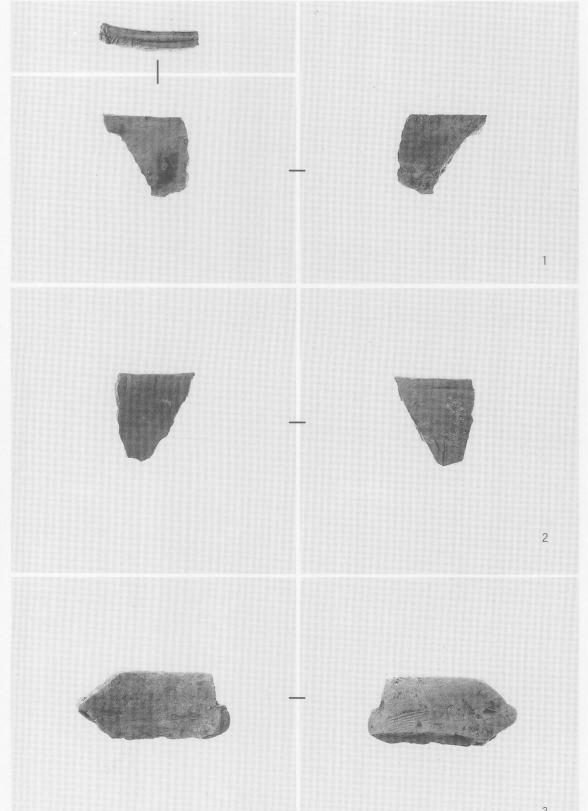
月ノ浦Ⅰ号窯跡出土須恵器・土坑墓出土土師器

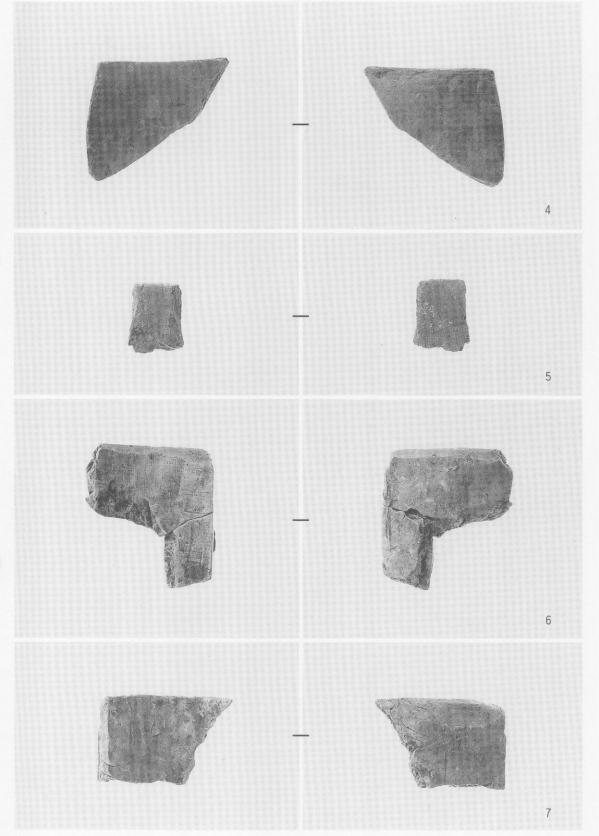


月ノ浦Ⅰ号窯跡出土瓦

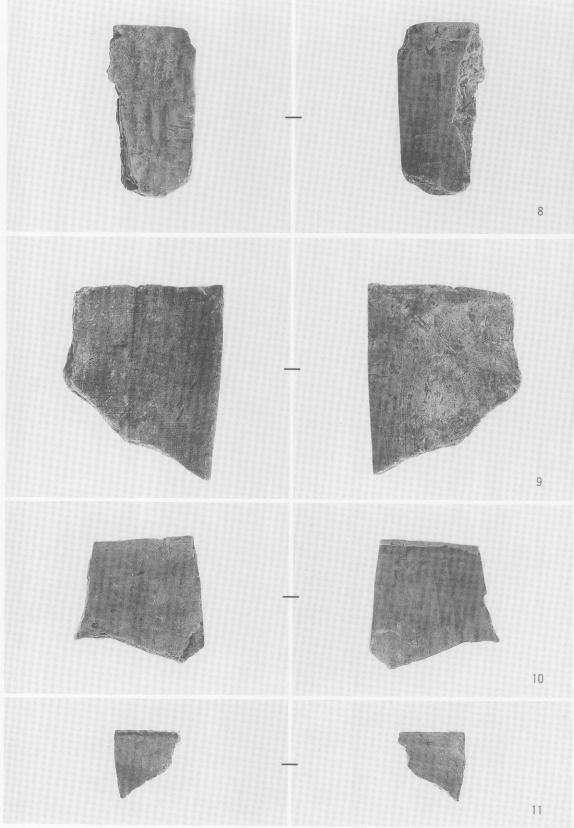


月ノ浦 I 号窯跡出土瓦

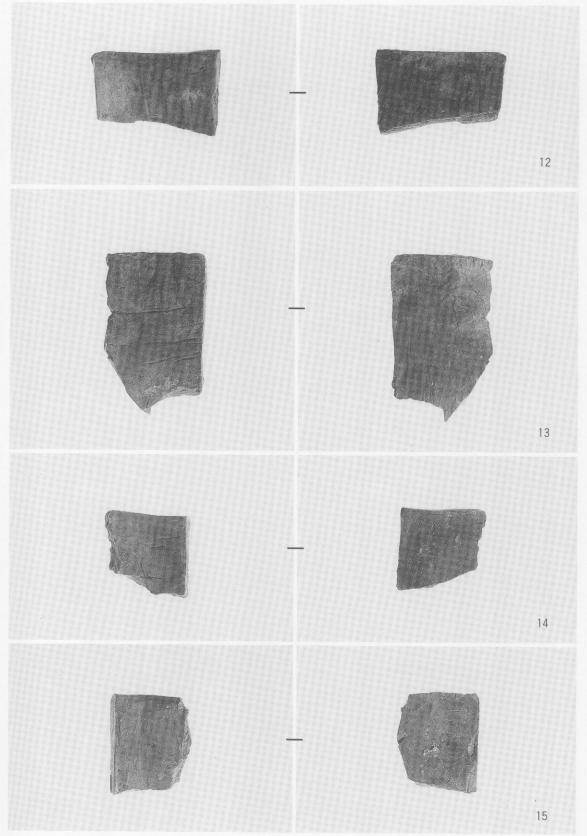




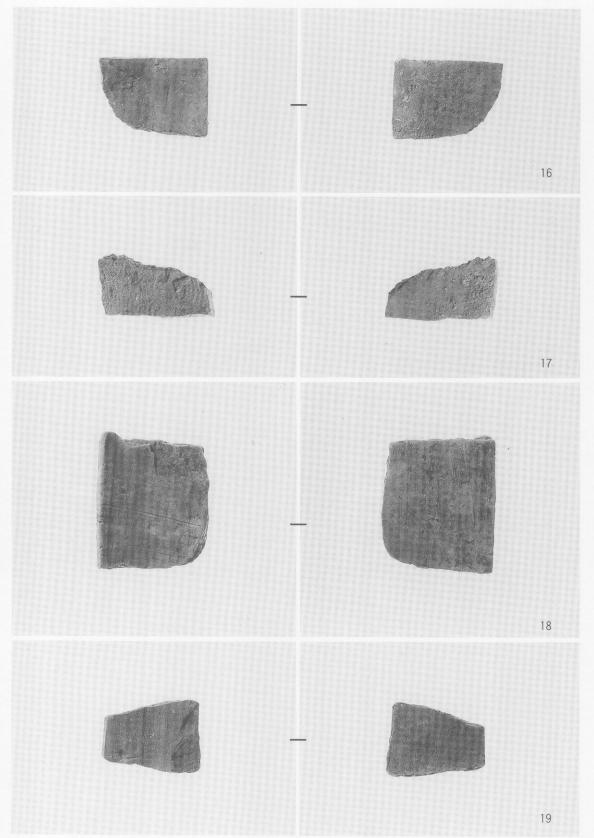
月ノ浦Ⅰ号窯跡出土瓦

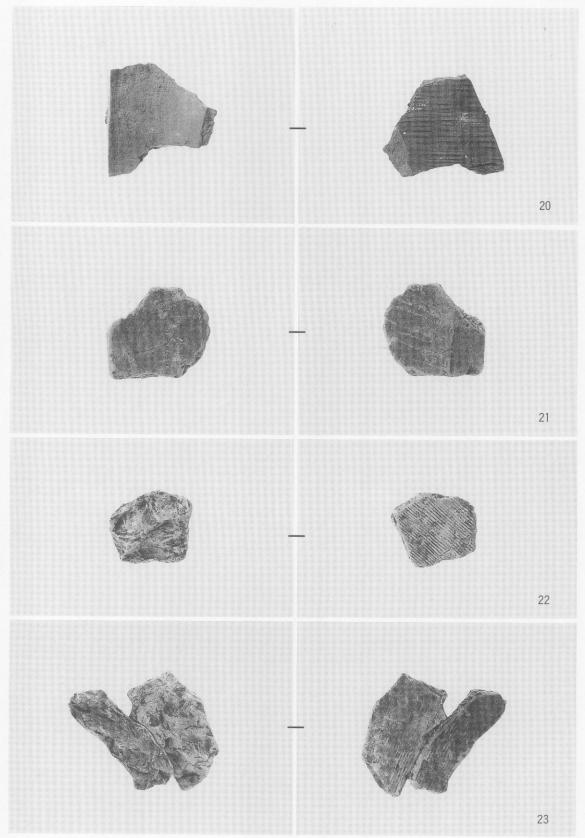


月ノ浦Ⅰ号窯跡出土瓦

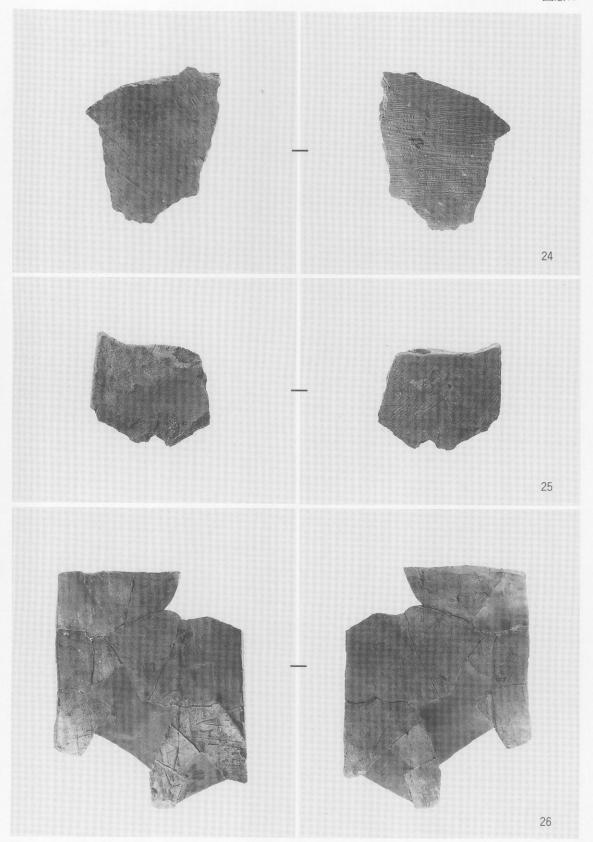


月ノ浦 I 号窯跡出土瓦

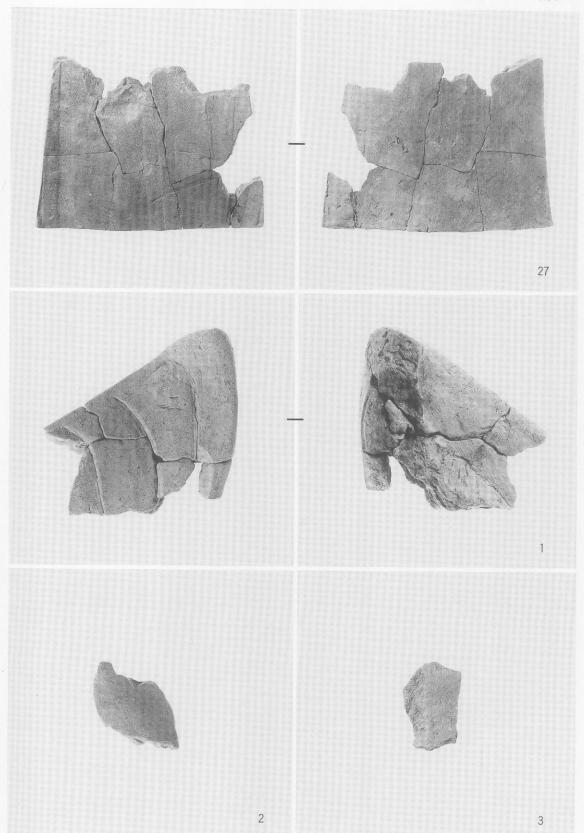


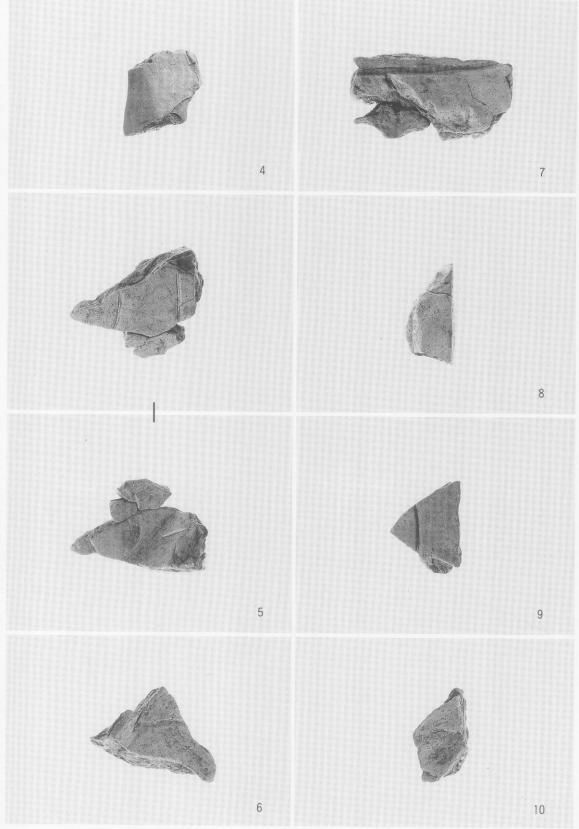


月ノ浦Ⅰ号窯跡出土瓦

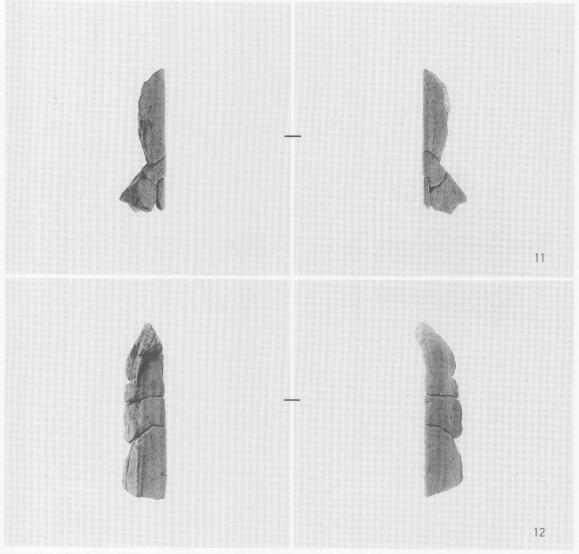


月ノ浦Ⅰ号窯跡出土瓦





月ノ浦Ⅰ号窯跡出土瓦・鴟尾



月ノ浦Ⅰ号窯跡出土鴟尾



(1) 小田浦28地点

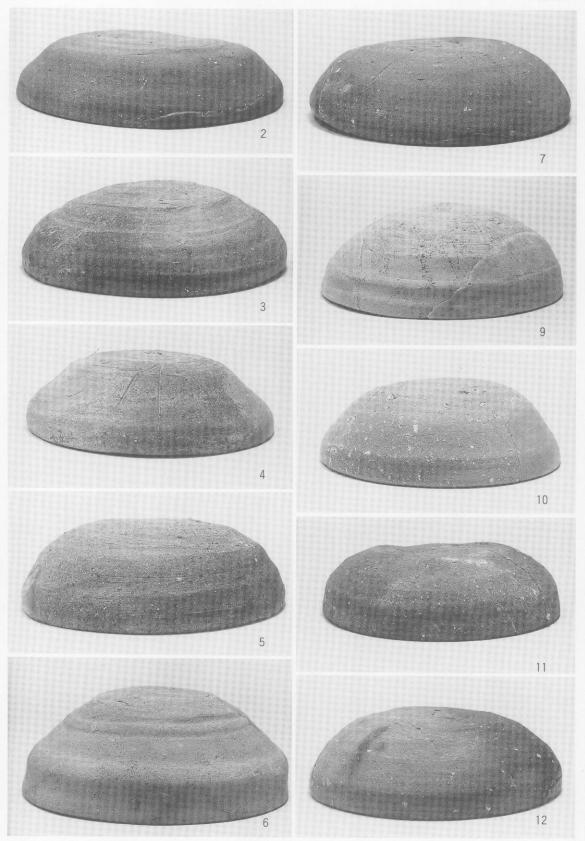




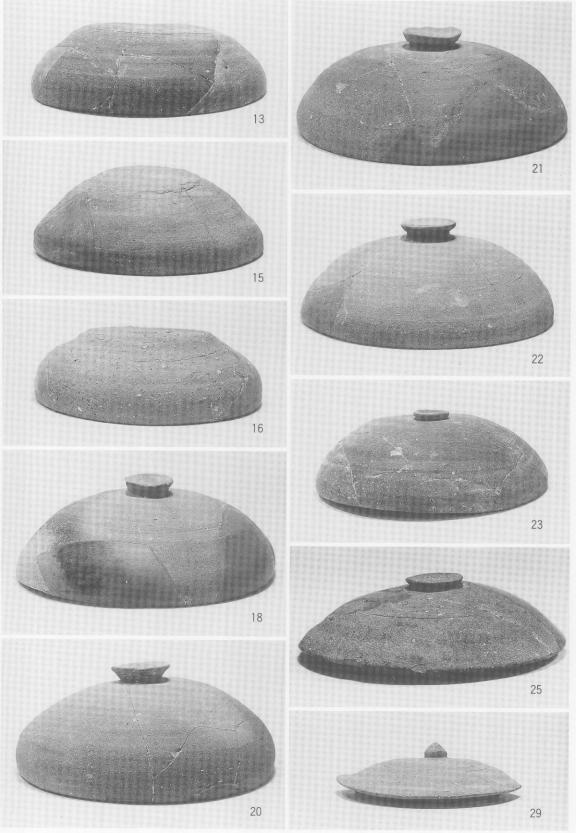
(1) 小田浦28地点灰原堆積状況



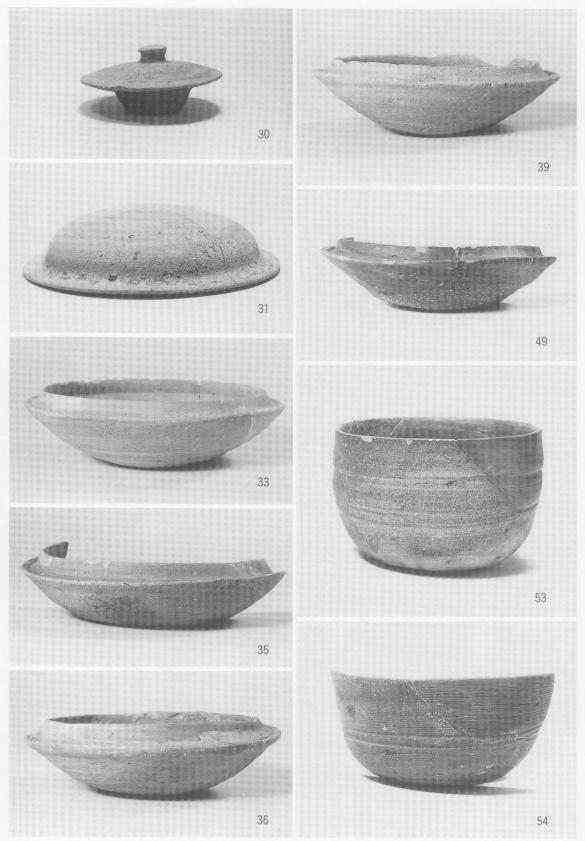
(2) 小田浦28地点灰原堆積状況



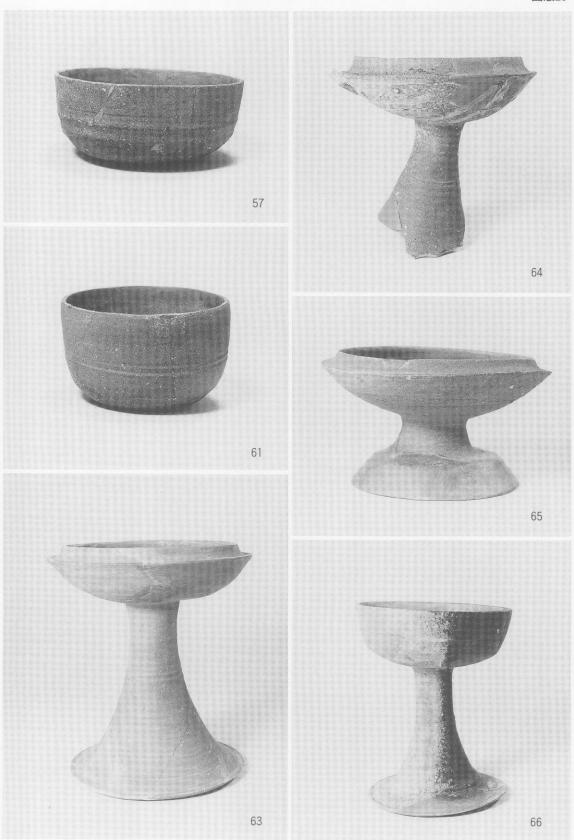
小田浦28地点出土須恵器

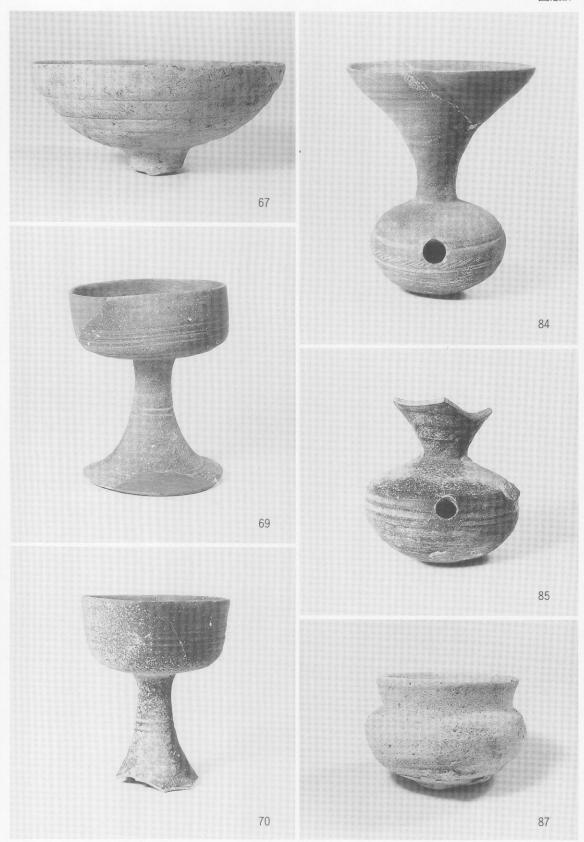


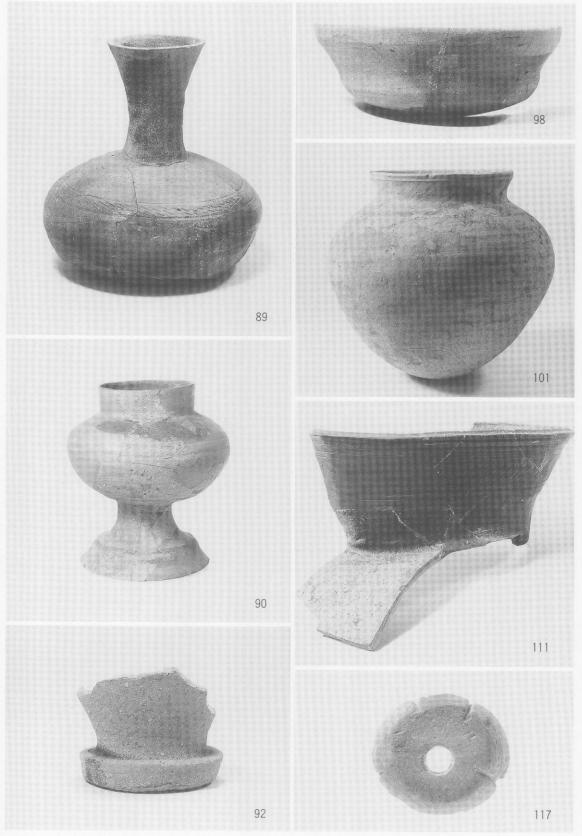
小田浦28地点出土須恵器



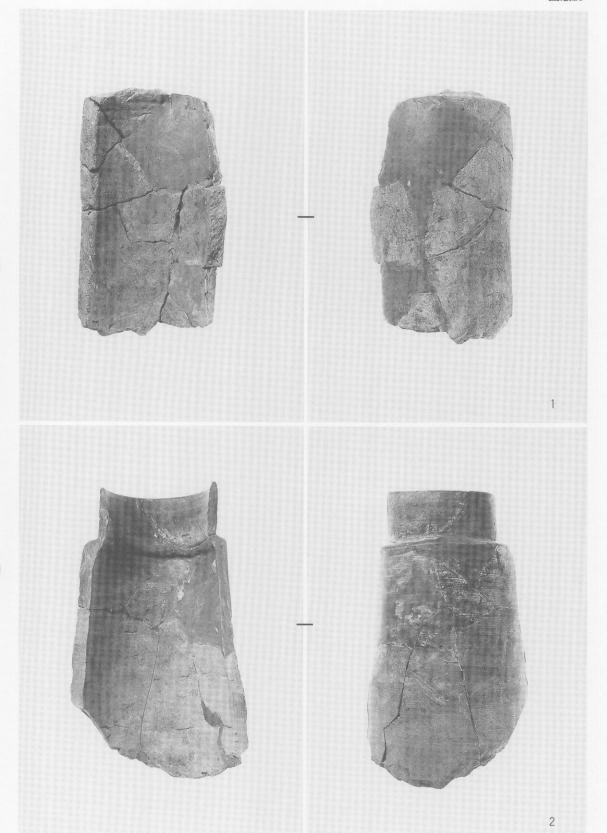
小田浦28地点出土須恵器

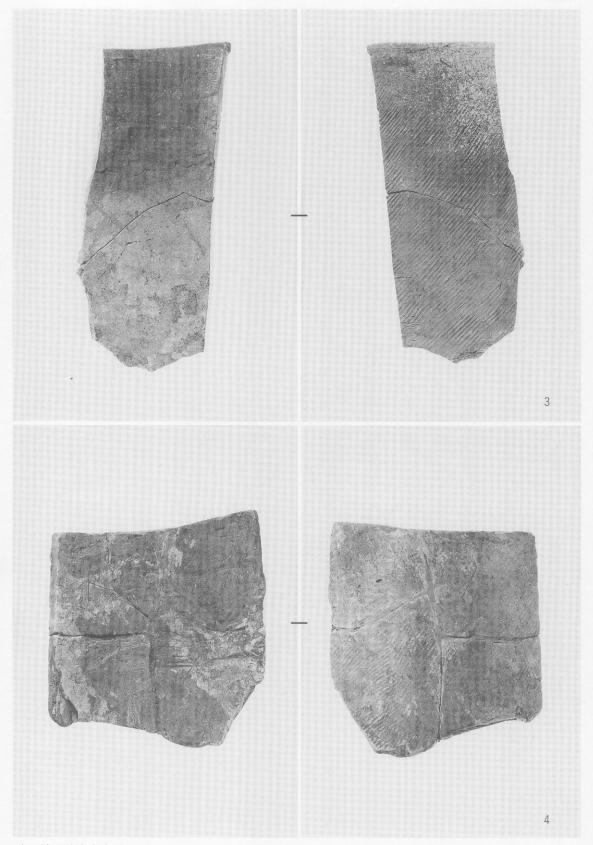




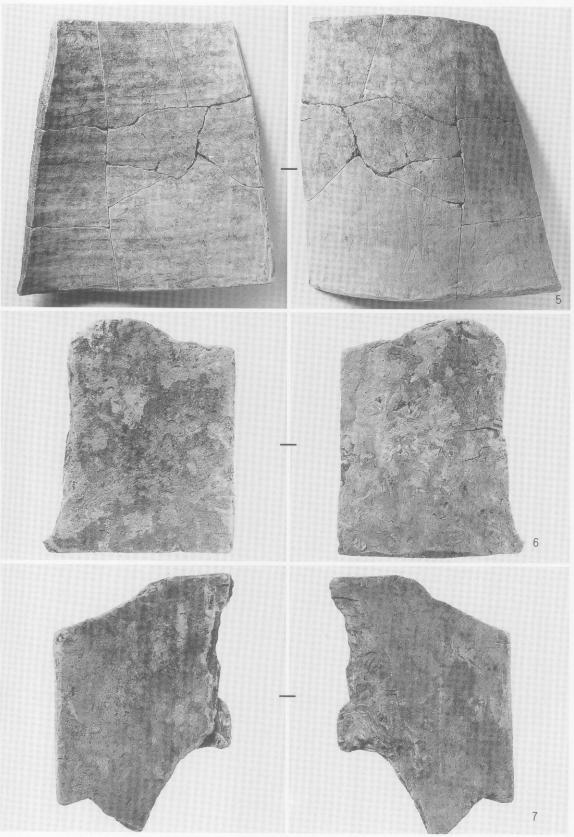


小田浦28地点出土須恵器・石製品

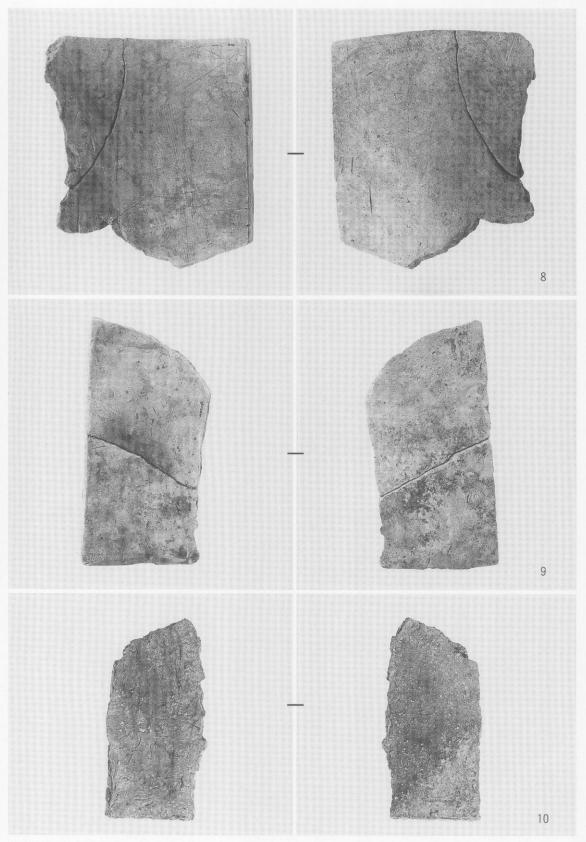




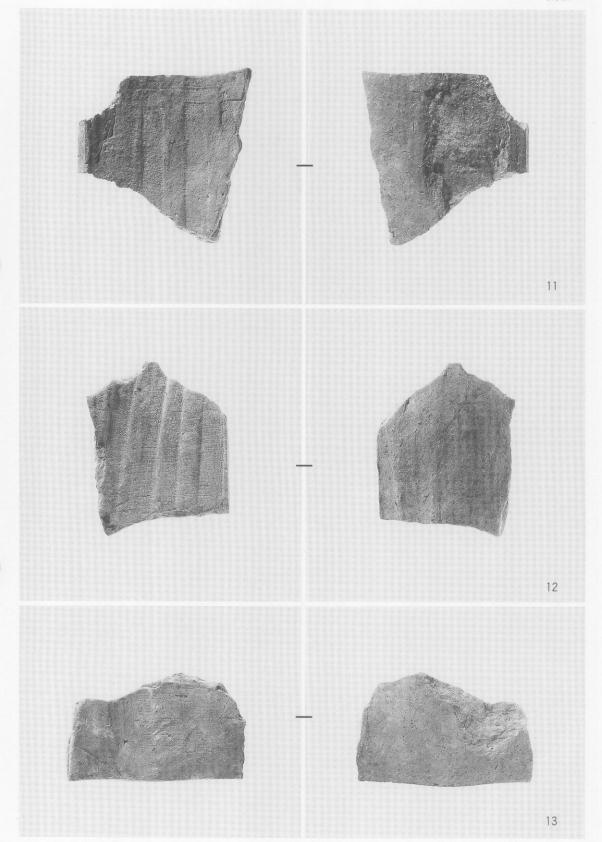
小田浦28地点出土瓦

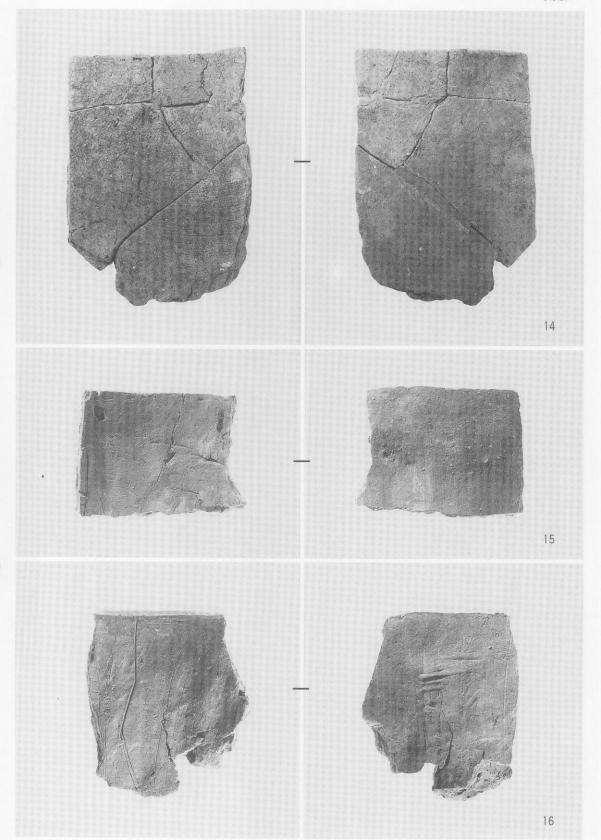


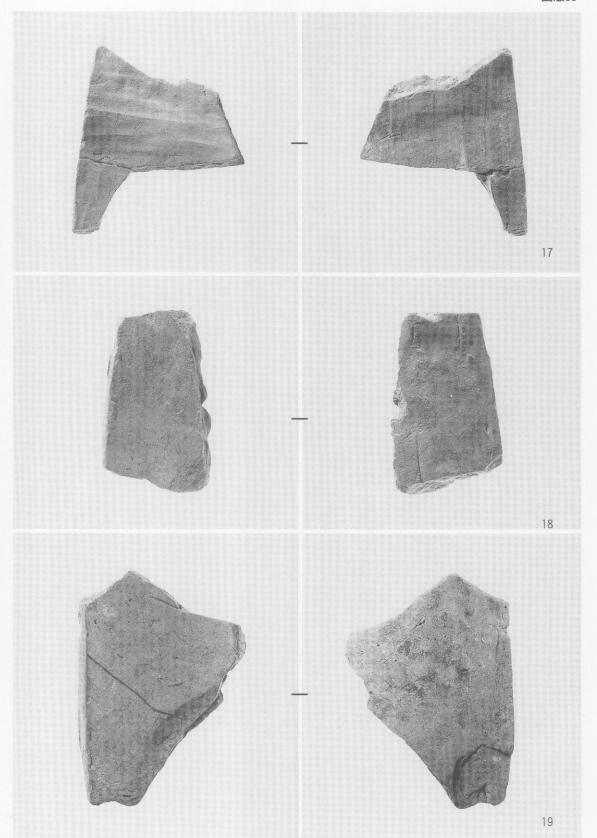
小田浦28地点出土瓦

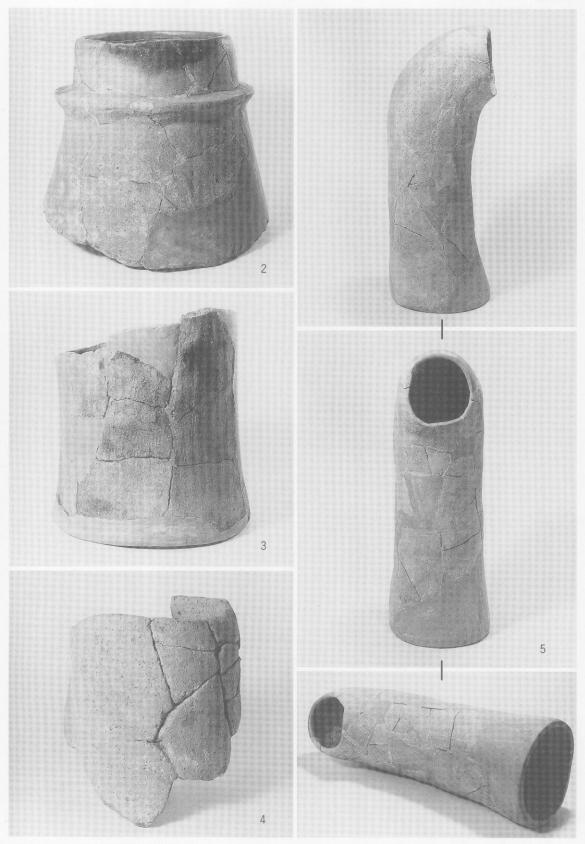


小田浦28地点出土瓦

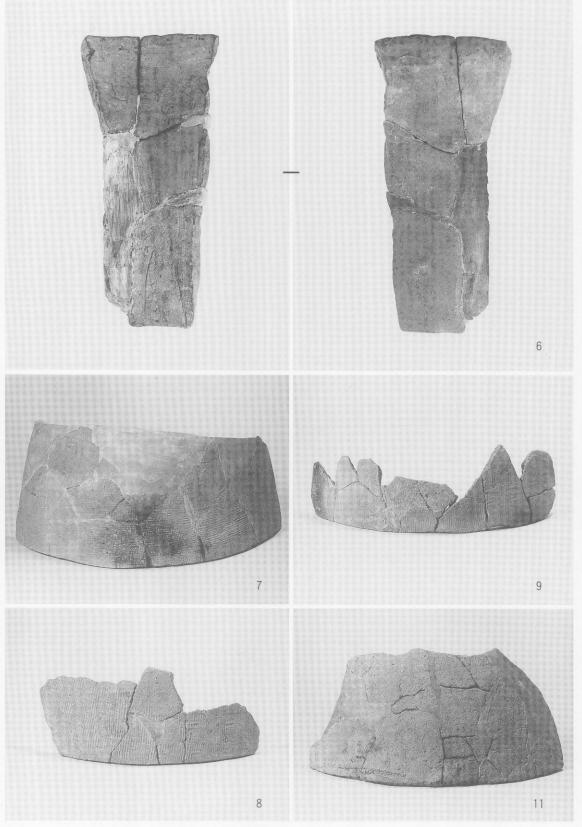




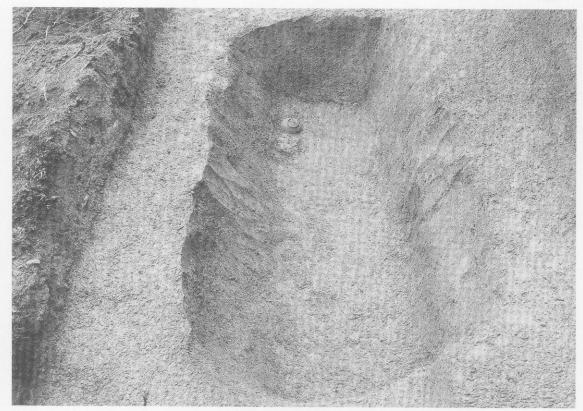




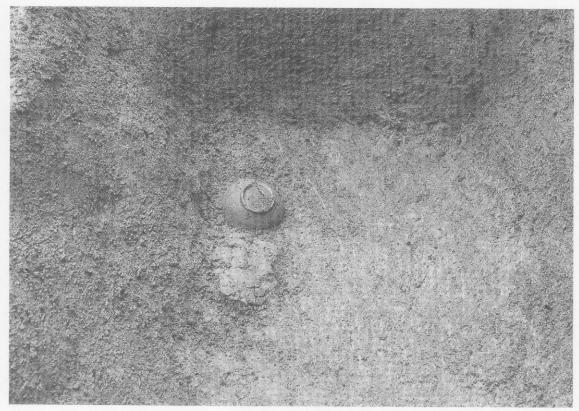
小田浦28地点出土円筒状土製品



小田浦28地点出土大型円筒状土製品・丸瓦状土製品



(1) 土坑墓SK01



(2) 土坑墓SK01遺物出土状態

大野城市文化財調査報告書

第 39 集

平成5年3月31日

発 行 大野城市教育委員会

福岡県大野城市曙町2丁目2-1

印 刷 陽明印刷企業組合

福岡県春日市春日公園1丁目3